

平成28年8月30日 台風10号豪雨体験談の記録集

—この体験を未来へ—

岩手県岩泉町

平成28年8月30日 台風10号豪雨体験談の記録集

— この体験を未来へ —

岩手県岩泉町



# 発刊にあたって



岩手県岩泉町長

中居 健一

平成二十八年八月三十日、観測史上初めて東北地方の太平洋側から岩手県沿岸に上陸した台風十号は、岩手県沿岸部に記録的な豪雨による爪痕を残し、当町をはじめ各地に甚大な被害をもたらしました。

当日の雨は異常な降り方で、山々は雨水を吸収できる余力はなく、ありとあらゆる沢から流れ出した雨水は、大地を削りながら濁流となり、立木も根こそぎなぎ倒し本流へと流れ込みました。流れた立木は橋に引っかかりダム状になって氾濫し、道路は土石流や河川の氾濫によって決壊し寸断され、町全体が孤立するという前代未聞の想像を絶する大災害となりました。

この台風十号豪雨災害により、二十五名もの尊い命と多くの財産を失いました。東日本大震災の被災が小本地区のみであったのに対し、本災害では町内全地区が被災し、被害額は東日本大震災の約十倍にも及ぶものとなりました。

この災害の経験を記録に残すとともに、後世への教訓と防災対策に役立てるため、町内全地区の方々からご協力をいただき被災体験談などを聞き取り調査し、後世への貴重な資料としてまとめることができました。各地区の当時の様子が生々しく語られております。

現在、町では災害に強いまちづくりを目指し、地域防災力の向上と伝達手段の強化を図っているところであり、防災・減災体制の確立を進めております。復旧復興も道半ばではありますが、先人が相次ぐ災害を乗り越えてきたように、私たちもこの苦境を乗り越え明日への一步を踏み出していかなければならないと決意を新たにしております。

ご協力をいただきました皆さまに感謝を申し上げ、発刊にあたってのあいさつといたします。

8月30日、急激な河川の増水により町内各地で氾濫・浸水や土石流が発生しました。一夜明けると上空からその様子が確認できたものの、無数の道路寸断により支援・復旧活動は難航しました。



中島上空

三陸復興  
国立公園

中里上空



# 岩泉町管内図

## 台風 10 号に伴う主な道路寸断箇所



安家大平上空 道路で立往生した車両



小川中学校上空



褰綿上空



当日夜 岩泉橋前の流木と瓦礫（8月30日21:42）



二升石小学校校庭に描かれたSOS（8月31日7:02）



岩泉橋より見る小本川（8月31日5:42）



二升石 国道決壊箇所（9月2日14:07）



惣畑 道路決壊箇所を歩く人々（8月31日5:55）



向町 片付けに追われる（9月2日12:03）



志田 清水川沿いの氾濫（8月31日6:16）



向町 車も多く被災した（9月2日11:48）

【災害の状況】 岩泉地区（乙茂・鼠入）



乙茂 陸上競技場は川の一部に（8月31日9:57）



鼠入 被害状況（9月3日11:13）



道の駅いわいずみ前（9月2日10:07）



鼠入 破壊された道路（9月3日11:04）



乙茂 ひっくり返った消防車（9月3日15:03）



乙茂 道路復旧のため行き交うダンプカー（9月3日15:10）

【災害の状況】 岩泉地区（龍泉洞の水量変化）



8月31日6:19



9月5日8:08



9月27日7:45





三田貝 国道455号冠水 (8月31日 10:19)



穴沢 道路の片付け (8月31日 8:17)



流された名目入橋 (8月31日 11:03)



襦綿 田中橋 (8月31日 8:39)



土石流跡に設置された水汲み場 (9月1日)



一ツ苗代上空 (8月31日)



園庭がえぐれた こがわこども園 (9月4日 8:37)



大久保 道路状況 (9月5日 14:18)



浅内 土砂崩れによる県道寸断 (8月31日 12:52)



釜津田 トラクターでの土砂片付け(8月31日) ※写真提供: 三上亜希子



浅内大沢 (8月31日 13:23)



釜津田 県道大川松草線決壊箇所 (9月1日)



寄部 道路寸断箇所を越える (9月5日 16:33)



駒ヶ沢 牧野の短角牛は無事 (9月13日 14:19)



押角峠被災状況 (9月3日 13:12)



釜津田 牧草地に流入した土石流 (9月14日 13:18)



防災センター周辺も冠水（8月31日5:50）



中島 国道の状況（8月31日13:44）



小本川河口に流れ着いた流木（8月31日13:27）



卒郡 運び出された被災家財（9月1日10:35）



赤鹿橋（9月3日15:27）



中島 運び出された被災家財（9月6日11:19）



中里 がれき置き場（平成29年4月5日）



中島 泥に浸かった稲の芽吹き（10月4日12:24）



江川川の氾濫で寸断された県道（8月31日15:10）



折壁 傾いた携帯基地局



中の橋の流木（9月1日9:54）



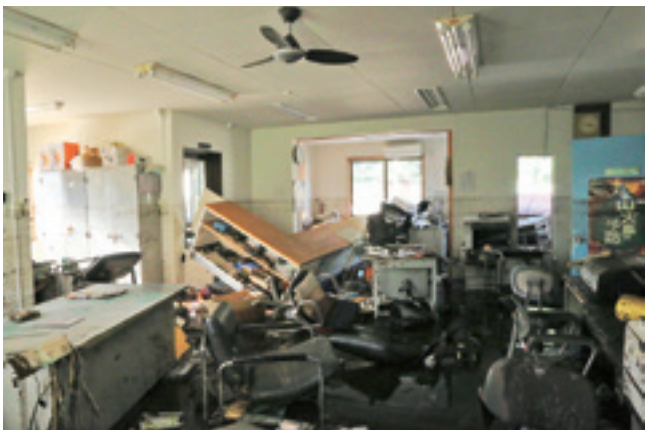
大平 応急の丸木橋（9月15日11:27）



日蔭 壊れた道路を歩く（9月1日11:02）



破壊された大平方面への県道（9月4日13:27）



被災した安家支所（8月31日15:40）



川口橋付近（9月1日9:30）※写真提供：川口肇



上有芸 道路が川に（8月31日）※写真提供：佐々木精一



松屋敷 道路状況（8月31日）※写真提供：佐々木精一



水堀への道路が途絶えていた（9月1日）※写真提供：佐々木精一



肘葛 道路・電柱被害（9月3日9：50）



水堀 農家に流れ込んだ大量の土砂（9月2日）※写真提供：佐々木精一



猿沢 県道寸断（9月1日）※写真提供：佐々木精一



住民による水堀への道路復旧工事（9月4日）※写真提供：佐々木精一



猿沢・有芸と岩泉を結ぶ乙茂橋決壊（9月2日10：27）



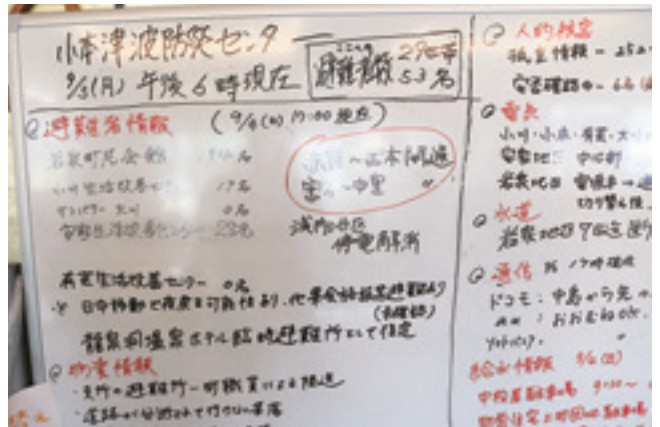
町民会館避難所の様子 (9月9日10:04)



月出公民館避難所



町民会館に届いた支援物資 (9月4日11:04)



小本津波防災センターにおける情報提供 (9月6日11:50)



小本津波防災センターでの炊き出し (9月15日9:31)



龍泉洞温泉ホテル避難所での健康体操(9月15日ごろ) ※写真提供：龍泉洞温泉ホテル



小本津波防災センターで提供されたおにぎり (9月2日13:07)



小川・滝の上仮設団地の建設風景 (11月16日)



ボランティア受付に並ぶ皆さん（10月9日8:15）



小川 キッチンカーによる炊き出し支援（10月5日11:56）



床下の泥出しボランティア（9月10日9:19）



サンタが100人やってきた（12月24日）



安家 高校生の皆さん（9月22日10:42）



支援団体の協力のもと、移動巡回による物資提供



民家庭先の泥出し作業（10月23日11:07）



薪割りボランティア活動（平成29年3月24日）



自衛隊ヘリで救助された住民（9月4日 10：17）



安家にて仙台消防局ヘリに救助される住民（8月31日ごろ）



捜索活動を行う警察（9月9日 11：20）



龍泉洞に集まった緊急消防援助隊（9月1日 8：24）



合同指揮本部会議（9月1日 18：49）



安家 消防団による重機での道路片付け（9月1日 9：47）



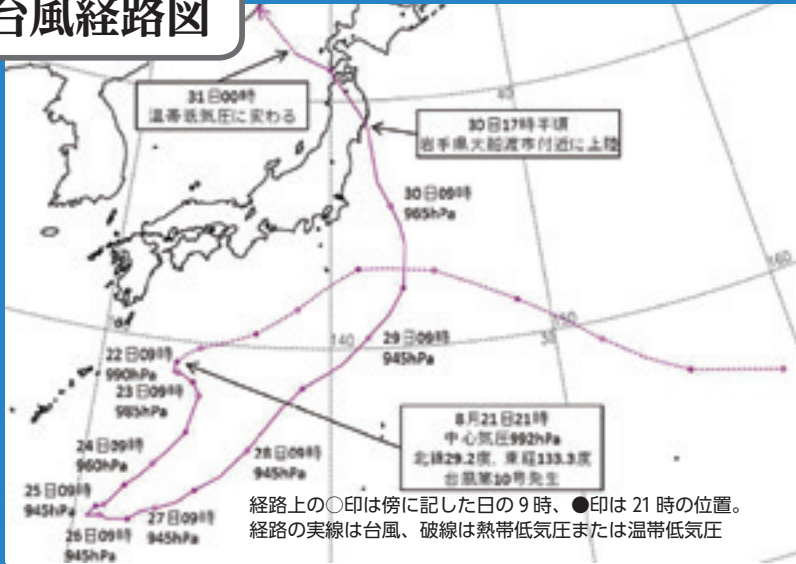
小川 撤収する自衛隊を見送る住民（9月17日 10：13）



電源車による電気の供給（9月1日 16：58）



# 台風経路図



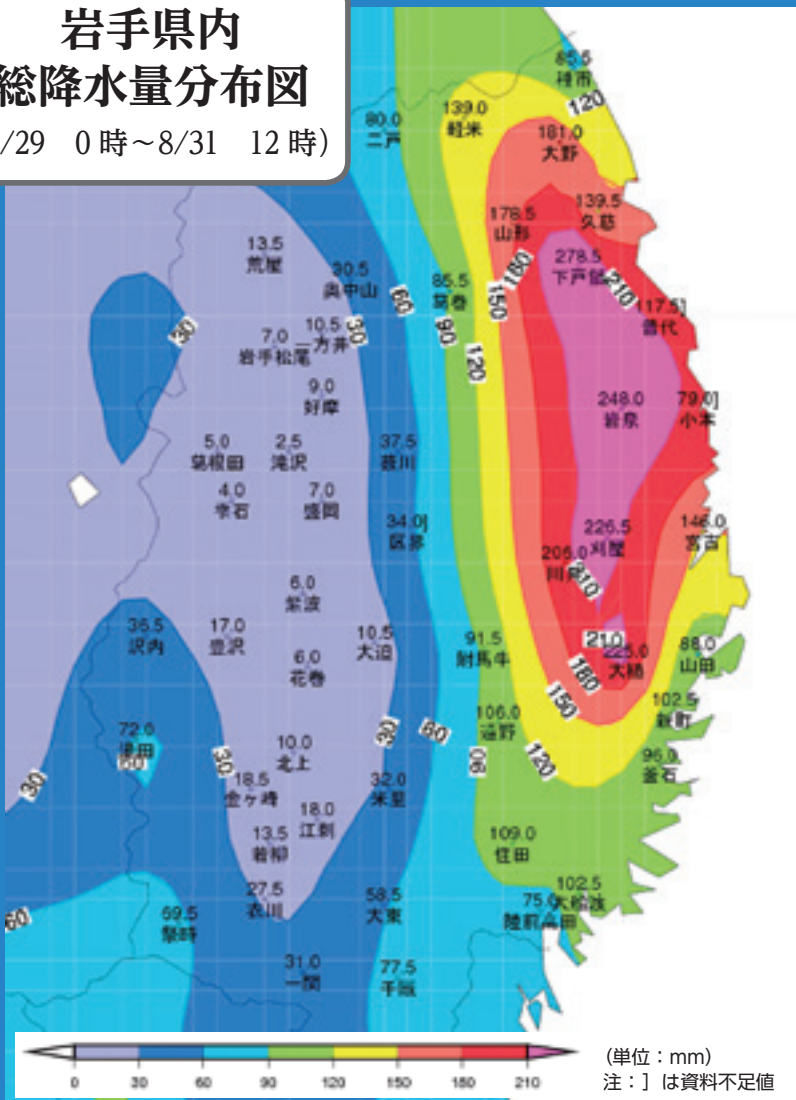
経路上の○印は傍に記した日の9時、●印は21時の位置。  
経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧または温帯低気圧

## 迷走したのち、観測史上初めて東北地方太平洋側へ上陸

資料：気象庁 Web サイト  
[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji\\_201701.pdf](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_201701.pdf)

# 岩手県内 総降水量分布図

(8/29 0時~8/31 12時)



## 久慈市・岩泉町・宮古市周辺で集中的な降水を記録

資料：気象庁 Web サイト  
<https://www.jma-net.go.jp/morioka/saigaidata/saigaisiryou16-3iwate.pdf>

# 平成28年 台風10号 について

8月17日 9:00	南鳥島の東北東(海上)で熱帯低気圧が発生
8月21日 21:00	四国の南海上で台風10号が発生
8月30日 5:19	大雨(土砂災害)・暴風警報
8月30日 9:00	町が町内全域に避難準備情報を発令
8月30日 10:16	大雨(浸水害)・洪水・高潮警報
8月30日 12:37	土砂災害警戒情報
8月30日 14:00	安家地区の一部133世帯に避難勧告を発令
8月30日 17:30	台風が大船渡市付近に上陸・之茂で浸水始まる(内閣府調査)



激しく降る雨 (8月30日)



乙茂 パークゴルフ場の浸水(8月30日 17:23)

# 目次

発刊にあたって

岩泉町長 中居 健一…………… 3

巻頭カラー…………… 4

…………… 16

目次…………… 17

…………… 18

## I 台風10号豪雨体験談

### 岩泉

「一致団結し災害に対応」…………… 20

「娘の存在に救われた」…………… 24

「人びとの生活力を実感」…………… 27

「突然、国道は激流に」…………… 30

「乳牛を何とか生かした」…………… 34

### 小川

「自助と共助で守る命」…………… 37

「指示を待たず動くこと」…………… 41

「頂いた支援を力に」…………… 45

「黒電話が役に立った」…………… 49

「孫を背負い、てんでんこ」…………… 52

### 大川

「断水の長期化で困った」…………… 56

「夫婦お互い助け合った」…………… 58

「地域力で命をつないだ」…………… 61

### 小本

「暗くなつてからの混乱」…………… 65

「消防団で泥出し活動」…………… 68

「就寝中に気付いた浸水」…………… 72

「公民館が拠り所に」…………… 75

「職場の重機が活きた」…………… 78

### 安家

「クルミの木の丸木橋」…………… 82

「短角牛は山にいて無事」…………… 85

「薪ストーブは必需品」…………… 88

「山仕事の技術が活きた」…………… 90

「『山津波に注意』を実感」…………… 94

「もはや津波の状態」…………… 96

「なかなか夜が明けなかった」…………… 98

「生きた心地がしなかった」…………… 101

「息子を起こしに自宅へ」	日向	林下 ユミ	103
「二階で一夜を過ごした」	日向	松原 咲子	106
「偶然、助け出された」	日蔭	下タミヨシ	108
「被災した商店を再開」	日蔭	玉澤 明德	110
「伝承から見えること」	日蔭	中居仁太郎	114
「避難所へ行けず高台へ」	日蔭	日向 敏江	116
「川のそばでの生活は夢に」	日蔭	森子 芳和	119
「自給の大切さを実感」	川口	川口 肇	122

## 有芸

「協力して水道・道路復旧」	上有芸	佐々木精一	125
「言い伝えは本当だった」	栃の木	工藤 幸雄	129
「影形も無くなった風呂場」	肘葛	佐々木 宏	132

## II 台風10号資料集

時系列でみる関係機関の対応状況	136
気象・水位データからみる当日の状況	137
被害状況	138
岩泉町消防団について	139
支援の動き・仮設住宅について	140
町歴史民俗資料館（町教育委員会）による被災関連資料の取り扱い	141
体験談に寄せて	143
編集者より	143
あとがき	144
岩泉町危機管理監	佐々木重光
岩泉町歴史民俗資料館	岸岡 健太
岩泉町教育委員会教育長	三上 潤

## コラム一覧

台風10号・岩泉町における畜産関係被害	36
災害を忘れない① 平成25年7月国境・見内川地域集中豪雨	40
台風10号における土砂災害	51
てんでんことは	55
霞堤と川の逆流	71
台風10号・災害当時に役立った身の回りの存在	84
安家・高須賀に伝わる大洪水の伝承	89
安家・高須賀の伝承から考える	93
災害を忘れない② 平成18年集中豪雨	100
安家に伝わる大洪水の伝説	105
災害を忘れない③ 昭和23年アイオン台風	107
岩泉町の橋供養塔	113
災害を忘れない④ 大正2年に東北地方を直撃していた台風	121
インターネットで川の水位を確認する	128
インターネットで川の洪水危険度などを確認する	131
台風10号・道路全面通行止めの解除時期	134

※コラムの内容は編集の都合上、掲載ページの体験談の内容と必ずしも関連しない場合があります。

## 災害体験談の募集について

### 【調査の流れ】

調査は平成29年度から実施しました。各地域振興協議会および支所に依頼して話者の紹介を受け、町歴史民俗資料館担当者（教育委員会および岩泉町地域づくり支援協議会）が聞き取り調査を実施し、内容を記録しました。（もしくは寄稿）

### 【話者について】

対象は岩泉町民としました。

- (1) 家屋、田畑、牛舎、仕事場などが被災した人
- (2) 居住地が道路の寸断で孤立した人
- (3) 避難所生活をした人
- (4) 消防団や世話人として避難誘導や救助、被災者の支援を行った人
- (5) がれきや土砂の除去作業にあたった人
- (6) その他 (1)～(5) 複合的な立場の人

- ・各地区の被害状況なども考慮し、地区ごとの人数には偏りがあります。
- ・話者（筆者）の居住地（行政区）と年齢は台風当時のものです。

### 【質問項目】

当時の状況、心情／教訓・伝承／地域で語りつがれている災害に関する話／その他

# 台風10号 豪雨体験談



泥から掘り起こされた飲料に助けられた (9月5日 10:48)

## 一致団結し災害に対応



二升石

三上 幸政

(七十四歳)

### 当日の状況と対応

#### 【自治会の体制】

私は当時、自治会長を務めていました。自治会活動は普段から活発です。役員は十四人態勢で、半数以上は会長経験者です。地区で火事や災害があれば、夜中でも消防団と地区民が出て、女性は炊き出しをしますし、翌日になれば住民が出て手伝います。費用は自治会の予算でまかなうことになっています。こうした体制をもとと確立していたので、今回も、スムーズに体制をとることが出来ました。

#### 【午後から氾濫箇所の対応】

私は県の土木事務所での勤務経験があり、除雪の仕事もしていたので、災害の現場を見る機会も多くありました。過去の岩泉における大雨災害の時とは違う天気図に、危険を感じましたが、その時点ではそこまでひどくはありませんでした。十三時ごろ、地区の三人の要請を受けて避難所の集会施設を開け、副会長に備蓄の毛布などを出してもらいました。

大雨により、四力所の沢が危険な状態となり、十五時半ごろから消防団や消防署員・地区の人たちと一緒に、対応にあたりました。私がいた現場では、とある家に沢水がぶつかってカバ沢が氾濫し、下流の二世帯を守るため土のうを積みました。さらに鉄道跡の暗きよが土砂で詰まり、そこから水が四方方向にあふれ、下流で床下浸水が多く発生してしまいました。

#### 【追いつかない量の土砂】

また、国道にも土石流が流れ消防車や救急車が足止めされたので、トラクターで取り除こうとしたものの、暴風雨で全く前が見えず、次々に流れて来る多量の土砂に対応できませんでした。国道の水は長靴以上の深さとなっ

ていました。

そのころ、自宅は電話が鳴り続き、妻が応対していました。多くは「応援を頼む」という内容でしたが、応援を出せる状況にありませんでした。



土石流が発生した沢（後日撮影）

#### 【暗くなり作業終了の指示】

十八時半ごろには消防署員から「二次被害が出るので作業を止めてください」という呼びかけがありました。なかなか皆は作業を止

めようとしますが、最後は強い指示で全員が引き上げました。まだ雨も降っており、きりが無い状態でした。

当初の避難所では、近くの沢が鉄道橋に掛かった木でせき止められ、建物まで二十〜三十センチまで水が迫ったので、消防団員の判断で避難者を二升石小学校の体育館に移動させたそうです。

## 【夜間の対応・発電機の panne】

私が帰宅し着替えをしていた二十時ごろ、避難所から七十人前後の避難者がいるとの連絡を受けました。食料を届けようかという話をしましたが、今は危険と言われたので翌朝にすることにしました。避難所にはその晩、消防署員・団員、役場・学校職員、自治会役員などがおり円滑な運営が出来たようです。

二十一時ごろには水位も減り始めており、自宅に水が来ることはありませんでした。二十二時ごろに町に電話をして地区の状況を報告し、さらに副会長と炊き出しについて打合せを行いました。

私は仮眠を取りつつ、避難を拒んでいると消防団員から相談があった家の様子を時々見守りながら、一晚を過ごしました。その家には車いすを使っている一人暮らしの男性がお

り、川の水が迫る中、家に留まっていた。理由は分かりませんが、避難所に車いす対応のトイレがないからではないかと察しました。

停電の中、発電機が役立ちました。我が家の発電機はインバータ付きではないためテレビは見られないものの、冷蔵庫と地下水のポンプが動かさずし、ガスと薪のコンロもありました。震災の経験から、停電や断水に対し備えてありました。他にも震災を機に発電機を備えていた家は複数あり、その後の炊き出しにも活用出来ました。

ある役員は、近所の広場に多くの立往生した車がいたので、発電機で電灯を点け、トイレを貸したそうです。

## 翌日以降の状況と対応

### 【炊き出しの開始・スーパーの協力】

三十一日は炊き出しのため、六時ごろに女性たちが、発電機を備えた私と副会長二人の家に、それぞれ約十人ずつ集合しました。食材は持ち寄り、朝には自宅に米が五十キロも届いていました。多めにおにぎりを準備し、七時半ごろには避難所を持って行きました。百人分はあつという間になくなってしまいました。

した。

その時、体育館に知らない人が籠を背負って入ってきました。車で立ち往生して近隣の工場に避難した約五十人に炊き出しを分けてほしいとのことでした。量が足りないのです、消防団員の役場職員が役場と連絡を取って地区のスーパーを開けてもらい、食材を分けてもらえることになりました。全て無償で、記録を書き残し、口頭でお礼を伝えただけです。



長安寺南側の沢、鉄道橋にたまった流木など

炊き出しは、九月三日の朝まで、一日三回

続けました。立ち往生していた人たちは車を置いて線路を歩いて帰った人もいれば、迎えに来てもらう人もおり、徐々に帰宅してゆきました。いったん国道が開通した時に車で帰れた人もいるようですが、強引にすれ違う車があったために、再び通行止めとなりました。三日には避難者が約二十人まで減っていました。その日、岩泉方面の国道が開通したため、避難所は閉鎖となりました。

## 【道路の復旧作業の決断】

三十一日は、二升石が孤立していた上に、およそ二割の世帯は地区内でも孤立していました。そのため、重機を持っている人は八時ごろから自主的に流木や土砂の撤去作業を開始していました。

私は炊き出しのあと、九時半ごろに役場に電話で状況を伝えました。すると、混乱し余裕のない状況や、自主的な片づけに関して事故の発生を恐れている様子が感じられました。自前の重機で作業する人の技術はプロ級ですが、手伝う地区の人は慣れていませんから、仕方ないことだとは思いますが。

やむを得ず、自治会三役として独自に道路の復旧作業を決断したのですが、本来は役員会での合意を得るべきでした。皆が機械代は

この際どうでもよいという考えになっていましたが、自治会の予算は年八十万円程度ですから、万が一の人身事故で多額の出費が発生した場合には大変です。一方で、自主的に作業を始めていた人も多く、「決断が遅いのでは」という意見もありました。

道路には車や流木が散乱し、機械も限られており一つ一つワイヤーで引っ張るしかなく、撤去には時間がかかりました。なるべく一日二回は現場を見廻り、安全作業と事故防止を呼びかけました。



流失した二升石日影橋 (9月2日 14:35)

## 【それぞれが出来ることを】

二升石橋の例では三分の二が流木や土砂で覆われていました。二十人ほどで作業し、私はトラクターで流木などを取り除きました。流木は土砂混じりで、チェーンソーで切るとすぐ切れ味が悪くなり、何台も各世帯から用意して使いながら、橋は何とか三十一日に通れるようになりました。

女性や機械を使わない人も、五、六人のグループでごみの片付け、泥さらいなどの作業を行いました。また、避難所の人たちも、町道などの清掃に加わりました。

避難していた他地区の人からも「機械があるなら応援する」と申し出がありました。ただ、地区民同士なら声を掛け合うのですが、知らない人だと遠慮しての事故発生の危険性もあり、断らざるを得ませんでした。

こうした道路の復旧作業は、九月三日に一段落しましたが、その後も国道の汚れがひどく、清掃活動が行われました。

作業の際には、一回だけ町民会館で支援物資のパンを受け取り、配りましたが、あとは手弁当で参加してくれました。

## 【断水への対応・役場との調整】

二升石では、停電が復旧しても町水道の復旧には一カ月以上かかりました。給水車による給水が続き、ポリタンクを町民会館からもらってきたりもしました。しかし重いので、ペットボトルでないと持ち運べない人もいました。各班長には、全体に水が行き渡っているか気を付けてほしいと依頼しました。

給水車は、予定どおりに来ないこともありました。当初二三日は自衛隊、その後は県内外の各地から応援に来てくださっている中で、やむを得ないものの、連絡なしの時間変更や大幅な遅れの場合、役場に多くの苦情が行きました。「暑い中、二時間待っても来ない」という話を聞いて役場とも相談し、予定変更の場合は早急な連絡をお願いしました。八カ所の掲示板で知らせ、各班長にも知らせる対応をとったところ、苦情が無くなったようです。

そのほか、住民からはライフラインの復旧などについて、役場へ伝えてほしいという様々な要望を受けました。しかし、他の地域の状況を聞くと、二升石は世帯数こそ多いものの、家屋の流出は一軒と被害が少なく、二升石だけがひどいようには話せないと思い、遠慮がちに要望しました。

一方で、役場からは沢沿いの工事に際して流域住民の同意を得てほしいという要請もありました。停電や断水により遠方に避難した人は、十月になってから帰宅したので了解まで時間を要しましたが、役場の担当者は親身に考えてくれました。

## その後・振り返り

### 【普段から協力しているからいい】

機械を出して作業した人には、十二月から自治会として酒二升を持ってお礼に回りました。食材を提供してくれたスーパーにも「酒屋さんに酒をお礼するのも申し訳ないです」と渡すと「こちらこそ何もできなくて」とおっしゃっていました。被災世帯への自治会の見舞金は少額ですが役員会で決めた金額としました。

普段から集まりが多く、協力して、何でも意見を言い合っている住民同士だからこそ、一致団結してそれぞれが自主的に動き、災害に対応することができたのだと思います。最終的に事故なく終わったのが何よりです。今回の災害では、二世帯が地区から転居してしまいました。小さいころにカスリン台風やアイオン台風も経験しましたが、今回ほど

大きな被害は初めてでした。



半分流失した国道を行く車（9月1日）

### 【今後の課題】

今後は緊急の災害対応に備え、自治会費などで作業員や機械の保険加入がすぐ出来るよう検討する必要性を感じています。

（平成二十九年十一月十七日 聞き取り）



## 娘の存在に救われた



向町

田川 祐子

(二十八歳)



## 当日の状況

## 【避難準備に至るまで】

当時は一歳二カ月の娘と自宅のアパートで過ごしていました。午前中に父や友人からメールで避難をすすめられ、午後には避難を考えるようになりました。十六時ごろに小本川と清水川の合流地点を見ると、思った以上に増水しており、危険を感じました。電気工事会社に勤めている主人に電話をして、一旦帰宅してくれることになりました。

数日の避難を想定し、ベビーカーと着替え少々、貴重品を入れたバッグを準備したほか、ものを少し高い所に移動したりしましたが、焦って冷静には考えられませんでした。準備中には消防団の人が避難を呼びかけていまし

た。近所の女性から避難所は町民会館だと教えてもらい、主人の帰りを待ちました。



清水川の橋に掛かった流木 (9月2日5:27)

## 【十八時ごろに避難】

その後、主人が自宅に一時帰宅しましたが、すぐ戻らなければならぬようでした。十八時ごろ、主人の運転する車で出発しようとし

た時には玄関まで水が入って来て、近くの清水川に降りる階段は水没していました。車のタイヤが水に浸かり、長靴以上の深さなので、サンダルを履きました。

出発後、ものを取るため一度戻ることにになりました。およそ十分の間に信じられない勢いで水が増えており、アパートの前に車は入らず、手前に停めました。この時に同じアパートに住む足の悪いおばあさんがまだ避難していないことが分かり、一緒に連れてゆくことにしました。

## 【町民会館に避難してから】

町民会館に着くと、すでに多くの人が避難していました。手続きをして最初は二階の大会議室に案内されましたが、すぐに母子優先の部屋が作られ移動しました。当時、娘は何歩か歩ける程度で、まだ離乳食のほかおっぱいも飲んでいたので、食事と幼いながらにストレスが心配でした。夕食はおにぎりを出してもらったので、娘にも少し与えました。

災害用毛布を一人一枚ずつと、下に敷くマットをもらって寝ましたが、大人の着替えは持つてこなかったもので、雨で濡れたままで寒かったです。比較的静かでしたが、水の勢いを思い出してしまい怖くて眠れませんでした。

## 被害状況と対応

### 【自宅の様子を見に行く】

翌朝、借りた長靴を履いて向町の様子を見に行く、道路には大量の木があり、掘れたところもありました。どの家も窓が無くひどい状況です。自宅には泥や木くずが大量に入り、家具や家電はひっくり返り、臭いもひどく泣くに泣けない状態でした。近所の人たちは片づけを始めていましたが、私は子どもをおぶっていたので、その日は避難所に戻りました。

### 【片付けの開始】

私たちも二、三日後から、主人の休みに合わせて片付けを始めました。窓から自宅に入り、ものを外に出していきましました。水は一階の天井まで上がり、二階もすき間から水や泥が入ってしまいました。結局、無事だったのは布団が数枚と、干していた洗濯もの数着だけです。

十日ほどかかりましたが、友人が子どもを預かってくれたり、手伝ってくれたりしました。おんぶ紐を借りてからは、子どもをおぶって作業しましたし、ボランティアの方も手

伝ってくれました。



道路に出された被災家財（9月2日 11：45）

## 避難生活とその後

### 【食事とライフライン】

保健師さんは忙しい中、町民会館に来た時は声をかけてくれました。離乳食は、最初の数日は保健師さんと栄養士さんが作ってくれ

て、その後は支援物資のレトルトを温めて出してもらいました。

避難所の食事には、それほど不満はありません。炊事を手伝いたい気持ちはありましたが、娘が昼寝をしたり、ぐずると時間が合わず、中途半端にするのも嫌だったので、悩むうちに結局携われずに終わってしまいました。最初の数日は携帯電話が不通で、充電もできなかつたのですが、その後は充電設備が設置され、順番待ちではあるものの充電できるようにになりました。電気や水は使えましたが、制限があり、トイレなどは節水しながら使っていました。お風呂は、町内のホテルの無料開放が始まってから、入れるようになりました。

### 【洋服や洗濯など】

避難生活が長引くにつれて困ったのは、洋服です。まずは実家に電話をすると、車で持って来てくれました。また、子ども服は、支援物資をもらいに行っても、ちょうど良いサイズや秋冬ものが不足していました。そうした中で、友人がちょうど良いものを、何人ものお母さんたちから集めて持ってきてくれて、助かりました。

娘の紙おむつは手持ちのほか、保健師さん

が持ってきてくれたりもしたので、不自由は  
 しませんでした。

洗濯は、保健センターに設置された洗濯機  
 と乾燥機、男女別の物干し場を使いつつ、避  
 難所の部屋や屋外に干すこともありました。

### 【娘にうつろい】

娘は保育園には通っておらず、避難所は刺  
 激になったようです。階段の上り下りも避難  
 所で覚えました。皆さんに遊んでもらえて夜  
 はぐっすり寝ており夜泣きもありませんでし  
 た。娘は心配したほどのストレスはなかった  
 ように思います。

母子優先の部屋もありがたかったです。子ど  
 もは動き回りますし、誰のものかの区別がまだ  
 つきません。また、母親同士だからこそ分かり  
 合えることもありました。同室の人や、近所  
 の人とも避難所でよく話すようになり、様々  
 なことを教えてもらいました。娘がいることで、  
 こちらが救われているような感じでした。

ただ、同室のお子さんがとびひに感染した  
 ようで、娘も避難して約一カ月後に感染して  
 しまいました。耳と鼻に症状が出て触りたが  
 り、治るまで約二カ月かかったので、感染症  
 の情報共有は重要だと感じました。



町民会館におにぎりが届く (9月4日 11:01)

### 【気の紛らわし方】

時には避難生活に疲れ、笑えない時もあり  
 ました。そんな時は、車で出かけたり、散歩  
 をして気を紛らわせていました。自分ではな  
 りごとくあまり気にならない性格だと思っ  
 ていましたが、壁がないことは思いのほかス  
 レスなのだと感じました。

### 【仮設住宅にうつろい】

避難していた人たちも、徐々に生活の目途  
 が立って退所してゆきました。断水が解消し  
 て帰る方も多かったです。

私たちは仮設住宅への入居を考えていまし  
 たが、仮設住宅の話が出てきてからが長く感  
 じました。十月上旬に申し込み、入居でき  
 たのは十二月二十三日です。場所を選ばなけ  
 れば少し早く入居できましたが、長期化を想定  
 し、日当たり重視で選びました。

### 振り返って

#### 【娘にも経験を伝えたい】

岩泉には他人を自然と気に掛ける雰囲気と  
 まとまりがあるように思います。今回、まさ  
 か自分が家までなくすとは思いませんでし  
 た。当時は家族のことしか考えられませんが  
 したが、もっと早く気づいて行動すれば良  
 かったとも思います。

自分が考えているよりも自然の方が強い  
 で、「とにかく避難することが大事」と思いま  
 娘にも経験したことを伝えたいと思っています。

(平成二十九年十一月十四日 聞き取り)

## 人びとの生活力を実感



小屋敷

佐々木保美

(六十九歳)

### 当日の状況と対応

#### 【十五時ごろから強い雨】

当日、私は妻と家で過ごしていました。午前中は雨もほとんど降っていませんでしたが、十五時ごろから雨足が強くなりました。私は岩泉地域振興協議会の会長を務めており、本田の自治会長さんから「民家に水が入りそうだ」と電話があったので十六時半ごろに行くと、普段は水が無い沢から激しく水が流れ、一軒の家が浸水しそうな状態でした。流れを良くするために、三人でごみを取り除いたりしましたが、人力では及ばず「危ないから、もうやめて避難しよう」ということになり、帰宅しました。そのころ、消防や警察の車がパトロールしている姿も見えまし

た。後日、聞いた話では床下浸水と、風呂に水が入った程度で、避難はしなかったそうです。この近辺で水が入った家は、その一軒だけでした。

#### 【対岸で土砂崩れ】

十七時過ぎに帰宅したところ、普段は水が無い沢からの水が県道に流れていました。本田川の水もどんどん増え、ガラガラと岩が流れる音も聞こえました。

十八時過ぎに妻が「お父さん、土の臭いがある」と言いました。直後に「ツァーッ！ダーン！」と大きな音が聞こえて外に出ると川向いの県道脇の山が崩れており、土砂が五メートル以上の範囲で県道に流出し、車は通れなくなりました。家のある側の地質は石灰岩で、多少の水は地下に浸透しますが、崩れた側の花崗岩は石灰岩ほど浸透しないのが特徴です。

そうした中、安家方面から警察車両が家の方に入って来ました。安家に行く途中、土砂崩れで通れず戻ってきたそうですが、今度はこちらが通れず、お巡りさんは車を置いて歩いて町内に戻りました。

土砂崩れから一時間も経たないうちに、雨も止んで星が見えてきましたが、川の水はま

だまだ増えています。

電話も不通で、私が自治会長をしている小屋敷地区の安否確認もできず、見廻りたくても行けない状況にありました。



岩泉中学校周辺の冠水 (8月30日 18:00)

### 翌日以降の状況と対応

#### 【道路が開通し安否確認】

翌日の午前中に、建設業者さんが重機で道路の土砂を、とりあえず片側を車が通れるく

らいにどけてくれました。さっそく小屋敷地区の十世帯を巡回して、皆さんの無事を確認しました。避難所の町民会館までは距離があるので皆、家にいたそうです。

## 【町民会館へ】

続いて、全体の避難状況を確認しようと思いい、すぐに町民会館へ行くと、まだ混乱状態で情報も錯そうしていました。すぐに避難できなかつた人や、遠くから歩いてくる人など、まだ続々と避難者が来る状況にありました。

それから私は毎日、町民会館に通い物資の配給に携わりました。困っている人に物資が行き渡るようにすることが課題で、公平な配給のため現場に詰める人が必要となりました。まずは私と協議会の副会長二名と前会長、あわせて四名で一週間ほど午前・午後のローテーションを決めて現場に詰めることになりました。

しかし避難の長期化が見込まれたので、今度は被災しなかつた地区の自治会長さんと約十人でローテーションを組み、物資配給や炊き出しと、困っていることの情報収集を行いました。午前と午後に分けて一人ずつ配置し、それを一カ月ほど皆さんと協力して続けました。



一時通行止めとなった県道7号 (8月31日6:25)

なこともありました。

被災者は「これが欲しい」と言う人もいましたが、多くの人は物資置き場をぐるぐる回って自分で選んで持って行くので、いま何が求められているのか分からない時もありました。

被害の大きな地区は、代表の人が物資を受け取りに来るのですが、個人で来る人もあり、「そんなに必要かな」と思うような量を持って行く人もいました。物資には限りがあり、全員の要望どおりに渡すことは出来ないのので、感情的になる人も中にはいましたが、自治会長を配置したので、それほどトラブルは発生しませんでした。

## 【岩泉地域内を巡回】

台風から一週間経過したところから、岩泉地域全体の状況を把握するため、推進員や役員と巡回を始めました。道路が無いところでは、川原を歩いたりもしました。仮設住宅に入居するまで、壊れていても自宅にいたいという人や、畜産農家で避難出来ない人なども訪ねて行きました。見ると生活が大変だということとはすぐ分かりますが、様子を聞いても「まあなんとかな」と言い、困りごとはあまり言われませんでした。断水でも「なーにその沢

水でもご飯炊けるから」という感じで、生活力の強さを実感しました。

### 【自宅周辺の被害と暮らつて】

自宅は浸水しなかったものの、近所と共同の水道が壊れてしまい、断水となりました。タンクの残り水で一日分の煮炊きなどは出来たものの、新たに水が来なくなりました。さらに停電で、電気コンロが使えず、カセットコンロを使いました。

### 【ボランティアの宿泊拠点として】

一週間が経過したところから、知人などが、私の家の敷地にテントを張って寝泊まりしながら、ボランティア活動をしてくれました。多い時で七人、延べ三十人以上が、個人で来てくれました。活動時間は十五時までと決められていたのですが、わざわざ宿泊する以上は最低でも十七時まで働きたいという声が多く、こちらで遅くまで活動できる場所を探して、行ってもらうこともありました。

## その後・振り返り

### 【生活の変化と水道の復旧】

昨年十二月には対応が落ち着きましたが、すっかり変わった生活サイクルの影響は今でも引きずっています。

水道は、今年五月に新たに井戸を掘って復旧させました。当初は毎日朝晩、三百〜六百リットルの水をポリタンクに汲んで自宅のタンクに入れ続けていましたが、大変なのでおかしくなって「こんなところに住んでいられない」と思ったこともありました。その後、復旧までは近所の家にパイプで応急に水を引き、数ヶ月はそこから汲みました。

災害後、本田川は川底が削られて約一メートル下がりましたが、下流の清水川は土砂やがれきで浅くなりました。

### 【振り返って】

こうした災害を経験すると、確実に安全という場所はないと感じます。避難指示や勧告の前でも、報道を見て危ないと思う世帯は避難することを呼びかけたいです。

また、増水時に、龍泉洞から上流の河川敷の木に流木などが引っかかると、ダム状にな

り危険だと以前から言われていました。そこで、沢廻の自治会長さんと話し合い、減災のために有志グループにより、三年計画で伐採を進めている途中で今回の台風が来てしまいました。その後も伐採が続けていますがまだ進める必要があります。これも台風への備えです。



川底が洗われた本田川 (9月11日7:28)

(平成二十九年十一月二十二日 聞き取り)

## 突然、国道は激流に



乙茂 おとも

熊谷 敏子

(六十七歳)

### 当日から翌朝にかけて

#### 【避難の準備】

当日は自宅に一人でおり、次男の嫁と1人で「避難の準備はしようね」とやりとりしていました。次男夫婦は、荷内川に孫二人、私の母と住んでいます。雨は十五時ごろには激しくなり、近所の皆さんはおにぎりを作ったり、早く食事して寝ようと思ったりしていたようです。

#### 【突然の浸水】

十八時過ぎ、次男から「おっかあ避難するぞ」と電話が来ました。職場から帰宅した直後に裏山が崩れたそうで、リュックを背負っ

て次男の迎えを待つことになりました。その時、突然ガシャーンと国道に面した玄関のガラスが割れ、水が入ってきました。流れてきた長靴を履き、玄関を無理やり抜けながら次男に電話して「来ないで！何だか水が来た！」と叫びました。



道の駅いわいずみ裏 (8月30日 17:47)

まず、高齢の女性が一人で暮らしている、道路向かいの鉄骨造りの家に向かおうと考えました。しかし、すでに道路はひざの深さの激流で、隣の家の男性と息子さんが、私を止めました。その後、息子さんが飛び込み、対

岸の家まで渡り、女性を二階に助け上げてくれたそうです。

周辺の車は、防犯ブザーを鳴らしながら浮かび、車もがれきも飛ぶように流れ、時々家におつかって音を立てました。

私は庭木につかまり、家の脇から山に向かおうと思いましたが、斜面を水が流れていて上がりません。少しでも高いところを目指してビニールハウスの骨などにつかまりながら姪の家を目指しました。水は胸の高さまで上がり、ここで転んだら駄目だと思いながら進みました。

#### 【姪の家に避難】

姪の家は国道からは約一・五メートル高いので、その向かいの家の親子も避難してしまいました。どんどん水位が上がり、四人で「うわーっ」と叫びながら家に入ると、すぐに一階に水が入ってきて二階に上ることにしました。姪に「貴重品は？」と聞くと引き出しから探し始めたので、「そのままよこせ！」と引き出しを二階に運びました。間一髪でした。

とにかく座って、リュックに入れていた懐中電灯をつけました。財布と携帯電話と、確か薬も入れていました。しかし飲みものや食べ物のは誰も持っていません。そのうち携帯

電話は不通になり、充電も切れてしまいました。外から「助けてー」「おいおい」という声が聞こえるものの何もできず、四人で「あまた聞こえるーっ」と耳をふさぎました。ほとんど眠れず、空腹も感じませんでした。

明け方近くに「誰かいるーっ？」と声が聞こえ、裏口から入ってもらいました。それは甥で、消防団で活動中、水に襲われて消防車がひっくり返り、自身も流されたそうですが、何とか岩につかまって山に登って助かったのだそうです。今までの話をして、明け方に甥は出て行きました。

## 翌日の状況と対応

### 【声掛けをしながら上流へ】

朝、一階には大量の泥が入っていました。一緒に避難した親子と何とか外に出ると、一面に泥や真砂土、がれきがありました。何とか歩けるものの、沢水がまだ流れており、長靴に水が入りました。

私は家々に声を掛けながら、荷内川方面へ歩きました。多くの家は階段に泥やがれきが詰まり、二階から降りられません。一緒に親子は、旦那さんが岩泉方面から歩いてきたので途中で戻りました。



流失した国道（8月31日12：15）

途中のマツフガネという場所で道路が決壊しており、山を越えて行きました。次男宅には犬だけがあり、家の裏では水がザーザーと流れ、物置と畑に土砂が流れていましたが、家は無事でした。

### 【初めて飲みものを頂く】

再び戻って道の駅に行くと、社員さんが泥に埋もれていたペットボトルのお茶を見つけてくれて、洗ってようやく何かを飲むことが

できました。一緒に洗いつつ、近所の人と配り歩きました。ただ、二階には渡せず、下に置いて「取りに降りて」と言うしかありませんでした。マスクミの皆さんも来ましたが、カメラを向けられても、何も言葉がありません。

### 【二階に孤立していた人たち】

二階の人たちは熱中症が心配されました。安否確認の結果や、避難させた方が良い人なども書きとめました。連絡手段がありません。そのうち民生委員さんや部落会長さんとも話ができ、「この家も車を流されてしまった、誰が車を持っているだろう」と相談しました。

まず、その場にいる人で何とか家の玄関や階段の泥を掘り、通れるようにしました。泥とがれきばかりで大変でしたが、ごうごうと出ている沢水で、泥だらけの手や体を洗うことはできました。

## 翌々日以降の状況と対応

### 【二日目、初めて口にできた食べ物】

九月一日には、徐々にきれいになっていった沢水と発電機を使ってごはんを炊いてもらい



ました。おにぎりにして、「一個ずつだども」と言いながら、一人が電灯を照らし、一人が配って歩きました。それが初めて口にした食べものだったように思います。本当にありがたかったです。

### 【三〇四日目、支援物資が届く】

三日目に来た消防車を止めて状況を説明すると、すぐに避難者に乗せて小本津波防災センターに運んでくれました。そこからは、すぐに水とおにぎり、マスクなどの物資も入って来ました。それまでは本当に心細かったです。

最初の数日は、自宅には手は付けず、避難した家に泊まらせてもらいながら出来ることを行いました。部落会長さんが町民会館に物資を受け取りに行けることになったので、要望を聞いて回ると皆、必要なものが分からないように、「長靴は?」「バケツは?」と聞いて気づくような感じでした。どの家も窓が壊れており、蚊取り線香の要望もありました。

四日目に、家族と町民会館に避難していた次男が、田野畑経由で来て、長靴や電灯、発電機、マスクなどを持ってきてくれました。私がテレビに映っていたと知らせた人がおり、無事は知っていたようです。乙茂の住民

が町民会館と小本津波防災センターに分かれて避難していると教えてもらいました。



泥から掘り出された飲料 (9月5日 10:47)

### 【二時避難、その後は次男宅へ】

次の台風十二号が来る時には、役場からバスが来て避難するように言われ、手分けして声を掛けあいましたが、避難しなかった人もいました。私は一晩だけ避難し、すぐに帰っ

てきました。

その後は、次男の嫁と孫たちは関東の嫁の実家に、母は犬と一緒に関東の兄弟宅に預けました。私と次男は荷内川に移り、ハワイにいる娘が九月十日に来てくれて、一カ月ほど三人で暮らしました。

発電機で明かりをとり、水は給水車でしのごしました。ガスは使えたものの、家で炊事や洗濯はせず、風呂も入りませんでした。三日に一度ほど保健センターに洗濯機を使いに行き、無料開放されたホテルのお風呂に入ってきました。

### 【片付けについで】

乙茂から一緒に一時避難した人で町民会館に残った人はいなかったようです。周囲では家の片付けも本格化し、親せきや子供たち、ボランティアさんに手伝ってもらいながら、たちまち片付けていて「すごいな」と思いました。私は道の駅に降りてくるボランティアさんたちを、各家に「今日は三人でいい?」とか聞きながら案内したりもしました。

私がボランティアさんを頼んで自宅の片付けを始めたのは、娘が来てからです。次男が窓を壊して家に入り、位牌探しから始めました。様々なものが腐ってすごい臭いでした。

泥や倒れたものが重なっている所は、なかなかきれいになりません。水は家の中でおよそ一メートル八十センチまで上がったようでした。

途中、私だけスズメバチに刺されてかなり腫れてしまい、済生会病院に運ばれました。入院して点滴を受けていると、急にあちこちが痛くなって大変でしたが、初めて横になって休めた気がしました。それまでレトルトご飯と缶詰でもご馳走だったので、病院食は豪華に見えて申し訳なく感じました。

## 【その後の物資、ライフライン】

その後、物資は軽トラがある人たちが交代で受け取りに行ってくれて、助かりました。ただ、要望どおりのものが全て来るわけではありません。そのうち道の駅にプレハブが建ち、町民会館から来たカセットコンロとやさんでお湯を沸かせるようになりました。それまでカップラーメンもお湯が無いと食べられなかったのです。停電復旧の際にはコンセントの点検の必要性から家によって時間差があり、明かりがうらやましく感じました。断水の解消は遅く、皆が沢水も使っていました。

## 【仮設住宅への入居】

仮設住宅には多くの人が申し込みましたが、家を直しながら二階で暮らす人も徐々に出てきました。私は、正月に母と嫁たちが荷内川に戻ったのを機に、仮設住宅へ入居することになりました。防音性も良く快適です。週に一度、集いが開かれ、それぞれの状況などを話しています。

自宅は平成二十九年十月に解体しましたが、更地になってみると寂しいです。再建にはかさ上げが必要なようです。乙茂の人たちも様々な場所におり、部落会も機能していない状態ですが、家を再建する話もぽつぽつ出てきました。

## 振り返って

### 【過去の大雨・今後の課題】

過去にも沢の増水で国道が水浸しになるなどの大雨はありましたが、低地の一軒を除いて家の浸水は記憶にありません。アイオン台風でも川が大きく変わったそうですが、多くの方が家の浸水は初の経験だと言っています。

乙茂では、これまでも炊き出し訓練や、防災についての勉強を続けて来ましたが、実際

には機能しませんでした。公民館はほぼ天井まで浸水したので、高台に再建して避難所にするか、高い場所の空き家などに備蓄が必要と考えられます。道路が寸断されると、すぐに救援物資は届かないので、地域の中で出来る人が出来ることをすることが大切だと感じます。



乙茂地区でのボランティア (9月12日 14:53)

(平成二十九年十一月二十日 聞き取り)

# 乳牛を何とか生かした



鼠入そいり

川上 昇

(六十一歳)

## 当日の状況

### 【夕方から急激な増水】

当時は母と二人暮らしで、乳牛のホルスタインを二十二頭飼っていました。当日の午前中は、大した雨ではなかったのですが、正午から十三時ごろまでの降り方は異常で、危ないと感じました。

十六時ごろ、隣に住む男性に頼まれて、橋を渡り水田のポンプを回収する手伝いに行きました。しかし、増水のペースが速く、あっという間に橋の上およそ三十センチまで水が来てしまい、男性を急ぎ立てて何とか戻った後に橋は流されたようです。結局ポンプも流されてしまいました。今でも二人で「いやー命があつて良かったもんだなあ」と話しています。



鼠入地区道路決壊状況 (9月3日7:56)

### 【牛舎が鉄砲水で浸水】

戻ると自宅の周囲が危険な状況で、十六時半には自宅の裏の沢から鉄砲水が出て来ました。激しくはないものの大量の水が来て、牛舎に水が入りました。川の水位も五分単位で増える状況で、十七時ごろには川の岩がガラガラとものすごい音で流れており、危機感を覚えました。

そのころ、沢水が詰まってあふれ、牛舎に五十〜六十センチの高さまで水が入りました。

た。はじめは流木などを取り除き流れを確保しましたが、追いつかないので諦めたところ、牛舎にあった牛乳冷却用のタンクが流れ出してしまいました。牛はそれほど騒がなかったものの、私は心配で様子を見ていました。水のピークは暗くなる前でした。十九時までは雨が上がり、二十二時ごろに下流へ二百メートルほど様子を見に行くと、生活橋や空き家が流されており、大変なことが起きたと感じました。

## 被害状況と対応

### 【牛舎を中心に被害】

自宅は無事でしたが、牛舎と納屋に水が入りました。牛舎には三十〜四十センチ程度の泥が残り、翌日から一週間は一人での泥出しが大変でした。ホルスタインは本来、きれいな所でしか寝ないので、二日は頑張つて立っていました。三日目には泥の中で寝るようになりました。

飼料も被害を受け、近所に置いていた購入品の牧草ロールが約九十個、流されてしまいました。私が夏に収穫した牧草は牛舎の上に置いていたため無事でしたが、一カ月分程度の量でした。

牧草地にも土石流が流れて全体の三分の一が使えなくなり、脇に置いていた機械も流されました。車も浸水で壊れ、隣の人が「車使ってもいいぞ」と言ってくれたものの、一日中使用う訳にもいきません。



牛の飼料として欠かせない牧草（イメージ）

## 【牛の世話に苦労】

牛舎は断水となり、家の自家水道からバケツで運ぶのも大変でした。牛は、一日に四十から五十リットルもの水を飲むので、あつという間に飲み干してしまい追いつきません。また、牛舎では夏は扇風機をずっと回しま

すが、停電で動かせず、弱る牛も出て来ました。持っている小さな発電機では自宅の電気を確認するのが精いっぱいでした。それでも餌は最低限ありましたから、最終的に死ぬ牛はいませんでした。

さらに、搾乳を止めると牛が乳房炎になってしまふので、本来は毎日行う必要がありますが、出来なくなりました。ただ、震災時の停電の経験から、それなりの対策は取れました。具体的には、通常は乳量が多く出る配合飼料を与えますが、それを止め、飼料を牧草だけにすると乳量が出なくなるので、切り替えました。

とはいえ牛も一週間から十日は苦しみますし、痩せますが、例えば搾乳出来ても捨てるしかない中、それしか方法がありませんでした。一頭でも死ねば処理が大変なので、当時は牛を何とか生かすことを考えました。

## 一時避難と帰宅後

### 【牛の世話のために行き来】

数日後に次の台風が来るという事で、自衛隊員や町職員に説得され、ヘリコプターに乗せられて、母と一緒に龍泉洞温泉ホテルへ避難しました。

しかし、今まで何十年も牛飼いで生きてきましたから、牛が心配でした。牛を飼う人なら、同じ気持ちだと思えます。翌朝五時半ごろに出発し、三時間以上歩いて帰りましたが、道中の大変さは想像以上でした。道路の舗装は激しく壊れており、三十センチほど残った道路脇を行く途中には、熊の足跡もありました。牛には毎日、水と牧草を与え、糞も掃除しなければなりません。さらに、ちょうど台風当日の未明に産まれた仔牛がおり、面倒をみる必要がありました。一頭だけ母牛の乳を搾って仔牛に与え、その日は、夕方にまたホテルに戻りました。

### 【家に戻る】

避難所では寝られず、さらに毎日六時間も歩くのでは体が持ちません。私一人なら何とか暮らせると思い、翌朝は、「もう帰ってきません。私の責任で何とか生き抜くから」と断って出発しました。母は歩くのが大変なのでホテルに残し、米や野菜は自給しているので、佃煮や缶詰などを買って帰りました。

帰ると安心して寝られるようになりました。約一週間で水堀からの林道が通ると、周囲の人が時々戻るようになり、必要なものを頼み、次の機会に買ってきてもらえるように

なりました。ガスと薪ストーブでおつゆと炒めものなどの食事を作るうちに、料理も上手くなりました。

台風からおおよそ半月で岩泉方面に道路が開通しました。そして、台風からおおよそ一カ月後、車が直り停電も解消したところに、ホテルへ母を迎えに行きました。

その後、米やデントコーンは収穫することが出来ましたが、停電でデントコーンの畑は電気牧柵が止まり、熊の被害を受けてしまいました。

## その後・振り返り

### 【畜産の規模を縮小】

牛の管理方法を一度変えると、その後に餌を戻しても乳量は戻りません。また、自分でも従来どおりの規模に限界を感じ、当時の牛は全て売ってしまいました。自分が手掛けた牛を売らざるをえないのは辛くて悔しかったです。

今は四頭飼っていますが、搾乳するのではなく、妊娠した牛を分娩の何カ月か前に売る経営をしています。搾乳をするためには設備投資も必要なので、従来の規模に戻す予定はありません。



現在飼育しているホルスタイン牛（平成29年11月16日）

### 【普通の生活が一番】

私も、母にとっても、大雨でのこれほどの被害は初めてです。ただ三、四年前に家の横の沢沿いが土石流危険渓流とのことで、県の人に「百年に一度の洪水が起きるかもしれない」と説明を受けました。覚悟はしていたつもりでしたが、実際にこうなるとは想像できませんでした。

台風当時、震災の経験から小さな発電機を持っていました。畜産を営むうえではより大

## コラム

### 台風10号・岩泉町における畜産関係被害

今回の台風では畜産農家も大きな被害を受け、失われた家畜の命もありました。孤立地区での生活を続けながら、大切な家族であり財産でもある家畜を守り続ける農家もあり、そこには想像を超える困難がありました。

区分	戸数
調査対象畜産農家	150
うち被災した畜産農家（以下内訳）	115
牛舎などの浸水・土砂流入・損壊	58
飼料畑（とうもろこし）への土砂流入・浸水・倒伏	58
牧草地への土砂流入・浸水	50
農業機械の流失・浸水による駆動不能	38
家畜の死亡	3*

\*内訳：牛（黒毛和種4頭、乳用種3頭）、山羊3頭  
（岩手県農林水産部 平成28年11月22日発表資料）

きなものが必要と考え、今では備えています。規模を縮小した分、今年も田んぼに十分気を配ることができ、立派な米が出来ました。道路があつて、ふつうの生活を送ることができるのが一番良いです。お世話になった方々に感謝します。

（平成二十九年十一月十六日 聞き取り）

## 自助と共助で守る命

国境くさかひ

守田 敏正

(六十六歳)

## 当日の状況と対応

## 【当日夕方までの動き】

八月三十日、私は小川地域振興協議会として台風の動向が気になり、九時から事務所である小川支所に詰め、情報収集にあたりましたが、静かな雨の降り方でした。

午後になり十三時から十五時の間、事務局長である支所長とともに、小川地区内の道路に直交している沢からの土石流の発生状況や、河川の増水状況などを確認して回りました。私と事務局長は、「騒ぐほどの雨は降っていない。この程度の雨であれば大事に至らない。」と考えました。

私は国境自治会長でもあり、自治会の状況も気になったため、「万が一大事に至ること

があったら、役場職員と一緒に災害対応に当たってください。役場職員は土砂災害対応図上訓練にも参加しているから対応できる。私は大事に至ることがあっても、すぐには事務所には来られないと思う。」と指示して帰りました。



前日から雨は静かに降っていた (8月29日 12:34)

## 【川沿いが水しぶきでかすむ】

国境自治会に帰った十六時ごろから、雨は

急に会話ができないほどの降り方になり、小川の上流である当地域の河川は、ダムが放流された時のように水しぶきを上げ、ゴロゴロガチガチと音を立てながら渦巻いて駆け下っていました。

平成二十五年七月二十八日の夕刻、国境・見内川地区は局地的集中豪雨により大きな被害に遭いました。胡桃の木が三本四本と立ちまま流れてきて、私の目には山が流れてきたように映りました。

今回の川の流れはあの時よりも量も勢いもあるものの、流れは円滑だと感じました。川幅が広くなり川沿いに流れる樹木が無く、護岸工事の結果が円滑な流れを作っているであろうと思いました。

## 【要支援者の避難が大事】

一軒が火災に遭ったような場合、周りの人には余裕があります。しかし今回の豪雨災害のように全域が被災または被災の危機にある場合は、自分のことで精いっぱいです。遠くまで手が届かず、ましてや自治会全域に目配りすることは極めて困難な状況です。そのような中でも、欠くことができないのは避難行動時要支援者の安全確保です。私の自治会は五十世帯約百人の住民がおり、そのうち避難

行動時要支援者は四名です。

十六時ごろ危機を感じた私は、軽トラで避難行動時要支援者を回りました。一人は隣の家に避難完了、一人には電話で川の監視を続けながら家の玄関にいるように指示しました。三軒目に向かおうとすると、泥流により軽トラは途中までしか進めませんでした。徒歩でようやくたどり着くと、高齢のお母さんは「私は公民館に行かない。家と一緒に死ぬ」と言い出しましたが、お母さんを脇に抱えるようにして途中から軽トラに乗せ、公民館に避難させました。

四軒目に向かったのは十七時半ごろでした。このお母さんも、「家と一緒に死ぬ」と言って動こうとしませんが、「分かった、俺は死にたくないから帰るが、玄関で川の増水状況を見ていなさい。」と言って帰りました。対応が一段落したところには真っ暗になり、そのほかの人には手が届かず、自治会全体の状況も把握できない状況でした。

### 【通信不通・交通路寸断】

私は小川地区自主防災協議会長でもあり、速やかに本部に行かなくてはと思いながら、道路は土砂で埋没し電話は通じないことから、全く本部長としての活動はできません

でした。本部活動については、事務局長と推進員が支所職員と一緒に災害対応にあたってくれました。



名目入では電柱が折れ曲がっていた（9月1日）

## 翌日以降の状況と対応

### 【翌朝、支所に二時間かけて到達】

翌朝、小川支所と同じ棟の小川生活改善センターには百名は超えると思われる住民が避

難していました。事務局長と推進員が役場職員と一緒に対応に追われていたが、そこには町内はもろろんのこと小川地区の状況すら掴めない苛立ちがありました。調理室では、門町婦人部の十数名が炊き出し作業に奔走していました。この中には床上浸水などの被害を受けた方も含まれていました。

### 【第一回災害対策本部会議を開催】

翌日の午後二時、連絡のつく役員が集まり、第一回小川地区自主防災協議会災害対策本部会議を開催しました。支援物資の受け入れ・配分や、炊き出しが長引く場合は門町婦人部に代わり、自主防災協議会が各自治会から人員を出してもらい、継続することを確認しました。

当分の間、毎日午後二時に会議を開くことを確認しあったものの、結局は一回目の会議が最初で最後の会議となりました。目の前のことで精いっぱいのため、決められた時間に集まる事が出来ないのでした。

### 【さながら物流センター】

トラックでどんどん入ってくる支援物資を受け入れてそれを分類し、被災者に配分する

作業は多くの手を必要とする作業です。途方に暮れていた時に「この作業を俺に任せてくれ」と言ってくれた工藤哲郎さんには感謝の言葉しかありません。工藤さんは、支援物資の受け入れ・配分場所を小川生活改善センターから門小学校の体育館に移し、高校生・中学生・小学生の手伝いを頂きながらスパーマーケット方式による効率的な作業は見事でした。

## 【被害状況の確認】

私は、悪夢の状況を現実のものとしてとらえ、今後の小川地区の防災活動に反映させるため、数日かけて被災した箇所や被災した家を回りました。

## 【ボランティアの調整】

台風から数日後より、社会福祉協議会が中心となり、ボランティアセンター小川サテライトを開設し、ボランティアの受け入れを始めました。私は地域の代表者ということで調整会議などに参加しました。会議の参加のほかに被災者や自治会とボランティアセンターの間に入り、橋渡しのような役割を一週間程度行いました。また、ボランティアの方々を

作業現場に案内もしました。



ボランティアセンター小川サテライトの様子（10月30日）

※写真提供：岩泉町災害ボランティアセンター

## 振り返りと課題

### 【台風十号が置いて行った課題】

①国境・見内川地区はなぜ今回の台風で被害が比較的少なかったのでしょうか。この地区は平成二十五年七月に一時間降水量が八十三ミリに及ぶ局地的集中豪雨により、大

きな被害を受けました。今は復旧復興作業もほぼ完了し、川幅は広く川沿いには増水により流されるような樹木もありません。また、護岸も堅固に構築され川は円滑な流れが保持されています。前回よりも今回のほうが増水していたように思える中で被害がなかったのは、防災工事のおかげと思っています。

②大きな災害になればなるほど、誰かの助けが必要なきほど誰も来ないのが現実で、小川地区は細かく分断されてしまうのが現実です。

③気象情報・避難情報を聞いて安全を確保するための行動に移せるように、普段から勉強しておくことが大切です。

④行政として、在宅介護などを受けている人が自主避難できる場所の確保が必要です。

### 【小川地区自主防災協議会の役割】

①本部として、自治会役員と個々（戸々）に防災減災の力をつけること。

②自治会として普段から「立ち退き避難」が必要な家に住んでいる人がかつ「避難行動時要支援者」を把握しておき、災害時にこの人の安全を確保すること。

③個人（戸々）として、第三者を当てにする



【防災・減災の基本】

後日、各自治会の対応について会長などの



小川サテライトに集まったボランティアの皆さん（10月30日）

※写真提供：岩泉町災害ボランティアセンター

ことなく「自分の命は自分で守る。自分の家族は自分で守る」気概を持つこと。

関係者に伺ったところ、役員が集まって本部を開設し組織的活動をしたという話はありませんでした。当初の段階は自治会長や一部の役員が状況の把握、安否確認、避難誘導にあたったものの、途中で身の危険を感じて家に戻ったそうです。中には戻ることが出来なくなり一晩、高台で落ち着くのを待ったという役員もいました。

多くは隣近所で協力して難を逃れていました。家が広範囲に分散する当地において、自治会全域が被災し、役員も被災している状況では、自治会単位での組織的な活動は困難でした。ましてや、自主防災協議会が陣頭指揮できる状況ではありませんでした。

家が山間部の広範囲に分散している当地における災害対応の基本は、「自助」と「共助」です。第三者をあてにせず「自分の命は自分で守る。自分の家族は自分で守る」この気概が一番重要です。次に、「自分の命を自分で守れない人、自分だけでは自分の家族を守れない人を自治会、特に隣近所で守る」このことが極めて重要です。そのためには、それぞれが防災対応の力を持たなくてはなりません。この力を持ってもらうための活動が小川地区自主防災協議会の役割とと思っています。

(寄稿)

コラム

災害を忘れない① 平成25年7月国境・見内川地域集中豪雨



被害を受けた道路・水道施設（見内川地区）

資料：岩手県資料、岩泉町資料、広報いわいずみ

平成25年7月26日～28日にかけて、暖かく湿った空気の流れ込みにより、岩手県南部を中心に記録的な大雨となりました。岩泉町国境・見内川地区では7月28日16時半～19時半までの3時間で総雨量133.5mmを記録（町設置雨量計）する集中豪雨により被害が発生しました。

土石流や倒木、農地の冠水、道路の決壊や橋の流失、簡易水道の配水管・給水管の流失など局地的に大きな被害がありました。

区分	岩泉町における被害内容
避難指示	小川地域の116世帯(244人)に7月28日21時20分に避難指示が発令され、7月29日10時5分に解除されました。避難所は小川生活改善センターと見内川公民館です。
住家被害	半壊6棟、床下浸水24棟
断水	43戸
被害額	4億9,936万3千円

## 指示を待たず動くこと



門町  
かどまち

工藤 哲郎

(六十三歳)

### 当日の状況と対応

#### 「夕方、危険な水位に気付く」

当日の日中は自宅で過ごしていました。夕方、川向いの人に「車を置かせて欲しい」と言われて川を見に行くと、危険な水位であることに初めて気付きました。

私は当時、町内会役員ではなかったものの対応の必要性を感じ、心の準備はしておきました。まだ停電になっていなかったものの、家にいた妻と息子には「大変だぞ」という話はしておきました。

川は十七、十八時ごろにはあふれる寸前であったと思います。暗くなるころ支所に行く、すでに上流の方々など約百人が着の身着のまま避難していました。

自然な流れで、対応を検討する一員に加わり、高齢者は和室に、ほかの皆さんは大ホールに休んでもらうことになりました。布団がなく、多少の座布団がある程度なので、自宅が無事な人には、「座布団を持って来て下さい」とお願いしました。



泥で動けなくなった車 (8月31日9:24)

#### 【二晩中の警戒活動】

夕方には消防団は避難の呼びかけを行っていました。その後、私も消防団や有志の方々と町内会エリアの川周辺を警戒しました。まだ雨が降り増水は続いており、浸水していな

い家の人たちにも「危険ですから出ないでください」とお話しして歩きました。暗くてよく見えませんが、川は道路の近くまで来ていました。

途中、日影名目利で車が泥にはまっていた。周辺は、長靴もはまるほどの泥で、その先には行けない状態でした。

### 避難所の状況と対応

#### 【炊き出しの開始】

翌朝、約百名分の食事が必要なため門町の婦人会に協力を要請し、地域のスーパーに米や味噌の提供をお願いしました。

食事の際には支所長が状況を説明し、私は「お互い心配りしながらトラブルが起きないように」など注意事項をお話させてもらったほか、保健婦の方が体を動かすことも企画してくださいました。

その後も婦人会の皆さんにお願いし、三食を提供できるようになりました。ご飯に味噌汁、おかずが二、三品にデザートまでつきました。ストレスがたまらないようにとの、お母さんたちの最大の配慮です。食材は、地元のスーパーや商店から調達して、途中から支援物資で届いた米や野菜も活用しました。

避難所を開設して二三日が経つと休校中の高校生が応援に来てくれて、すぐに役割分担しました。避難所・受付・会議室・ボランティア受け付けなど、全て紙に書いて、地図と一緒に貼りました。

## 【体制の立て直し】

しかし台風から二週間後、炊き出しの現場に疲れが見えてきたので、ある業者さんに「こういう訳で体制を立て直したいので、米はあるけど副菜を届けてくれませんか」とお願いすると、翌日には二百人分を届けてくださいました。

これを機に他地区にも応援を要請しました。その後、自衛隊にも米・味噌持参で炊き出しの協力を頂いたので、婦人会や応援の人たちに副菜を作って頂くという体制になりました。食材確保などの面で、避難所と、支援物資の拠点である体育館は連携を取りながら、最大で百九十食を提供していました。手伝いに来る人やボランティアの人にも提供したためです。

## 【避難所の状況】

避難所では途中から、布団やマットなどを

二百枚ほど提供して頂き寝られる状態になりました。家族ごとの仕切りも頂いたのですが、これは「暑いので止めてくれ」と言われまして。転倒などのけがは多少発生したようですが大事には至らず、風邪の流行などありませんでした。



門小学校と自衛隊車両 (9月4日8:38)

## 【ライフライン…水の確保】

当初、水は近所のお宅から運んだものの枯渇し、別の自家水道があるお宅に協力を求め

ました。一日に七百〜千リッターの水が必要で、軽トラに二百〜三百リッターのタンクを積んで毎日、朝晩に水を配りました。数日後には支所に置いた蛇口付きタンクの水で、身体が拭けるようになりました。その後は入浴のため葛巻町のホテルに行くバスが出るようになり、自衛隊の入浴施設も設けられました。トイレの水については、小学校体育館はプールの水を、支所は手洗い用の水を再利用するなど、工夫をしながら使いました。

## 【ライフライン…電気・通信】

電気については当初、避難所は小型発電機二〜三台でやりくりしていたところ、葛巻から畜産農家の方が大型発電機と燃料を持って来てくれて助かりました。そういったありがたいことが沢山ありました。

通信網は携帯電話も会社により不通となり、NTTに直接要請して数日後に移動基地局を支所に導入してもらいました。

## 物資関係の状況と対応

### 【体制作り】

当初は国道の寸断により、岩泉中心部から

は物資が届きませんでした。台風から数日後に地域振興協議会の会長と打合せし、私は物資を担当することになりました。

門小学校の校長先生に「いつまでかは分からないけども、体育館を使わせてほしい」「教職員の方たちにも手伝いをお願いしたい。子供たちも参加できれば参加させてほしい」とお願いし、教育委員会にも同様の要請を行いました。

そして九月二日、体育館に物資活動の場をセッティングしました。偶然にも小川中学校に陸前高田で震災を経験した先生がおり、相談しながら体制を作りました。被災していない中高生は横の連絡に基づき自主参加とし、後日、教職員の方々も加わりました。

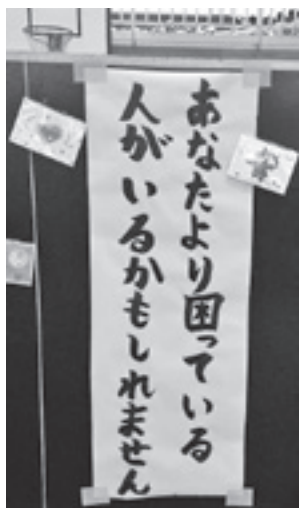
## 【物資の受け入れと配布】

物資調達の方法として、若者が中心にフェイスブックなどで発信・拡散したところ、驚くほどの反響がありました。

体育館では個人・団体から食料・衣料など多くの物資を受け入れ、郵送でも届きました。受入れ・配布ともに名前を記録しています。茨城で豪雨被害を受けた地域の生協から、トラックで物資を届けて頂いた例や、地域の若者の縁で盛岡から大型トラックで物資を届け

てくれた例などもありました。

小中高生には届いた物資の記録と配置・受け取りに来る人への案内などを担当してもらいました。教職員の方々には、受付の設置や用紙の作成、物資の小分けなどを応援してもらいました。すぐに流れが出来、学校再開まで続きました。



門小学校体育館における黒板掲示・標語（9月13日）

※写真提供：つびたあれいわずみ実行委員会

さらに消防団員などの消防関係者、ボランティアの方も加わり、皆さんの協力で物資の人手は十分、間に合いました。

物資を受け取りに来られない人には、消防

団や様々な人たちが分担して、食料や水を届けることもありました。

岩泉方面の国道が開通すると毎日、物資が岩泉地区から届くようになりましたが、待っているのは対応出来ませんでした。

## 【子供たちのおかげで】

子供たちとは自然と仲間意識が生まれ、話し合い工夫をし、指示をしなくても、必要な時は動けるようになりました。

普通はこのような状況下ではトラブルもつきものですが、子供たちが対応してくれたおかげで、皆さんが冷静に行動してくれました。子供たちは一週間もすると、誰が被災している人か分かるので、かなり社会勉強になったと思います。

配布の規則は設けなかったものの、日用品など日持ちするものを過剰に持って行かれても困るので、子供たちに標語を書いてもらい、思いやりを求めました。

## 【必要な物資の情報共有】

時間の経過とともに必要な物資も変化してゆきました。そこで黒板を使用し、必要なもの・届く予定のもの・不要なものなどを掲示

し続けました。支援に訪れた人が黒板の内容を発信してくれることもあり、翌日にもものが届くので驚きました。

当初は泥出し作業で泥を詰める土のう袋が必要とされました。また、スコップなど道具の要望もありましたが、やはり一番必要とされたのは食料と衣料です。

黒板で情報を共有すると、通じる部分は通じます。とはいえ、着られない洋服など始末に困るものも沢山ありました。子供・若者用の服を必要とする人があまりおらず、さらに季節の変化もありました。また、食品では賞味期限も重要です。

## 【体育館からの撤収】

次第にうわさが広がり、安家や浅内などからも物資を求める人が来るようになりまし。適切な配布のため、各地域の被害状況については、視察や消防団からの情報を通じて把握するように努め、徐々に活動の終了についても検討を始めました。

一カ月後、小学校で学習発表会の練習で体育館を使うため、物資拠点を撤収して支所に移動しました。その時点では避難所は、一部岩泉に移動した人もいましたが、縮小してまだ続いています。



門小学校に掲げられた生徒たちからのメッセージ（10月19日）

※写真提供：岩泉町ボランティアセンター

## 振り返って

### 【災害現場で大事なこと】

災害現場では指示を待たずに、気づいたことを動ける人が行っていくことが重要であると考えます。今回、消防・取材関係者が驚いたのは、役所の指示が無いのに住民が相談し合いながらこれだけ実践していることと、中高生の動きでした。

また、地域のつながりや地域力も大切です。

婦人会は普段から祭りや運動会の食事作りなどをしているため、「スーッと」炊き出しに入れました。慣れていないと、いきなり大量の食事は作れません。

### 【災害時の公的な動きについて】

公的な備えとしては、食料や布団など百人分の宿泊の準備が必要であると感ずます。また、情報入手のためにラジオの受信環境の改善と、自治体や消防から情報を放送局に提供し、特定エリアに流せる体制が理想的です。また、公式の物資受入は、寸断に備えて中心部だけでなく何力所かへの分散が有効と考えます。

### 【振り返って】

私自身、台風直後から動き続けて、疲れはありました。関わってくれた中高生には「ありがとう」「頑張ったね」という声を掛けています。大変だったという感想もあるとは思いますが、共同作業の達成感や、様々な経験はきつと、これから役に立つはず。そして婦人会をはじめ、消防団、地域有志の皆さんに感謝します。

（平成三十年八月二十七日 聞き取り）

## 頂いた支援を力に



門町  
邊見むつ子  
(六十七歳)

### 当日の状況と対応

#### 【三名のお客様がいた】

私は旅館を営んでいます。当日は釣り目的の女性客一名と、山仕事の男性客一名が宿泊されていました。女性客には事前に延期をおすすめしましたが、長くお付き合いのあるご姉妹でもあり、「いいわよ、川に行けなかつたら奥さんと遊ぶのだから」とのことでした。当日は朝から雨がやや強く降っていました。その姉妹がいらつしやると、いつも料理教室を開いており、十四時過ぎに「早めに夕飯の準備をしましょうか」と「棒ずし」を作りはじめました。

十五時半ごろには救沢川の水が増え、夫は向かいにある自宅の周囲に土のうや石を積み

ました。旅館からも川が見え、念のため少し高い隣の家の敷地に、家とお客さんの車を移動させてもらいました。

その後、従業員の家族が消防団員なのですが、「避難するように言われた」とのことです。驚いて従業員を家に帰しました。

#### 【川があふれ自宅が孤立】

夫はその後、浸水に備えて机に畳を上げているときに川があふれ、旅館との間の道路も川になってしまったので、自宅が孤立してしまいました。消防団の方々も巡回していましたが、流れが強く救助には行けません。ただ、夫が懐中電灯で家から合図をするのは見えませんでした。

旅館の建物は大丈夫でしたが、塀の周囲の水が廻り中洲の状態となりました。また、停電が発生したので断水も想定して水を風呂などにためておきました。

同居している息子から仕事帰り、十八時ごろに電話で様子を聞かれたので、「安全な所に避難して夜が明けてから帰って来て」と伝えました。その後、親せきに無事を報告する電話を入れ、それ以降は、電話が不通となっていました。

#### 【旅館も浸水し二階へ避難】

十九時過ぎ、食事中に水が建物付近まであふれてきました。避難するか迷いましたが、慣れない土地で歩いての避難よりは、二階が安全と感じ、お客さんの荷物を一階から二階へ上げることにしました。姉妹が「大丈夫よ」と言うので私は「万が一のことがあったら大変だから」と話しました。男性も「そうだ、そうだ」と布団もどんどん上げてくれました。そのうち水が裏手から建物の中に入って来



旅館前の状況 (9月1日)

て、驚いてしまいました。男性が高い所にストーブなどを一緒に上げてくれて助かりました。また、私はパソコンや書類を高い所に乗せ、女性からのアドバイスで洋服の入ったタンスの引き出しを高い所に上げました。

このころ、消防団も巡回していたので、特に通報することは考えませんでした。その後二階で部屋割りをして、再び食事を取り、先に休んで頂きました。釣りのお客さんの胴長を借りて下の様子を見に行くと、一階の床で、ひざ上程度の水深がありました。夜中には「バリッ」という音がして見に行ったり、外を見たりして、あまり眠れませんでした。

## 翌日以降の状況と対応

### 【旅館の被害状況】

翌朝、玄関が泥で開かなくなり、外の人に二階から助けを求めると、皆さんが掘ってくれました。出ると、川に近いブロック塀が一カ所、倒れており、内側ではボイラー室のドアが破れていました。

一階では高い所に上げたものはおおむね助かりましたが、客室の畳は浮き上がり、床に泥が約三十センチも堆積して家具や電化製品も浸かってしまいました。



旅館と家の間は川に（9月1日）

### 【食事は何でも火を通して】

昨日作った寿司の残りが二階にあり、お客さんに「これ食べて大丈夫？」と聞かれましたが、暑かったのでカセットコンロで雑炊のようなものを作りました。

お米や普段から使用する食材は一階の高い所にあり、無事でした。最初はまだ冷蔵庫の中身なども食べられる状態でしたが、衛生面を考慮して加熱したものを食べるのが一番と考えました。

### 【息子の帰宅】

息子も前日、二升石の国道で土石流により立往生して困難な状況にありました。偶然そこにいた道路維持作業車に道具が積まれており、現場にいた皆さんが協力して、その前方に偶然止まっていた大型バスに命綱を結んで渡り、一晩を過ごしたそうです。翌朝も皆さんで散乱していた木をチェーンソーで片付けたようで、午前中には自身の車で帰宅しました。

### 【お客様に帰宅をすすめる】

前日に避難させた車も無事でした。男性に帰宅をすすめると「このまま行くのは悪いな」と言われましたが、「大丈夫」と言って、九時半ごろ帰りました。姉妹は三泊四日の予定でしたがやはり帰宅をすすめました。しかし親せきに近いような存在でもあり「このまま帰れると思う？手伝うわよ」と言われ、泥かきなどを手伝ってくれました。

三十一日の夜は星がきれいだったそうで、「あんなきれいな星空、初めて見た」と言われました。結局、九月一日にいわて沼宮内駅までお送りし、「家に着いたわよ」と電話をいただいた時はホッとしました。

## 【夫は二晩孤立・自宅の被害】

自宅の周囲の水は翌日も引かず、夫は二晩孤立したままでした。机の上の畳で仮眠を取り、冷凍庫の食品や、釣り用の氷を溶かして飲み食い出来たそうです。

この近辺は、川からの距離や高低差で被害の程度が大きく違いました。自宅は直前のお盆前にリフォームして、荷物を運び入れた段階で多くの家財が被害を受け、窓も壊れてしまいました。

## 【食事・水の確保は助け合いながら】

台所のガスボンベが倒れてしまい、ガス屋さんに無理を承知でお願いすると、台風の翌日か翌々日には修理してくれました。お米はおむすびにして近所で分け合って食べたりもしました。

九月一日には、秋田の兄が葛巻経由でパンやおにぎりを持って来てくれて、驚きました。その後は盛岡の親せきからも煮物などを届けていたでいて、本当に美味しいと思えました。改めて普段、何気なく口に行っている日常食の大切さを感じました。

水は当初、風呂などにためた分は手洗いに活用し、買い置きミネラルウォーター

を飲みました。また、その後は近所のお宅の自家水道を使わせてもらいました。若い人たちが、台風から二三日後に開通した盛岡方面の国道の途中まで行き、親せきの人から発電機を受け取り、それを使って水を上げることができたのです。

旅館のお手洗いは、古いタイプなので使える状態にあり、夜も近所の方が好きなように使えるようにしておきました。

## 【ラジオでの情報発信】

当時、私は盛岡でラジオに出演しており、台風から数日後に電話取材の要請がありました。携帯電話の電池に不安があったので兄が電池式充電器を準備してくれて、物資拠点の門小学校で情報を聞いて、放送の中でお伝えしました。

その後は九月七日が定期出演日でしたが、道路状況に不安があり久慈の長男が連れて行ってくれました。門小学校の黒板に書いてある必要な物資の情報を持って行ったところ、インターネットに載せて頂き、医薬品メーカーの方々が衛生資材などを支援してくれました。



周辺でのボランティア活動（10月30日）

※写真提供：岩泉町ボランティアセンター

## 片付けと旅館の再開

### 【当初、再開は考えず】

台風前から、定年の準備も考えており、当初、営業再開は難しいと感じました。ボランティアさんも住まい優先のため、まずは自宅のみ手伝って頂きました。床の張替えも必要でしたが、業者さんの都合が合い、九月には



修理が始まりました。

一方で当面は旅館の二階で暮らさなければならず、旅館の泥出しは親せきなどに手伝ってもらいました。兄も三回ほど来てくれたのですが、九月三十日に倒れてしまったこともありました。

### 【営業再開を望む声と決断】

台風から約一カ月後に社会福祉協議会の方から「工事関係やボランティアの方々のために、早く復旧して欲しい」と言われました。即答は出来なかったものの、とにかく片付けることになりました。

ありがたいことに多い日には二十名以上のボランティアの方々に来て頂きました。泥出しのほか、倉庫で泥を被った味噌などを捨てる必要がありました。暑い中、皆さんも大変だったと思います。

業者さんは旅館の修理もすぐ取り掛かってくれました。徐々に、皆さんに手伝って頂いた恩返しのためにも、営業を再開しようと考えられるようになり、本格的に動き出したのは十一月です。

一階の家具は使えないものも多かったのですが、桐製の家具は、元に戻ったものもありました。畳を替え、床については部分的に張

替えとなりました。

業者さんには手を尽くして頂き、年明けには旅館にふすまが入りましたが、まだ道具もそろわず、二階に私たちが住んでいたので宿泊は難しい状態でした。



お弁当作りからの再開 ※写真提供：つびたあれいわずみ実行委員会

### 【翌年、お弁当作りから再開】

仮ながら営業を再開したのは平成二十九年二月六日です。まずは弁当の注文を受け始め、春は会食に利用して頂き、自分たちもお客さんも喜ぶことが出来ました。

五月ごろには、釣りの常連さんから宿泊の

問合せが入るようになったものの、川を見ながかりされるのも忍びないので「今年は、この周辺は無理ですよ」とお伝えし、それでも良いという人には来てもらいました。本格的に宿泊を再開したのはお盆過ぎのことです。

### 振り返って

#### 【とにかく支えられて走ってきた】

台風直後は、とにかく皆さんに支えて頂きながら、走ってきたように思います。もう少し頑張りたいたと思いますが、若い人たちの需要に応えられる施設でもありません。まだ考えていませんが、一段落したら別の方向も検討したいところです。

当日、自宅は浸水しても、旅館の側は大丈夫だと思っていました。百歳近い方も、初めての体験とおっしゃるほどなので、川の無い所で育った私が想像して行動するのは、少々難しかったです。

今後の備えとしては、非常持ち出し品の準備も重要ですが、普段使うものを入れればなしにも出来ないのです。いざという時にどう持ち出すかを意識しています。

(平成三十年七月五日 聞き取り)

## 黒電話が役に立った



救沢 すくいざわ

後藤 たけ

(六十四歳)

### 当日の状況と対応

#### 【沢では鉄砲水、土石流が発生】

当日の十七時ごろ、激しい雨で家の前の道路が川のようになり、石も転がる状態で、異常を感じました。夫が十五分ほど歩いて二カ所の沢を見に行くと、道路の下にある、沢水を通すヒューム管が詰まりかけていました。うち一カ所では詰まっていた木を除去しようとする、鉄砲水が来たので慌てて転びながら逃げたそうです。

さらに、二カ所目ではその下流の家に寄り、「気をつけた方がいいよ」と話してきたそうです。

夫が戻って約十分後、その家の旦那さんが助けを求めてやってきたので驚きました。当

時、ご夫婦は早めに夕飯を食べ、奥さんは台所で片付けをしていたそうです。旦那さんは「貴重品をまとめて逃げる準備をしておいて」と言いつつ田んぼを見に家を出た途端に土石流が発生して家に流れ込み、台所がすっかり壊れてしまいました。奥さんも気付いて居間まで逃げたものの、巻き込まれてしまい、旦那さんが道路まで何とか助け出したようです。そこで夫に昔の大きいおんぶ紐を渡し、夫が助けに行きました。

#### 【近所の奥さんを自宅で応急手当】

その後、家に来た奥さんは全身泥だらけでした。風呂を沸かしていたので連れて行ってあげようかと思いましたが、「吐き気もする」と言うので、骨折も想定して止めました。その直後の十八時ごろ、停電になってしまい、ロウソクと懐中電灯で明かりをとることにしました。

奥さんに「目が開かないよ」と言われ、目の泥を洗ってあげて、次にうがいをさせてあげて、水分を取ってもらいました。耳の泥は手を開けるのが難しいので、「乾いたあとに、自分でトントンしてだしてよ」と言いました。それから着替えてもらい、布団に入ってもらおうと「寒気もする」とも言うので、今度は

湯たんぽを準備しました。骨折した時に湿布をする、寒気がするのですが、とりあえず冷やす必要性も感じたので、痛めたというあばらに湿布を貼ってあげました。トイレは介護に使っていたポータブルトイレを用意しました。



土石流が発生した沢（後日撮影）

#### 【黒電話で救助要請】

道路が寸断されていなければすぐ病院に連れて行きたいところでした。少し落ち着いてから、大雪による停電の時のために保管していた黒電話を思い出し、接続しました。無事

一一〇番につながり、旦那さんから話してもらいました。後日、聞いた話では町内にいる娘さんも通報したようです。奥さんはその後、寒気や吐き気も多少落ち着いたようで、「だいぶ良くなった」とも言われました。

## 翌日以降の状況と対応

### 【食事について】

翌朝のご飯は、食べやすいように子供用のような感じでおにぎりを長く細く準備しました。三食食べることが出来るので少し安心しました。お二人には家に二晩泊まってもらいました。

### 【九月一日、へりによる救助】

へりが来たのは九月一日の朝六時ごろのことです。ちょうど旦那さんは自宅の様子を見に行っていました。急なので戸惑いつつも、私が両手で合図すると降りて来てくれました。この近辺は着陸できる場所が無く、飛びながら人だけ下りてきました。「背負って」と言われたそうで、私の夫が背負って、救助隊員に渡して、奥さんは吊り上げられて救助されました。すぐに旦那さんも自宅から戻り、

同じへりで一緒に病院へ行ったようです。

ちなみに黒電話も電話局のバッテリーが切れたのか、九月一日の午後には不通になってしまいました。

### 【応急手当てを振り返って】

当時は知らなかったのですが後日、奥さんが服用していた持病の薬が災害で飲めなかったと聞きました。病院で「あと一日飲めなければ命が危なかった」と言われたそうで、ショックを受けました。無事だから良かった



安家から救沢に抜ける奥岩泉線も被害 (9月15日 12:04)

ものの、複雑な気持ちです。

救助要請の時点でそうした事情も伝えられれば、もっとへりは早く来てくれた可能性もあります。薬の服用の有無はデリケートなのであまり聞けないことでもあります。非常時には確認するべきだと強く認識しました。

一方、私もかつて大けがをした経験があり、多少は対応できた面もありました。自分がこうした状況なら、こうしてもらえれば楽かな、と考えながら命を守るように行動しました。

### 【被害状況と備蓄】

私の自宅そのものは無事でした。自家水道に軽い被害はありましたが、水源は二カ所ありますし大丈夫でした。お風呂は薪で沸かすことができます。

川沿いに建てていた小屋はギリギリのところで、近くの桂の原木が流木などを止めてくれたので、残りました。

もともと米や味噌などは備蓄しており二カ月分はあると思います。冷蔵庫も頻繁に開けなければ、すぐには溶けません。薪やガスも使えるので、電気が点かなくても何とか食事はできます。停電で精米は出来なくなっても、安いものに行けず不便ということはありませんでした。

## 【台風十二号により避難】

九月五日に台風十二号が来た時、避難をすめられました。名目入の息子宅への避難を考えましたが、同居している当時九十五歳の義母は寝たきりではないものの、色々と病気をしており、骨折をした経験から体にボルトが入っていたりもします。万が一具合が悪くなったら困るので、ヘリをお願いし、私が一人荷物を持って同行することにしました。

夫は、ヘリには乗らずに自衛隊の人たちと一緒に救済公民館まで歩いて、そこから車に乗せてもらい、名目入の息子宅に避難しました。そちらも浸水被害で大変でしたが、二階で暮らしていました。

九月六日には、息子が平庭経由で迎えに来てくれて、私は名目入に泊まったのち九日に帰宅しました。八日か九日あたりには近所の人が小さいバックホーで、軽トラが通れる程度に道路を開通させてくれて、寸断も解消しました。その後、義母は約二十五日入院していました。

## 振り返って

## 【今後も心構えを】

この家に嫁いだあと、昭和五十年に下流に

住む親せきの家が大雨被害を受けたことはありましたが、今までの経験からは今回のような大雨は考えられませんでした。



ヘリコプターによる避難の様様

ただ、以前から、「大雨の時にヒューム管が詰まって危ない」と言う話をしていたので、当日、夫はヒューム管を見に行きました。行かなければ、土石流の音は聞こえなかったのでも朝まで気付かなかったかも知れません。今後も災害への心構えは準備しておく必要はあると思います。

(平成三十年六月二十九日 聞き取り)

## コラム

## 台風10号における土砂災害

今回の台風において、岩手県内では155カ所の土砂災害が発生し、そのうち120カ所が岩泉町で発生しました。(土石流等が116カ所、がけ崩れが4カ所) 今回の災害の特徴について、岩手大学の井良沢道也教授は次のように指摘しています。

1. 豪雨が短時間であったため、斜面の崩壊よりも集中的な流水により、河川・沢にたまった土砂の移動や川岸の崩壊による土砂の流出が主体
2. 北上山地では集落や道路の多くが川沿いにあり、道路の寸断と集落の孤立が長期化した
3. 今回は直接東北地方太平洋側に台風が上陸する特異な豪雨であったため、斜面や河川が「雨慣れ」しておらず、土砂流出の一因となった
4. 小本川・安家川などでは河床(川の底)が上昇してきており、さらに流木が橋に掛かることで被害が拡大した



門字三田貝の国道  
(8月31日10:25)

出典：「2016年8月30日台風10号により 北上山地流域で発生した土砂災害」(消防防災の科学No.129(2017夏号))  
([http://www.isad.or.jp/pdf/information\\_provision/information\\_provision/no129/6p.pdf](http://www.isad.or.jp/pdf/information_provision/information_provision/no129/6p.pdf))  
岩手県 Web サイト (<https://www.pref.iwate.jp/kendozukuri/kasensabou/sabou/1009993.html>)

## 孫を背負い、てんでんこ



ほろわた  
袈綿

竹花 義孝

(六十八歳)



袈綿

竹花美千子

(六十七歳)

### 当日の状況

#### 【避難の決断に至るまで】

義 当日は妻と小学生の孫二人が自宅において、娘は仕事でした。雨が強まり、十五時ごろに部落長から、土のうが必要かと聞かれたので、役場への連絡を頼みました。そのうち、隣接する私たちの古い家との間に水がたまってきたので、スコップで溝を掘る作業をはじめました。

間もなく近所の人から、車を避難させた

と聞いたので、私たちも少し高い国道沿いのお宅に車を避難させてもらいました。みるみる間に川は増水し、十七時前には大木が立ったまま流れて来るようになり、橋にぶつかる度にすごい音を立てました。橋には流れてきた牧草ロールや木が詰まり、川は少し上流からこちら側と対岸の道路にあふれ、大木が庭にゴロゴロ入って来るようになり、避難を決断しました。お隣さんに「もう逃げるぞ」と言うと「俺は大丈夫だ」と言われました。

#### 【避難の決断後】

義 雨の中、ランドセルを持った孫たちを妻と一人ずつ背負い、ほかに何も持たず車を置いた方に逃げました。

美 当日、ご近所さんとは「気をつけてね、大丈夫？」と声を掛けあっていました。避難は「てんでんこ」状態でした。まだ家は大丈夫でしたが、道路はひざ上まで水が流れており、足がすぐわれそうでした。孫は怖いと騒ぎ、私は夫に追いつけず、少しの距離が長く感じられました。車にたどり着いてからは、日影名目利にある私の母の家に避難させてもらいました。

義 暗くなる前、袈綿の親せきに電話で我が

家の様子を聞くと「ガスボンベがぶかぶかしているよ」と言われ、これはだめだと覚悟しました。



流木など様々な物で埋め尽くされた袈綿の道路

#### 【娘は土石流で足止め】

美 その時は分からなかったのですが、娘はもっとひどい状況でした。帰宅中に二升石の国道で、土石流によって足止めされました。あふれた沢水が車のドアまで上がって来たそうです。足止めされた中には

妊婦さんもいましたが、土砂除けに来ていた工務店の人たちとその場にいた人たちが協力してロープを使い、胸まで水につかりながら、近くの高台にある工場の敷地に避難して夜を明かしました。女の人たちはタオルを貸してもらったようです。孫たちは心配して泣いていました。

**義** 心配でしたが一応、夜の早いうちに娘から電話で「携帯も電池が少なくてあまり話せないけど、みんなで頑張っていたから大丈夫」と連絡は入っていました。

## 翌日以降・被害と片付け

### 【自宅の被害状況】

**義** 翌朝に帰宅すると、まだ周囲は川からあふれた水が流れ、魚もいました。覚悟はしていたものの、嘔然としました。まず、玄関の鍵を開けても詰まった泥で開きません。泥を除けて開けると、今度は黒い泥のじゅうたんです。

**美** 昼ごろに娘も自分の車で帰宅し、「生きて帰ってきたよ」と言われました。そんなに大変だったとは知りませんでした。

**義** 自宅前の橋は、流木が積み上がって通れません。こんなことを言っただけですが、



橋とは思えないほど積もった流木の山 (8月31日8:41)

昔のように橋が洪水で流れれば、ここまでの被害にはならなかったと思います。

古い家は全壊で、床上一メートル三十五センチまで水が入り、石や流木のほか、泥も三十センチ以上積まりました。本棚は全て、洋服ダンスもほぼ転びました。

こちらの新しい家は大規模半壊で、床上一メートル弱は浸水して泥が約六センチ積もり、床下や壁にも泥が入りました。浄化槽の蓋が壊れ木クズや瓦礫が入って使えなくなり、給湯器も壊れてしまいました。

**美** ただ、床下は建築時に敷いた炭で浄化されたのか、臭いがありませんでした。

新しい家の二階は無事でしたが、古い家の家財はほぼ駄目になりました。家財を極力古い家に置いてあり、写真など思い出の品々の多くを失いました。

### 【自宅と周辺の片付け・復旧】

**義** 毎日、日影名目利から通って片づけをしました。最初は道具も無く、支援物資で古いバケツと壊れそうなスコップ、ブルーシートなどを頂いてきました。

**美** もっと大変な人がいると思い、遠慮して来てくださいました。私は民生委員なので、逆に気遣わなければならないとも思っていたところ「そんな状態の時に頑張らなくていいから」と、もう一人の民生委員さんが応援してくれて助かりました。ボランティアさんの派遣もなるべく遠慮しましたが、二日間だけ盛岡の人たち十数人に来て頂き、ありがたかったです。

**義** 一度に人が来てくださると違います。古い家から家財を出す作業をお願いして、その後、家は解体しました。

新しい家は、大工さんに頼んでチェーン

ソーで全ての床に穴を開けてもらい、中の泥や水を出しました。深いので結構大変です。二カ月半、乾燥させてから床を貼りました。また、壁をはずして水を含んだ断熱材と泥を出し、外壁を張りました。ドア・畳・ふすま・クロスも泥だらけで、交換になりました。

畳は断熱性の高い材質のもので、掃除して乾燥すれば大丈夫と聞いたのですが、中に残っていた泥が発酵したようで、気づくと畳が熱くなっていました。冷めると今度はキノコまで生えてきて結局、捨てざるをえませんでした。

また、浄化槽の復旧も大変で、木クズに水を吹きかけ、浮かして取りました。

**美** 家の周囲には泥が一メートルも積もっていたのですが、私のいとこが葛巻から泥除けの手伝いに来てくれました。

**義** 泥除けが一段落するまでは約二カ月かかり大変でした。毎日手伝いに来てくれて、私も一生懸命、一輪車で捨てました。もう少し待てばボランティアさんにもお願い出来たようですが当初、お願い出来る作業は家の中のみと聞いていました。

## 【体調不良】

**義** 無理をしたためか台風から約二カ月後、身体を痛めてしまいました。各地の針灸・マッサージで診てもらいましたが、すぐにぶりかえしてしまうので、今も整形外科に通院しています。

その後も家の周囲に取りきれない土砂が残り、臭いので後日、土砂の撤去と山土への交換を依頼しました。



泥が堆積した自宅周辺 ※写真提供：竹花義孝

**美** マスクを付けての作業は苦しく、取って作業しましたが、当初は空気が悪くて、しばらく体調が優れませんでした。洪水で何が流れてきたか分かりません。

## 【様々な支援を頂いた】

**美** 高校の同級生たちがカンパを募ってくれて、ストーブと燃料代を頂き、泣けました。  
**義** 最初はどう直したらよいのか困りましたが、その後は行政から補助金を頂き、足りない面もありますが、助かりました。

## 翌日以降・生活など

### 【水や食事】

**美** 当初、橋に流木が積もって渡れない状況でしたが、乗り越えて水を汲みに行く人もいました。見かねた地域の工務店さんが重機で片付けてくれたり、給水車より早く水を配ってくれて助かりました。

**義** 自宅も日影名目利も断水だったので、水場通いが日課となりました。毎朝、洗濯物を持って来て、近所の水場の下の段で、みんなで一生懸命洗いました。私は上の段で、持てるだけ汲んで運ぶ係です。水場通いは

約二カ月続きました。

当初は昼食も日影名目利で食べさせてもらったので、義母に迷惑をかけたが、助かりました。

**美** 避難前に声を掛けたお隣さんは無事でしたが、階段が埋まって二階から下りられなくなり、しばらく私たちもカゴを使っておにぎりや飲みものを渡しました。

## 【電気・水道の復旧と帰宅】

**義** 停電は日影名目利も長引き、ロウソク生活でした。停電の復旧後に、自宅の地下水を揚げてみましたが、浄化槽が壊れたので活用できませんでした。

自宅での寝泊りは、浄化槽も水も使えるようになった約二カ月後からです。まず私たち夫婦が先に二階で寝泊りし、その後は娘や孫たちも帰って来て、しばらく二階を中心に暮らしました。

再建が進み何とか家が形になったのはその年の十二月二十九日です。その後、娘たちは仮設住宅に入居しました。



床下の水を出し、乾かす ※写真提供：竹花義孝

## 振り返って

### 【なにごととも将来を考えた判断を】

**義** 昭和五十七年、自宅前の橋は木製だった時に流されています。水は自宅まではギリギリ来ませんでした。周囲に浸水した家もあります。その時に応急で復旧した橋なので、大雨に備えた高さがあまりなく、以前から土砂の堆積で大雨での危険性が地域

で問題視されていました。

**美** 残念なことは、皆が危惧していたのに何ともならなかったことです。なにごととも将来を考えた判断が必要だと思えます。

昨年は外が汚くて気力が出ず、夫も体調を崩して大変でした。しかし、今年に入り周りがきれいになってくると、だいぶ気が楽になってきました。様々な役職からも元気を頂いたように感じます。

（平成三十年六月二十七日 聞き取り）

## コラム

### てんでんことは

**津波から身を守るには、一刻も早く、それぞれ、てんでんばらばらに高台に逃げるしかない**

古くから岩泉町も含む岩手県沿岸部にある方言「てんでんこ（それぞれに）」が明治三陸地震津波などを契機に、三陸沿岸で広く「自分の命は自分で守る」意味として言い伝えられるようになりました。

1990年に津波災害史研究家の山下文男氏が紹介して全国に知られるようになりました。また、京都大学の矢守克也氏は「てんでんこ」に「自身の避難が他人の避難も促進する」「人々がお互い信頼感を事前に醸成すること」「生存者の自責感を軽減すること」という意味もあるとしています。

資料：東日本大震災釜石市教訓集「未来の命を守るために」（2016年釜石市）



## 断水の長期化で困った



浅内

大弓川和徳

(五十七歳)

### 当日の状況と対応

#### 【仕事中から帰宅まで】

私の職場は小川地域の郵便局で、当日は通常どおりバイクで仕事をしており、当初は雨が多少強いと感じる程度でした。

門小学校近くの橋の下に地元の人が使う道があります。上流地域に集配に行った帰り、そこに水が来ていました。さらに十五時半ごろ、上流地域の配達を終えて戻って来ると、川はさらに増水し、強風で倒木もありました。

十七時半に仕事を終え、帰り道も雨は盛んに降っていました。道路には各所で沢からの水が流れていたものの、車で走れる程度でした。途中、穴沢で川を牧草ロールが流れて行くのが見えました。

帰宅すると、高台にある自宅に問題はなく、その後は私が分団長を務める消防団の屯所に行きました。

#### 【当日の消防団活動】

消防団では早い段階から作業が行われていました。当時は屯所の近くで、沢からあふれた水が数軒の民家や商店に押し寄せ、側溝もあふれていました。土のうを作ってそこに積む作業を、消防以外の人も含め約十人で行っていました。

約二十年前にも同様のことがあり、その時点ではあまり危機感はありませんでした。また、作業中に危険を感じるような水位にはなりませんでした。

屯所に新聞社から電話が入り「浅内周辺で人が流された模様ですが、何か情報はありますか」と聞かれたものの、当時は情報がなく、後日、浅内大沢のことと分かりました。当初は消防署からの連絡はありませんでしたが、消防署が被災したためかもしれません。振り返ると、もっと他の地区とも連絡を取り合えばよかったと思います。

その時、浅内大沢へ安否確認に行くことも検討されましたが、途中の道路が既に流失し、廃線跡の橋梁も流されたと分かり、行けない

状況でした。

雨は暗くなってもまだ降っていました。止んだ後もしばらく道路に水が流れていましたが、二十一時ごろにはすっかり星空になりました。作業は二十一時ごろで終了としました。停電のためテレビは見られず、聞こえるのはカーラジオのみという状態で、休むことになりました。



流された岩泉線の橋梁（後日撮影）

### 翌日以降の状況と対応

#### 【片付けや搜索活動】

翌日は早朝から片付け作業を行いました。

商店の排水、泥出し作業のほか、水が滞留した沢や、詰まった下水などを対処しました。地区で被害を受けた民家は三、四軒で、うち一軒は床上浸水でした。

作業の後には職場に行きました。まだ道路のあちらこちらを水が流れていました。車で行けたものの、当初は通常の業務が出来ない状況にありました。

徐々に他の地域の大変な状況も分かり、浅内大沢で人が行方不明とのことで、三日目ごろから、合計三日間ほど捜索に加わりました。消防団から約十五人、地元住民が五、六人、さらに岩手県警も加わって合計約三十人で行きました。捜索は難航し結局、十日ほど経ってから見つかったようです。

## 【物資・ライフラインについて】

支援物資は三日目ごろに、ヘリコプターで二回ほど届きました。自治会長さんが各班長さんに指示し、ブルーシートを広げて届いたカップラーメンや缶詰などの数量を確認し、割り振りを行いました。

それまでも、車がある人は買い物に行ける状況でした。また、自給野菜や米の蓄えのある家も多く、さらに薪ストーブも使えるので、食べものは各自で対応していました。



浅内大沢地区の寸断された道路 (8月31日 13:17)

町水道の断水では困りました。電気は約一週間で復旧しましたが、水の復旧は一カ月以上かかったので、一生懸命、自宅近くの湧水を汲みました。茶碗を洗うだけでも、十、二十リットルの水が必要ですから、普段の水の使用量を実感しました。車が無い人や高齢者には特に影響が大きかったと思います。

ただ、小川方面には通行できたのでそれほど孤立感はありませんでした。浅内大沢は全員避難となりましたが、浅内では避難者もいませんでした。ボランティアの方も、浅内大

沢には行きましたが、浅内では要請する人もいませんでした。

## 【その後の台風での対応】

その後も再び台風が来た時に、避難指示が出て、その時は皆さんに避難を呼びかけて歩いたほか、土のうも作りました。しかし、浅内ですべて避難した人は川沿いの二名ほどでした。

## 今後について

### 【備えの拡充】

今後への備えとして、台風後には発電機を購入し、懐中電灯も多めに準備しました。また、最近では車に水やパンを少しばかり積んでおくようにしてあります。

私は浅内の自主防災組織の会長にもなっていますが、津波のある沿岸部と違い、内陸では避難経験や習慣が乏しいようにも感じています。全員が全員、スムーズに避難してくれるわけではないということを、覚えておかないといけません。

(平成三十年七月十日 聞き取り)

## 夫婦お互い助け合った



扇の沢

川原畑スエ

(六十九歳)

## 当日の状況

## 【仕事に行くも、胸騒ぎ】

私の夫はミキサー車や重機などの運転手をしています。当日は暴風の予報が出ていたのが危ないと思い、「仕事さ行く」という夫を止めました。一方、私は道路パトロールの人たちが集めてくるゴミを整理する仕事をしており、十二時半までの予定で出勤しました。しかし雨が激しくなり、川も増水して来たので「こりゃただごとではない」と胸騒ぎがして、十一時で帰らせてもらいました。

## 【間一髪で山津波から助かる】

帰宅するとすでに一回、山津波が起きたよ

うで、水がどんどん沢から家の方へ流れて来ていました。夫に「早く、水切り回さねえば家がダメになる！」と叫びました。私は水を流したい方に溝を掘りはじめましたが、とても間に合いません。

二回目の山津波が来たのはその時です。ちようどお昼ごろで、私は気付かずに一生懸命、溝を掘っていました。夫はちようどその時に来て、山津波が見えたようです。突然、夫に山の方へ突き飛ばされたのです。「何！痛いっけ！」と叫ぶと、サーツと山津波が通りました。水と土砂が、ドツと流れて来たのです。夫に突き飛ばされないと、私は死んでいたと思います。お互い助け合ったような感じでした。すごい雨でどうにもならず、危ないのでつないでた犬を放して家に入りました。

## 【どうにもならない状況】

確か十四時ごろ、沢から「ゴロゴロゴロゴロ。ドッカーン」と雷のような音が聞こえました。見ると、大きなクルミの木が、根こそぎ流れ、辺りのクルミの木は軒並み流されました。土石流も発生し、眼下の道路やガードレールを壊し、さらに別の方からもクルミの木が流れ来て、それらがぶつかりあって止まりました。幸い、家はそれらの直撃は免れました。

しかし、家の周囲には再び山津波が来て、土砂が床下に入りました。犬のつなぎ場も持って行かれたので、犬は間一髪でした。



無事だった犬のココ（後日撮影）

眼下の沢と道路は一体になり、すさまじい状況です。丸太や石、トタンや上流の家の作業小屋、鍋までも流れてきました。さらに道路の下にある、沢水を通すヒューム管が詰まり、水が道路を流れて舗装が破壊されました。恐ろしい光景でした。

家は停電で電話も通じません。そのうちに外も暗くなりましたが、懐中電灯は電池切れでした。夜はローソクで明かりをとり、沢の

流れの音が怖くてあまり寝られないまま夜明けまで耐えました。

## 翌日以降の状況

### 【被害状況】

翌朝、外の景色は一変し、庭に大量の木や石が流れ込んでいました。植えていたキウイや、米をかけるハセ棒も流れてしまい「なすすべ。(どうしよう)」。ここに住んでられないな」と思いました。周りの安否も分かりませんでした。

田畑には、今まで水が出なかった沢からも水が出て、何枚かは激しく掘られてしまいました。収穫直前の稲はほとんど残らず、その跡は恐ろしいほどです。

家は床下に入った泥水が跳ねて畳も多少濡れ、その後傷みました。車庫にも泥が入りましたが、車は大丈夫でした。仕方なく、最初の数日はせめて外のトイレには行けるよう片付けしていました。

### 【食の備えが活かされた】

食料は、山の中なので常に米も備蓄しており、畑の野菜も生き残っていました。冷凍庫

にも食料のストックがあり数日は困りませんでした。薪ストーブとガスで料理も出来ましたが、以前には大雪で四日間停電したため、ガス炊飯釜を備え、今回も役立ちました。ただ、冷凍品は二十五日続いた停電で徐々に溶けましたし、米を精米できなくなりました。



大川地区総合交流センター サンパワーおおかわ (後日撮影)

### 【徐々に人が入って来た】

二〜三日目ごろには上流の家の人がやって来ました。道路は通れず、山を来たそうです。

さらに三日目には消防の人たちが安否確認に来てくれました。続いて四日目には、電気屋さんが増えてくれましたが、電柱が倒れて当分は電気が送れないということでした。「何か欲しいものは？」と聞かれ、「電池が欲しいです」と言うと、二人分のヘッドランプと電池をくださったって助かりました。

「この先どうすっぺ」と思っていると、五日目にまた消防の人たちが缶詰めなどの物資を背負って来てくれて「無理しない方がいいと思う」と言われました。

### 【サンパワーおおかわへ顔出し】

そこで五日目に避難所のサンパワーおおかわに顔を出すことにしました。一時間半かけて一人で石や木を乗り越えつつ、歩いて行きました。道路は直線部分を除きほとんど無く、川のほとりに降りつつ歩きました。サンパワーでは知っている人たちの顔を見てホッとしましたが、犬もいるのですぐに戻って来ました。

### 【サンパワーおおかわへ一時避難】

再び台風が来た時には、消防の人にすすめられて夫と避難しました。犬と一緒に歩いて

きです。合羽を着ずに傘を差して行ったところ服が濡れてしまいました。徒歩でほとんど荷物は持てなかったうえ、短期のつもりで上着や着替えも持って行きませんでした。毛布が足りず、寝る時は近所の母さんと毛布を横に分け合ったので寒くて、風邪をひいてしまいました。

サンパワーではデイスービス用の風呂に入れたので良かったです。さらに、携帯電話が充電でき、電波も通じたので、親せきとも連絡をとることができました。

夫は避難中に「泥除けするところの運転手をしてくれ」と依頼を受けてサンパワーから現場に通うことになりました。私は三日ほどサンパワーにいました。

### 【途中で車で帰宅】

そのころ、扇の沢までの道路の仮復旧が始まっており、帰りは途中で車に乗せてもらいました。帰りにトイレトパーやローソクを頂き助かりました。後日、長靴を頂いたりパンや水、さらに衛星携帯電話も届けて頂き、近所の人たちが使いに来るようになりました。

夫は四、五日ほど押角方面で運転手をした後に、帰宅して今度は近所で運転手をはじめ

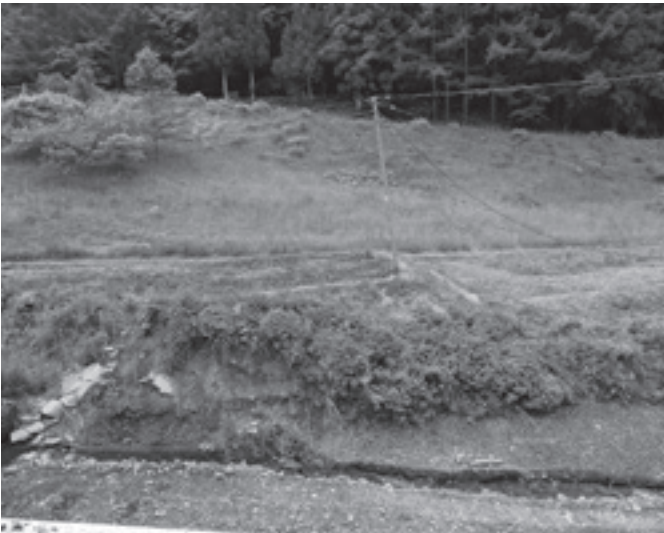
ました。

### 【様々な協力を頂いて片付け】

一時避難を挟みましたが、ひたすら家の周辺を片付ける日々が続きました。そう簡単にはこの地を離れられません。

盛岡に住む息子も、土日に八回ほど来て手伝ってくれました。床下の泥除けのほか、庭に流れてきた土砂や木などを、一輪車で片付けてもらいました。

田畑については迷っていたところ、下流の人たちの応援を頂き、頑張って畑の掘れたと



被害を受けた水田（後日撮影）

ころに石などを入れて徐々に埋めています。水田はまだ直しておらず、無事だった区画も水源からのホースなどが壊れ、翌年の稲作は休みました。水田は、年齢も考え被害の小さな区画のみ直す予定です。今年はやく無事だった水田に田植えが出来たので、夫と食べる分程度は出来ればと思います。

### 振り返って

#### 【お互い助け合った】

私が十八歳の時にお嫁に来てから、このような水害は初めてです。ただ、次男が小学四年生の時、大雨でトイレが流され、庭に水が流れてきた経験があります。

お嫁に来る前、アイオン台風の時には、家が倒れそうになったのですが、沢山の大きな味噌樽がそれを防いだとも聞きます。また、道も流されたそうです。高齢の方々は、その時よりも今回はひどかったと話しています。今回の台風のと、天気予報をよく見て、ひどい時は夫を休ませるようにしています。休んだおかげでお互い助け合って自分も助かりましたから。

（平成三十年七月十一日 聞き取り）

## 地域力で命をつないだ



外椀

三上 朝雄  
(七十歳)

外椀

三上 和子  
(六十五歳)

## 当日の状況と対応

## 【十二時ごろから激しい雨】

和 当日の朝、夫は大川地域振興協議会の会長として打合せのため大川支所に行き、私は郵便局の仕事に行きました。

雨は十時ごろから降りはじめ、十二時ごろには激しくなりました。郵便局は十六時に閉める予定でしたが、十五時には停電で営業中止となり、十六時十分ごろに帰宅しました。すると夫が家におらず、「こんな

すごい時にどこに行ったべな」と思っていると帰ってきました。

朝 教員住宅近くで消防団や地域の人たちと倒木を片付けていると、あふれた沢水が住宅の床下まで来て、対処していました。

和 そのあと、地区の倉庫に入っている除雪機や発電機を守るために、みんなで少しで高い方へ動かしました。

朝 川の水位の上昇は急で、地区の公民館の少し下まで水が来ており、護岸からあふれる寸前のような状態でした。すでに道路に水が上がっている場所もありました。



避難所となった釜津田小学校（後日撮影）

## 【当日夕方、独自の避難命令】

和 夫は地区の自主防災組織も担当しており、「これじゃ、なども（どうにも）ならないから」ということで、十七時十分ごろ、避難命令を出しました。

私は自主防災組織の情報担当だったので、釜津田小学校の体育館に避難するよう、地区の皆さんに伝えました。ちょうど支所長さんや駐在さんも巡回に来ており、駐在さんも声掛けしてくれました。

周辺の道路はまだ歩ける状態でした。徐々に暗くなり、顔が見えないので「〇〇さんいる？声出してね！」と声をかけあって、安否を確認しました。皆さんも危険を感じていて、自主的な避難の動きもありました。ある人は、「ご飯炊いて来た」と炊飯器も持って来てくれました。

釜津田の他の行政区でも、移動距離が長くないように、皆さん相談しながら避難しており、避難はスムーズだったようです。一方で家が高い所にある人は家にいるという人もいました。

## 【当日、十七時半に炊き出し開始】

和 十七時半ごろには雨が小降りになったの

で、給食給水班の人たちに声をかけ、炊き出しを始めることにしました。私は近くの商店でお米三升を買って班の人たちに渡しました。そのお米はコミュニティセンターで炊いたようです。メニューはおにぎりのほか、近所の人がおはぎを持って来てくれたりもしました。さらに学校からはお茶の準備、布団がわりのマットや反射ストープの準備など、様々な協力を頂きました。結局、その夜はおよそ四十六人が避難しました。朝 支所長さんと駐在さんは、帰れなくなりました。さらに、その日は釜津田診療所の診療日で、お医者さんは約四時間かけて、松草経由で何とか盛岡に帰ったそうです。が、看護師さんは帰れず、炊き出しなどを手伝ってもらいました。

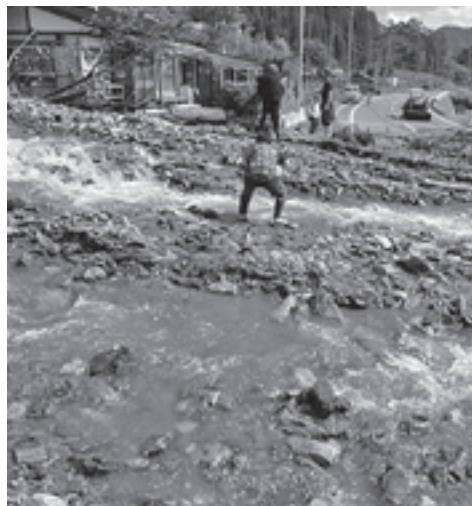
## 翌日以降の状況と対応

### 【炊き出しと対策本部の設置】

朝 朝には川の水位はだいぶ下がりましたが、道路は沢から流れ出した土砂や大木、ガードレールに引っ掛かった木などにより、車ではほとんど移動できない状態でした。支所長さんと駐在さんはリュックを背負いナタとノコを持ち、パトカーは置いた

まま歩いて大川に戻りました。後日聞くと約四時間かかったそうです。

和 およそ一キロ以内の人たちは帰り、残った人はコミュニティセンターに移動して朝食をとりました。停電でも炊事場のガスは使えます。朝のメニューはおにぎりに加えます。皆さんも少し落ち着いた雰囲気になりました。結局、炊き出しはこの二回で終了しました。



避難所からの帰宅（8月31日）

※写真提供：三上亜希子

### 【道路の片付け】

朝 屯所には地域振興協議会と消防で合同対策本部を設けました。取り急ぎ道路の土砂を撤去することにして、農家にトラクターや重機を出してもらおうようお願いし、配置を指示しました。また、会長として地域を

巡回することにしました。

和 「こんな状態であれば、もう岩泉（中心部）もスゲエもんだから全然ここに援助も、来ることは無いものだ」という感覚で、地域で行いました。道路も完全な決壊は少なく、土砂を避ければ片側が通れたので助かりました。

朝 国道一〇六号松草や国道四五号早坂への道路は被害が少なく、早期に盛岡方面のルートを開けることが出来ました。また、途中からは土建屋さんが応援に来てくれて助かりました。ただ、種倉の県道決壊箇所は簡単に直せず、大川方面へ行けるようになるには数日かかりました。

### 【安否確認】

和 当時、私は町の民生委員女性部で会長でした。最も必要なことは安否確認と考え、釜津田の他の民生委員さん三名に、可能な範囲で安否確認と健康チェックを依頼することにしました。消防団と一緒に待機していた地域振興協議会の推進員さんには、もし大川と連絡が取れたら経緯を報告してもらおうよう頼みました。

私も血圧計を持って外椀地区を回ると、停電で医療機器が使えない人や、持病で

困っている人がいました。対策本部で相談の上、盛岡への入院をすすめて実際に入院した人もいました。

地区にいる人の確認は一日で出来ました。が、仕事で外から帰れなくなっている人などの安否は三日ほど分かりませんでした。あとで聞くと、浅内川代でトンネルの中に泊まった人もいましたし、線路を歩いて来た人もいました。結果的には、釜津田では人的被害はありませんでした。

### 【家屋の被害状況・片付け】

**朝** 釜津田でも住宅被害があり、一軒は裏山からの水で完全に住めなくなっていました。床下浸水も数軒ありました。

**和** 他にも牛舎に水が入ったり、車が埋まったり、排水のヒューム管が詰まったという被害も出ました。片付けの手伝いが必要な現場には主に消防団のほか自主防災組織・近所の人・親せきなどが行き、順番に手を付けて行ったようです。

**朝** 現場では重機のパンクなどがありました。が、けがの発生はありませんでした。



道路に流れ込んだ土砂の片付け（9月14日）

※写真提供：三上亜希子

### 【生活・ライフライン・支援】

**和** 近所の家では黒電話が使えたようで、「東京から電話が来た、岩泉が大変だ」と話していました。私たちは停電でテレビが見られず、状況が分かりませんでした。

そのうちにテレビを見た人や親せきなど、協力するという人たちが盛岡から来てくれるようになり、飲料やガソリンなど、様々な支援を受けました。さらに私も農家

なので米と野菜・味噌はあり、とにかく命だけはつなぐように過ごしました。

確か三日目に青森から東北電力の電源車が来てくれて、停電が解消しました。

**朝** 三日目は衛星電話も届けられ、大川・浅内と連絡が取れるようになりました。また、同じ日に自衛隊も入って来ました。

**和** 自衛隊は、物資支援の前に安否確認が必要ということで、先生方の協力でPTA台帳を出してもらい、民生委員さんの立会いのもと安否確認の結果を書き込むことで確認して頂きました。

自衛隊からは何回か物資を届けて頂き、届くと夫は自主防災の給食給水班を呼び、例えばおにぎりやパンを、各部落の人数に応じて公平に分配します。続いて物資配分班が手分けして、車で配ります。物資は食料以外には飲料、ティッシュ・ホース・歯ブラシ・おむつ・カセットコンロ・毛布などを頂きました。毛布は防災のため現在も保管してあります。

水道に関しては、釜津田は町水道が無事だったので、我が家は大丈夫でしたが、逆に沢水を水道にしている家では断水になっていたりしました。そのため、飲料は断水の家へ箱単位で、など必要に応じて臨機応変に対応していました。



## 【薬の対応】

和 役場から推進員さんに、薬が必要な人の情報の要請があり、民生委員さんに「薬の希望をとってください」と伝達しました。その際、一回脳梗塞になった方から「かすちゃん。今朝飲んだっけええ、薬が無くなった」と言われました。すでに薬は頼んであり、その晩は飲めなかったはずですが、次の日に薬が来ました。

推進員さんによると、岩泉までは四時間かかったそうです。食事はそれほど困らなくても、こういった対応は大変です。

## 【ようやく大川へ】

朝 ようやく種倉の道路決壊箇所が開通してから、本部となっていたサンパワー大川で支所長さんに会うことが出来ました。地域振興協議会の範囲は浅内までなので、会長として浅内まで巡回して寄部や浅内大沢の被害の大きさに驚きました。

## 【再び避難】

和 数日後に再び台風が来た時にも小学校へ避難しました。その時には、体育館は土砂

が流れれば危ないということで、校舎の二階へ避難しました。また、犬を飼っている家の人たちのために、校長先生が配慮して図書室に入れてくださいました。

## 振り返って

## 【組織の重要性】

朝 私も、本当は皆さんと一緒に泥んこになって稼げればよかったのですが、指示する人も必要です。ここは組織がしっかりしているのです、消防と連携を取れば、少々の災害でも大丈夫と思っています。

私は現在、自主防災組織や地域振興協議会の会長は辞め、消防団員としても引退しました。ただ、非常時のための消防団の機能別団員を担うことになりました。

和 今回は地域に対策本部を設けることで、デマが立つなどの混乱が無く済みました。

私は今も民生委員は続けており、大川地区の会長です。釜津田では今回、安否確認を自主的に行うことが出来ましたが、振り返れば状況次第ではかえって危険をとまなう可能性もあります。安全に出来る状況でないと思ひます。



盛岡とを繋いだ松草への県道 (9月13日 13:53)

## 【過去の災害】

和 昭和二十三年のアイオン台風を経験した方々が、「あの時よりなど(どう)だや」「大きいか」「おらが家もあの時もここまできった」と、ほぼ同じか、今回のほうが少々大きいか、と話しています。

(平成三十年七月十二日 聞き取り)

## 暗くなってからの混乱



小本二  
竹花 敏明  
(七十一歳)

### 当日の状況と対応

#### 【川舟の様子を心配】

私は小本地区振興協議会と自主防災組織の会長を務めており、当日は台風に備えて警戒していました。また、中島地区に繋留していた川舟の様子を見に行き、たまった水を捨てていました。今まで太平洋まで舟を流してしまったことはありません。

十三時ごろに行き、十六時ごろにも行くところの川の水が増えていました。そのあと中島地区に持っている物置の様子を見に行きました。帰宅するところには風も強く、激しい雨が降っていました。

#### 【十八時ごろ、異常な増水】

次は十九時ごろに川舟を見に行くつもりでしたが、気になり十八時ごろに行きました。すると川には方言で「でばな」と呼ぶ様々なゴミが流れていました。かれこれ約四十年は川舟を使っていますが、これはかなり危険だと思いました。

舟をどのようにつなぐか考え、クルミの木に上ってロープを結びました。目に見える勢いで水位が上がっており、何とか木が折れないでほしいと思いました。

#### 【十九時ごろ、浸水始まる】

十九時ごろには星が見えてきました。そのころ、私の舟の近くで川舟を繋留している中島の人は様子を見に行った帰り、国道に小本川から逆流してきた水で、帰れなくなってしまうました。その時、小本津波防災センターに避難しようとして立往生していた人を見かけ軽トラに乗せて近くの岸公民館に避難したそうです。

私は同じころ、自宅で夕飯を食べてから小本支所に行きました。消防団が避難を呼びかけたので、支所に入る防災センターには、すでに避難者の姿も見えました。十九時十分に

停電となりましたが自家発電があり、水道も使えました。

このころには周囲も水が出ており、私は一時帰宅し妻にもう一台の車で避難を促しました。というのも震災の津波で被災したとき、一緒に避難したので残した車が被災してしまつたためです。



当日深夜の防災センターの様子 (8月31日1:50)

#### 【高齢者の避難】

その後、小本小中学校の近くへ小本川の様子を見に行きました。また三十分後に行くと、堤防のすぐ下まで水が来ており、三回目には、堤防の上まであと一メートル程度まで水が迫

り、立ったままの木も流れている危険な状況でした。

自宅の近所には寝たきりの人も住んでいるので様子を見に行き、地区で役職をしている人に避難の周知を要請しました。ただ、高齢者を今から防災センターまで避難させるのは難しく、近所にある津波避難所の「中高年齢者就業改善施設」を開けることにして、支所で鍵を借りて来ました。

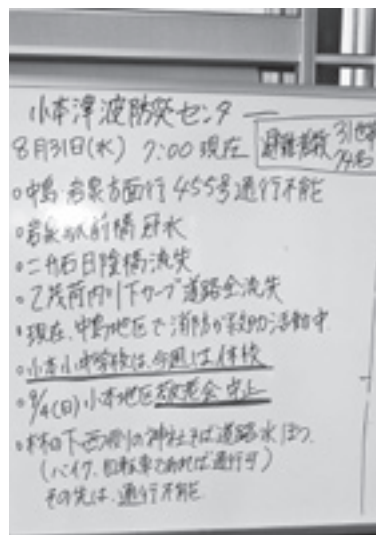
今度は発電機を探しつつ再び防災センターに向かう途中、用水路があふれており車では危険なので、歩いて渡りました。水はひざの高さまであり、高齢者が歩くのは危険です。支所には救助を求める電話が何件かあったものの、行ける状態ではなく、二階や屋根に上がるよう伝えました。中島では二階や消防屯所の塔の上に避難中という情報もありました。

## 【避難所の混乱】

その後は身動きがとれず、防災センターに詰めていました。十九時以降、暗くなつてから避難して来る人も多く混乱していました。必要なものが足りず、座布団も無く、要介護の人の受け入れは困難でした。

夜遅くには周囲の水が引き始めました。当日の避難者数は、小本津波防災センターに二

百人、中高年齢者就業改善施設に四十人のほか、小本トンネル前避難所にも八人が避難しました。中高年齢者就業改善施設と小本トンネル前への避難者は当日深夜に全員、自宅に戻りました。



翌朝の防災センターと掲示されていた情報（8月31日9:18/9:20）

## 翌日以降の状況と対応

### 【炊き出しなど】

翌日から防災センターで小本・中野の自主

防災組織による炊き出しが行われ、道路が開通すると中島・中里・日向や田野畑村アズビィホール、九月一日には宮本・乙茂へも食料の配送が行われることになりました。食材は田野畑村や宮古市田老のお店などから調達されました。

九月四日には自主防災協議会の会議を開催し、小成・茂師・小本・中野・大牛内の自主防災組織の会長さんたちに集ってもらい、炊き出し班三班と物資配送班三班を編成し、交代制で動くことになりました。作業には避難者も加わりました。

九月五日ごろから自衛隊でも炊き出しをして頂けることになり、九月十六日まで続きました。九月十八日からは宮古市の業者におにぎりなどを外注し、汁ものなどはここで作りました。十月末まで自主防災組織による炊き出しや支援物資の配送は続け、避難所の閉鎖は十一月二十日です。

大牛内など高台の人たちも、文句も言わずに対応して頂いて、ありがたかったです。津波の時もそうでした。台風後の支援活動では、自主的な活動や軽トラの提供などの動きも多く、心強かったです。

台風十号の直後に襲来した台風十二号の時も避難の動きがありましたが、その時は小学校・中学校への避難者もいました。

## 【自身の被害状況】

今回、自宅は大丈夫でしたが、中島の倉庫が床上およそ六十センチまで浸水してしまいました。津波災害に備えて内陸の中島にこの倉庫を建てる時に、父から聞いたアイオン台風当時の水位を参考に、基礎を五十センチ高く建てたのですが駄目でした。布団や家電のほか、野菜・冷凍魚・味噌などの貯蔵食がすべて駄目になりました。

一方で川舟は諦めておりましたが、台風から約一週間後に見に行くと、木にぶら下がっており無傷でした。

## 伝承と今後の課題

## 【アイオン台風について】

昭和二十三年九月のアイオン台風の際、私は三歳で中島の曲り家に住んでいました。まだ堤防の無い時代です。父は戦地から引き揚げてきたばかりで、消防の分団長でした。中島に高久根という地名の若干高いところがあります。聞くとそこでは当時、父は一軒一軒、夜中に歩いて「水が高久根も越えそうだから気を付けろ」と声掛けしたそうです。

自宅は、一階の畳の上で十〜二十センチほ



翌日の中島地区 (8月31日 15:16)

ど浸水し、飼育していた乳牛は畳の上へ、人は二階へ避難し、豚は逃げて無事だったそうです。自宅の井戸は、水害に備え高くしてコンクリートも巻いてあったために、水に浸かずに済んだようです。今回はその時よりも一メートル以上、水位が高かったと考えられます。

ちなみに私が子供のころは周囲に何軒か、避難用の舟を備えている家がありました。また、高齢の方が「さかさ水が来たら気をつけろ」と話していました。今回も中島、卒郡、中里といった地区は水の逆流による被害を受

けています。お年寄りの言い伝えは聞くべきだと思います。

## 【自主防災組織について】

小本地区では平成十九年五月に自主防災組織を立ち上げて津波を想定した各種訓練を重ねて来ました。ただ、組織があってもこれまでのマニュアルは地震・津波を想定したものであったので、洪水の想定も必要です。地域の組織は二〜三年もすると役割が変わるうえ、災害時に担当者がその場にいるとは限らないので、町全体の組織的・体系的な動きが必要だと思っています。

ただし、最も重要と考えられるのは臨機応変な対応です。データやシステムの整備も重要ですが、安全な範囲で、こまめに足を運ぶでの目視や、一軒一軒歩くことも重要だと思います。

災害後も同様で、コミュニティが変わってしまった仮設住宅では、隣近所と話す機会が少なくなるので、一軒一軒を訪問して、沢山の人がいる説明会場では出ないような意見を拾い上げることが精神面でのケアにもつながると考えられます。

(平成三十年一月二十五日 聞き取り)

## 消防団で泥出し活動



中野二

三浦 茂幸

(五十二歳)

### 当日深夜までの状況と対応

#### 【避難の呼び掛けに至るまで】

当時は消防団七分団の副分団長を務めており、当日の朝から屯所に詰めて他の各屯所と連絡を取り合っていました。七分団は町内消防団で最も人数が多く、当日は約七十人以上が出動していました。

いつもと違う台風の進路に危機感はありつつも、通常の台風同様の警戒態勢で、小本川の水位の把握、住宅地や旧小本支所近くにある沢水が出やすい場所の巡回などを行いました。小本で雨が激しく降ったのは午後の短時間で、川の水量もまだ特別増えてはいませんでした。

ただ、消防無線で上流の岩泉・小川のほか

安家などの地域で「沢水があふれた」「急激に増水している」という情報がありました。上流で結構降ったのは感じられ、小本も時間差で水位が増えるので、一時間に一回のペースで川の水位を目視で確認しました。また、携帯電話で赤鹿橋の水位計が二メートルを越えたのを確認し、避難水位が二・五メートルなのでやや危険と感じました。

震災の経験もあり、早期の避難が重要と考えました。そこで小本支所にも相談し、七分団各部に「避難指示は出ていないものの、避難所に避難を促すように」と連絡しました。まだ明るい時間でした。

#### 【避難の呼び掛け】

避難の呼び掛けは消防ポンプ車などで地区を巡回する形です。七分団一部の管轄範囲に關しては、各戸を巡回して小本津波防災センターへの避難を呼びかけました。ある程度の人々が避難してくれるまで再三広報し、そんなりとはないものの、割と早めに避難してくれた人も多かったように思います。津波に備えた避難訓練なども従来から行われていたことは多少の効果があったと思われる。様子を見に戻ろうとする人もいましたが、諦めてもらいました。

その後は屯所、防災センターのほか、小本トンネル付近の津波避難所にも消防団員と車両が待機することになりました。



住民の避難にも使用されたゴムボート (8月31日2:04)

#### 【車両の誘導と長内川の氾濫】

また、確か十八時ごろには岩泉方面には行けないという情報も入っていましたが、道を行く車も多くなりました。危ないので「岩泉方向は止めっぺし。田野畑方向には通してやっぺし」と七分団一部で誘導することになりました。

三陸北道路と国道四五五号の交差点で消防

ポンプ車を止め、六、七人で誘導灯を持って行きました。風は強いものの雨は弱まり、この時点では信号機も点いていました。近くの長内沢は結構水が出るので気を付けていました。

すると、若い団員が「シゲさん水が来たよー！」と叫びました。交差点に濁流が流れて来たのです。「走って逃げろー！」と、皆で走って防災センターまで逃げ、車両も移動させました。その時は最も身の危険を感じました。長内沢はトンネルを経て小本川に合流しますが、増水で滞留し、逆流してあふれてきた模様です。

戻ると、防災センターの周囲もひざ上まで水が上がりました。周辺は暗くなり二次災害の危険もあったので、明るくなるか、水が引かないと消防としても家に孤立した避難者を移動させられません。やむなく待機することになりました。

ただ、周辺が浸水してから、防災センターで備えていたゴムボートを使い、体調が悪い人を避難させた例もありました。水深はすでに深い所で腰まで浸かる深さの場所もありました。また、屯所と支所を行き来したり、小本トンネルの避難所で待機している二、三人の団員と交替といった最低限の動きはできました。消防無線が途中から使えなくなり、他の分団からの情報はもう一切入って来ません

し、携帯電話もその後不通になりました。

## 【深夜に中島の状況を見に】

日付が変わる前ごろ、広域消防の人が中島方面を確認したいとのことで同行しました。歩いて広域消防の二名と七分団一部の部長さんと合計四名で水が流れる国道を歩きました。真っ暗な中、小さな峠を越えて中島に下りて行くと、先がもやっと光るような感じで足元に水面が現れ、その先は進めませんでした。その後も消防団で様子を見に行き、明け方までにはかなり水が引きました。交替での警戒のため、夜は仮眠程度でした。

## 翌日以降の状況と対応

### 【被害の少ない地区からの応援】

夜が明けて、水が引いたため七分団一部の団員には半日の休養を設けました。私は午後から中島へ、その後は中里にも行きました。両地区ともに床上浸水が多く、多くの団員宅が被災して活動どころではない状況でした。そこで被害が比較的少ない小本・中野・大牛内・茂師・小成の消防団員が協力して班を編成し、中島・中里で活動することになりました。

中島・中里の部長さんたちには、地区で必要とされる作業をおおまかに把握して欲しいと伝えました。例えば中島は七分団第四部ですが、屯所に隣接する中島地区多目的集会施設が地区における支援活動の拠点となっていたので「皆さんにも聞いてほしい」と話しました。



翌日、信号が消えている三陸北道路の交差点（8月31日13：48）

### 【片付け作業の開始】

そして、台風の翌々日からまずは体制を組み、消防団で民家の泥出しなどを始めました。

まず家財を出す必要があり、畳など重いものもあるので、一日十二〜十三人の班で、四班程度編成し、交替で休みもとりながら「そっちは人、足りてっか?」「こっちに来てください」とトランシーバーで連絡し合って動く形です。

私は体制を整えた後は、家の事情により一週間ほど活動できませんでしたが、その後は作業にも携わりました。泥はひざ下まであり、浜仕事用の長い長靴を履いていても埋まりそうな場所もありました。泥を出しても、今度は泥の置き場所も足りなくなる状況でした。泥は一輪車で搬出、あるいは土のう袋に詰めました。運び出した家財はまだ取扱いが不明のため、家の脇に置きました。

「どんなことでもいいから、しゃべってけで」と言っても、皆さん遠慮しており、どこまで立ち入って良いのか分からない場面もありましたが、徐々に一回作業した家から、もう少し泥を出してほしいという要望も出るようになりました。

作業中、飲みものは持ち歩き、昼ご飯は一回食事に戻るか、避難所から炊き出しを頂くこともありました。仕事と都合をつけながら、毎日十数人で朝八時〜夕暮れを目安に作業を行いました。

足元が見えない段階では、クギ・ガラスの破片など危険要素がありました。まだ暑い時

期で、衛生状態の心配もあり、ゴーグル・ヘルメット・特にマスク・ゴム手袋を必ず装着しての作業をしつこく呼びかけました。幸い、作業中に団員のけがや体調不良はありませんでした。

被災した人は気が張り詰めているので、当初頑張っただけでも、体調不良が心配でした。

## 【ボランティアの人とも一緒に】

途中からボランティアの人たちも入ってきて、協力しながら作業する場面もありました。真剣に活動して下さり、さらに人数も多いので作業がはかどりました。

その後、すべての家を作業できたかの判断は出来ませんでした。二〜三週間後、ボランティア活動も一段落したところに、各部長さんに「消防としては一区切りにすつから、また何か出た時は声かけてけろ」と伝えました。その後も中島・中里などの公民館を巡回しましたが、特段活動が必要なおことはありませんでした。

私たちの住む地区は震災の津波で被災した住民の移転地です。津波の際には、内陸部の方々に多くの支援を頂きました。今回、内陸部が大きな被害を受け、少しでも恩返しできればとも思いました。



小本小学校・中学校（後日撮影）

## 【直後の台風での対応】

直後の台風で二回の避難指示が出た際、防災センターにはすでに多くの避難者がおり、さらに増えると窮屈ではないかと考えました。そこで、小本小学校・中学校は指定避難場所ではありませんが独断で依頼し、了解を得て避難誘導を行いました。

小本地区に関しては、台風十号よりも、九月八日に台風十三号から変わった低気圧の襲来時に雨は激しく降りました。消防団も外で

警戒・車両の誘導などを行いました。徒歩の避難者を、消防車両に乗せて連れて行ったりもしました。台風十号より避難率も高かったように思います。

川は増水したものの危険な兆候はなく、私は屯所に詰めて指示を出しました。団員からの報告で川の水位も特別に危険な状況までは上がっていないという報告もありました。特段の被害も無く、避難者も明朝に帰宅しました。

## 課題と振り返り

### 【災害時における連絡手段の課題】

情報化時代の波を受け、消防無線がデジタル化されましたが、今回の台風では消防署も被災し、消防無線も早い段階でつながりなくなりました。携帯電話の方がまだつながりましたが、一時的に不通になりました。本来、災害時のマニュアルでは個人の携帯電話ではなく、無線で連絡を取り合うことになっています。災害時は情報が重要なので、何らかの形で相互の状況について連絡が取りあえるような体制が出来れば良いと感じます。

台風後は町内各地への衛星携帯電話の配置といった動きもあり、今後の災害時には活用されると思われます。



消防団第7分団第1部屯所（後日撮影）

### 【振り返り】

今思えば、当時は焦りのためか各地区への連絡に時間差が出来てしまったように思います。連絡したつもりが出来ておらず、「俺は連絡が来なかった」と言われることもあったのが反省点です。

今回、避難の呼びかけやタイミングは最も難しい課題と感じました。当時、呼びかけをしても二階にいれば大丈夫と判断して家に残った人もいたようです。

## コラム

かすみでい

### 霞堤と川の逆流

今回、中里・中島・卒郡では小本川堤防の開口部からの逆流が発生しました。この堤防はあえて開口部を設けた「霞堤」でした。洪水時に水が逆流して堤内部の農地などに水をため、下流へ流れる水を減少させる機能があります。

しかしながら、今回の台風では逆流が集落にも到達し、さらに河川の水位が堤防の高さをも越え、卒郡では堤防決壊も発生してしまいました。

現在、これらの地区を含め町内全域で河川改修計画が進められています。

参考資料 図の出典：国土技術政策総合研究所 Web サイト  
([http://www.nilim.go.jp/lab/rcg/newhp/yougo/words/008/html/008\\_main.html](http://www.nilim.go.jp/lab/rcg/newhp/yougo/words/008/html/008_main.html)) より



私は台風後、分団長になりました。消防団としての災害時の活動で最も重要なのは、早めに避難してもらい、早めに私たちも避難するということであり、人の安全が最優先です。現在の消防団活動は昔と違い「自身と家の安全を最優先に」とされています。前任の方々からも考え方を引き継ぎ、安全に気を配って行きたいと思っています。

（平成三十年一月二十四日 聞き取り）



## 就寝中に気付いた浸水



岸

佐々木一雄

(八十四歳)

## 当日から翌朝にかけて

## 【寝ていて浸水に気付いた】

当時は、先祖から譲られた家に住んでいました。昭和二十三年のアイオン台風の際にはドラム缶の水をどっと開けたような雨が降り、一気に増水した記憶があります。今回はそこまで雨が降らなかったため昼間は危険を感じず、夜には一階の畳に置いたベッドで寝ていました。

後日聞くと、消防さんが避難を呼びかけに来たようですが、鍵をかけていた戸を蹴ってみても反応が無かったそうです。それでも夜にいつも目が覚める時間帯があり、気付けばパイプ製のベッドの高さまで泥水が来ており、慌てました。

隣の倉庫に行こうにも、建物の間の段差が

深いですし、家具が床に倒れており外に出られません。かつて使っていた二階に避難しようにも、階段をはずしてあつて上がれません。ベッドから降りてみても、水で身動きが取れません。ますます水は増え、体が震えました。「困った、困った」と思っていると、亡き父の形見のステッキがあるのに気付き、天井を突いて壊しました。しかし、二階に上ろうと上につかまっても力がなくて上がれませんでした。さらに天井を壊して再挑戦してもやはり上がりません。

ところがふと気付くと、下の畳四畳が浮き上がり、おおよそ一時間弱のあいだ私を持ちあげたのです。本地区で最も水が上がったという二十三時半ごろは、床上一メートル程度だったのではないかと思います。

泥水の中で、約五時間も待ちました。特に体調不良は感じませんでした。天井を突いて壊して、「いやー疲れたな、困ったな」と繰り返すうちに水が下がり、夜が明けて行きました。昭和二十三年のアイオン台風の際は水が一気に抜けて行きましたが今回は一気に抜けませんでした。

## 【当地の氾濫について】

台風時は海も荒れるため、河口に近い当地ではアイオン台風の時も逆流が発生しました。今回は少し下流の鮭マスふ化場の辺りの堤防が途切れているところから逆流で浸水したと言われています。

ただ、今回は地区の沢水は氾濫しませんでした。過去に沢水の被害を受けたこともあったので、不幸中の幸いでした。



中島・鮭マスふ化場の被害 (8月31日 13:47)

## 翌日以降の状況

### 【自宅の被害状況と地盤】

自宅では家財の多くがひっくり返り、柱も壊れてしまいました。

自宅の地盤について、災害後に家のそばを掘った業者さんには「三メートル掘ったが、ずっと泥が堆積した土壌だ」と言われました。過去の洪水で繰り返し泥が堆積したと考えられます。自宅はその上に、平たく大きな石を数力所に置いて土台として柱を立ててありました。しかし石が重みで沈み、以前から何本か柱が浮いて家がやや傾いていたものが今回、ひどくなってしまいました。

また、倉庫のトラクターや車、貯蔵してあった米も駄目になってしまいました。

### 【被災直後の生活】

災害後、仙台にいる娘が心配して、旦那さんの勤務先の、岩手県内の支店長さんに様子をみて欲しいと頼んだそうです。その支店長さんが水や見舞いの品を持って来てくれました。その翌日には娘夫婦が衣類や食料を持って来てくれて、三日ぶりに食事ができました。思えばよく耐えたものですが、当時は気が

張っていたのか空腹を感じませんでした。

その後は、炊き出しを一カ月ほど行政連絡員さんが自主的に防災センターから我が家まで届けてくれて、後から申し訳なく思いました。水道は数日使えなかったように思います。町水道は断水となり、自家水道のポンプも壊れたので、電話で注文して新しいものを取り付けしてもらいました。

一番困ったのは移動でした。取り急ぎ洋服をそろえる必要があり、支援物資が届いた連絡を頂いてバスで岩泉に行くと思切れました。その時は洋服屋さんで購入しましたが、その後はありがたいことに各方面から洋服を頂きました。また、親せきの皆さんから金銭や物資などの支援を頂き、おかげで冷蔵庫や自動車も入手し、買い物にも行けるようになりました。

### 【家の片付けについて】

家の片付けの際には、多くのボランティアさんに来て頂きました。一人暮らしで大変そうな家に有志で派遣して頂いたものです。ただ、部屋の数が多く一人では十分に対応できませんでした。ものを全て捨てて良いという指示ではなかったと思うのですが、想定より多くのもの、例えば水に浸かっている衣類なども廃

棄となってしまうました。大事な写真は途中で落ちていたのを見つけ回収しました。



近隣の国道や水田にも大量の泥が流入 (8月31日 15:20)

### 【倉庫での生活】

被災後は避難所や仮設住宅への移動を再三すすめられました。が、空き家にするのは抵抗があり、お断りしました。

この昭和三十四年に建てた倉庫の二階で何とか半年ほど暮らしました。二階はかつて飼育していた乳牛の飼料置き場で、空いています。そこをボランティアの方々が掃除して

くれて、さらにブルーシートをかけて天井を張り、段ボールベツトを入れて、サツシの立てつけも直してくれました。冬は寒かったものの、布団に猫が入って寝るので、それでしのぎました。今は一階も直して生活しており、まあまああの住み心地です。

壊れた自宅の再建には大きな費用がかかることが分かり、困難です。とりあえず一カ月前に解体して頂き、砂利でかさ上げだけ依頼してあります。高齢なので資金の借入れが出来ず、壊れた農機具の購入なども困難で、年をとるとは大変なことだと感じています。

## 【稲作について】

水田にも泥が流入しましたが、翌年は被害の軽い一部で水稲を作付しました。氾濫で養分が流入したところに、例年どおり肥料を使うと、養分が多すぎて稲が倒伏する可能性があります。一方で肥料が足りないと収量が減るので一応、肥料は使いました。

結果としては、災害で水利施設が被害を受け、十分に水が確保できなかったこともあり、収量は芳しくありませんでした。機械を失い思うように作業が出来ないダメージも大きいですが、何とか自給自足のために再挑戦しましたが、米を売って生活資金に出来るほどには

なりません。

## 振り返って

### 【アイオン台風について】

アイオン台風の時、私は農業に従事しており、ちょうどタカキビを刈り取る時期でした。真夜中に一気に水が出て、床上三十〜四十七センチ程度まで上がりました。

当時は養蚕のために床板が敷いただけの状態で、床板が浮いて流れたところに妹が落ち

て流され、私は必死になって助け出した記憶があります。

我が家は山の斜面に隣接しており、かつて一段高い所に物置小屋がありました。建てた理由は分からないものの洪水対策と思われる、今は石垣だけが残っています。

また、被災前の自宅は隣接する斜面にすぐ逃げられる構造でした。ただ、この倉庫の建築時には斜面はかなり切り崩してしまいました。アイオン台風の経験者ももう少しです。から、伝えておくべきだとつくづく感じます。

### 【振り返って】

伝承があれば防げた被害はあったかもしれません。一方で、私の場合はアイオン台風の水位が頭にあり、貯蔵していた約五俵の米は、ビール箱に乗せておけば大丈夫という程度の認識でした。ところが今回、全て水に浸かってしまったので、今後は今回の水位より高い台に自家用米を保管しようと思います。

災害に遭っても、皆さんの真心によって現在も支えられていることが非常にありがたいです。今後も、先祖の方々のためにも怠けるわけにはいきません。

（平成三十年一月二十五日 聞き取り）



かつて物置があった場所の石垣（後日撮影）

## 公民館が拠り所に



中里

武田 利宗

(五十四歳)

### 当日の状況と対応

#### 【小本川と沢の状況を監視】

私は当時、部落会長を務めていました。当日、中里で雨風が強まったのは二〜三時間程度で、夕方ごろに民放テレビで「小本川が氾濫」という情報を目にしましたが、ピンと来ませんでした。

近所に沢の合流地点があり、大雨の時には水が出るため、以前に沢を深くする工事が行われました。また、小本川の堤防も出来てからは沢の逆流・氾濫もほとんどなくなっていました。

その後停電となり、雨は止んだものの沢の音が大きく感じられるようになりました。十九時ごろに小本川や沢の様子を見に行くと

ころ、増水は続いているものの、まだ余裕があると感じました。



普段は水の無い沢（才の神沢）（後日撮影）

#### 【急激な氾濫と避難誘導】

その後二十時ごろ、近所の人が小本川の堤防の様子を見に行つたと聞き、私も行くと、水があと二十センチほどで堤防を越えそうな状態でした。「今までこんなにあがったことはない、これは越える」と思つて慌てました。

至急、皆さんに知らせるため戻ろうとする、堤防がもともと途切れている下流の方から、小本川からの水が逆流しており、音をた

てて道路にあふれはじめていました。深さが見えず低地は危ないと思い、回り道をしてクラクションを鳴らしながら、行きあつた人には「川が氾濫すつから、公民館に集まってくれ」と伝えました。余裕がなく全ての家への直接の呼び掛けは出来ませんでした。

避難所の小本津波防災センターに行ける状況ではなく、やや高いところにある地区の公民館へ避難を促しました。消防団も避難を促していました。

#### 【公民館が避難所に】

当時、寝ていた人も多かったようで、気付いた時には床上浸水となり逃げられず、家の二階に残った人も多かったです。あとで聞くと、「なんか音がしてきた」「畳が浮いて来た」と思つたらあつという間に水があがった」という話もありました。自宅には足の悪い父がいましたが、すでに外は水が腰まで来ており、二階にいるよう伝え、私は公民館に行きました。

皆が着の身着のまま避難し、最終的に中里地区の七〜八割にあたる四十〜五十人が避難しました。概ね地域の人の顔は分かるので、安否確認ができました。さらに避難者が、二階にいる人を教えてくれて、人数が不明な世帯もあるものの全員がおそらく無事と分かり

ました。

二十一時ごろには増水の勢いが止まり、二十三時ごろまでの外の様子を確認しながら過ごしました。停電のため、食事の準備はせず休むことになりました。以前に防災用として公民館でもらっていた毛布を女性や小学生に使ってもらい、男性はそのまま寝ました。私は父が心配で一度、腰までの水深をこぎながら家の様子を見に行きました。

## 翌日以降の状況と対応

### 【被害状況など】

自宅の周囲に関しては、浸水の原因は沢水が小本川に流れ込めなくなり、近所のやや低い橋の所からあふれた影響でした。沢水のため翌日、自宅に泥はあまり入っていませんでした。水は一階の畳の上、約五十センチまで上がったものの勢いは緩やかだったようで、こたつの上のものも倒れず、流れたりもしませんでした。ただ、小本川に近い家では小本の氾濫で泥もかなり入ってしまいました。防災センターに避難を促されたものの、国道に出る橋は渡れても小本方面への道が水に浸かっており行けない状況でした。

一〜二日経つと、公民館では無事だった人

たちを中心に、水に浸からなかった米や野菜を持ち寄り、井戸水を使い、おにぎりやみそ汁など簡単な炊き出しが行われました。これは二〜三日行われました。



泥に覆われた小本川付近（9月3日 15:41）

### 【片付けについて】

家屋から水を吸った畳を何十枚も出すのは想像以上に大変でした。協力しあった方が良いということになり、消防団を中心にある程度若い人と、動ける人が集まり、二〜三日は協力して畳を出したり出来る限りのことを行いました。自宅も皆さんに協力してもらいま

した。

さらに親せきの協力も得て、一週間ほどのを出して捨てました。また、週末に盛岡からボランティアの方々が来てくれて、汚れたところを拭いてもらいました。泥が五十〜六十センチも入った家でも、多い日は十人程度のボランティアが来てくれて泥を片付けてくれました。

### 【公民館が支援の拠点に】

多くの人は災害翌日から自宅の二階に寝泊りするようになり、翌日には避難者は四〜五人となりました。ただ、防災センターから公民館に炊き出しを持って来てくれたので、集まって食事をするようになりました。最初は炊き出しと一緒に物資を運んで頂き、「個別に欲しいものがあれば来てください」とのことでした。

さらに公民館には自衛隊が九月三日から七日まで風呂を開設してくれました。

数日後に台風が二回来た時には警察も巡回して半強制的に避難を呼びかけ、再び公民館に避難しました。

自然と公民館が拠点になり、体制作りが必要になりました。食事も兼ねた打ち合わせで良い意見を採用し、公民館担当・風呂担当・

炊き出し担当を設けることになりました。公民館担当は、お客さん・ボランティアの方々の対応や、届いた物資を記録して、受け取りに来る人に提供する仕事で、被災していない人たちの協力で日中に常駐してもらいました。物資は、防災センターからはカップラーメンや缶詰などの食料と水、土のう袋も頂きました。他には町民会館からも頂きました、中里に縁のある人が物資を持って来てくれたこともありました。

私は仕事を二週間ほど休み、その後は夜に公民館担当者から、物資や必要なものについて報告を受けたりしました。ただ、物資は全員に平等に配るほどの量はなく、被害の大きい世帯を優先し、余りを他の世帯に配る調整に苦慮しました。

### 【風呂・炊き出し・ライフライン】

風呂担当は利用者同士で掃除当番を決めました。自衛隊による入浴支援が終わると、今度は岩手県南の方が支援で風呂を設置してくれました。

炊き出し担当は、やはり炊き出しを食べる人同士で、配膳と片付けの当番を決めました。当初は昼と夜に届き、朝の分は夜に併せて頂く形でした。内容は途中からコンビニのおに

ぎりに代わり、十一月下旬で終了となりました。

ライフラインは、台風から二〜三日後に電が復旧してからも水道の復旧には数週間かかりましたが、その間は公民館では井戸からポンプで水を汲みあげたほか、給水車にもお世話になりました。



中里公民館前 (9月3日 15:44)

### 【その後、自宅や近隣の状況】

その後、自宅二階での生活は父にとって不自由なので、一階の一部屋だけ床を張って移

動してもらって生活しました。

父の体調には問題はなく、近隣の皆さんも、最初は気が張って風邪などはひかなかつたようですが、落ち着いたころから体調を崩す人が散見されました。自宅の修繕が完了したのは大工さんが忙しかったため、約一年後のことです。

仮設住宅は当初、地区に建設予定はなかったものの、被災した人が極力引っ越さないよう、要望して地区内に作ってもらいました。

### 振り返って

#### 【集まることで少しでも楽に】

当時、中里から防災センターなどに避難した人はほとんどいませんでした。仮に防災センターに小本地区の全員が避難すれば、十分な居場所があるとは言えません。地区内の公民館などの防災機能の強化が必要かもしれません。

今回、様々な問題は発生しましたが、話し合いながら協力し合い対処しました。皆が公民館に食事で集まることで、少しでも気持ち軽くなったように思います。

(平成三十年一月二十四日 聞き取り)

## 職場の重機が活きた



清水野

箱石 善昭

(二十八歳)

### 当日から翌朝にかけて

#### 「夕方から倒木撤去」

私は農業・畜産に関わる職場で勤務しています。本部は小川で、季節に応じて町内各地の事業所で仕事をしています。当日も町内を移動しながら夕方に大牛内の事業所に戻って来ました。途中は激しい雨でしたが大牛内では弱く、「これから強くなるのかな」と話しつつ十六時半ごろ帰宅しました。

自宅でも牛を飼育しており、帰宅するとちょうどお産でまず牛舎に行っただけです。その後、十八時ごろに停電となり、発電機を起動しました。家は自家水道なので、電気があれば問題ありません。その時、消防から強風で大牛内の道路数カ所で倒木発生とい

う電話がありました。

十八時半ごろ、チェーンソーを持って大牛内の事業所に行き、ホイールローダーに乗って来て倒木の撤去を始めました。事前に「重機は何かの時や、消防で使って良いからな」と言われていました。



一夜明けた小本地区の様子 (8月31日6:20)

に水位が上がって来ているからダメだ、今帰るところだ」と言われ、大変な事態になっていると気付きました。

二十時過ぎ、中野の消防団から大牛内の消防団に、応援の依頼がありました。下ってゆく途中の中野坂も倒木ということで、私はホイールローダーで向かいました。現場には国道を管理する国交省の人や電気工事会社の人もおり、協力して倒木と電線を片付け、道路が通れるようになりました。避難のために大牛内が上がって行く人も多かったです。

小本津波防災センターに着くと一帯は浸水で川のように流れており、夜中までほとんど動けず、待機していました。日付が変わるころからは、中島に向かう途中の高いところに移動して待機し、五時ごろには再び交替し防災センターに戻ったように思います。電話も消防無線も通じず、町全体の状況が分かりませんでした。

### 翌日の状況と対応

#### 「早朝から小本、中島の泥除け」

防災センターの近隣では、早い人たちは五時半ごろから泥除けを始めていました。六時半ごろ、私もホイールローダーで泥除けをお

#### 「夜、小本津波防災センターへ」

十九時ごろ、同僚に電話すると中島の鮭マスふ化場へ浸水に備えて片付けに行っているところでした。しかし、「この十分間で急激

手伝いしました。

そのころ、中島の人たちより小本支所に「水が引いたものの、道路が通れない」と相談があったようで、支所長からの指示で七時過ぎに道路の泥除けに向かいました。

しかし、中島に行くと「あ、これ一人じゃ無理だ」と気付きました。中島は前夜、多くの家の二階ギリギリまで水が来て海のような状態で、水が引いた道路には大量の流木と泥がありました。

同僚の手を借りようと思い、電話が通じないので、消防の人に家まで呼びに行ってもらいました。そして職場からはホイールローダーがもう一台来ました。

現場では国交省や広域消防の関係者が状況確認を行っている姿も見えました。私はどこまで行すべきか判断がつかず、迷いつつも消防というより自身で判断して「とりあえず、国道通さなきゃ」と思いました。国道をかき分けて林の下まで行くと道路が陥没しており、進めません。

まずは出来ることからと考え、同僚は中島を、私は卒郡を作業しようと考えました。ところが、卒郡はまだ水が引いておらず、歩いてくる人に「まだ無理だ」と言われました。卒郡から二カ所に避難した人がいたようで、歩いて帰宅する人の姿も見られました。同僚

は中里にも向かおうと試みたものの、やはり水位が高くて行けなかったようです。

そのため、中島の道路をとりあえず通れる状態にして小本に戻って泥かきをしました。その時に、燃料が無くなったので、同僚といっ

たん職場に行きました。すると、消防団の人から「中島の人に、呼ばれている」と言われ、再び中島に行き住宅に入った流木除去などを手伝いました。それもお昼ごろに大体終わりました。

## 【午後、水が引いた卒郡・中里へ】

午後になり水位も徐々に下がったので「卒郡も大丈夫だろう」と二人で向かい、道路の泥を除けて通れるようにしました。その後は中里に行こうと考え、国道の川向いの道を行くと、途中えぐれてはいたものの到達し、泥を押し道をつけ、橋を越えて国道に抜けました。

午後には、国交省が壊れた国道に砂利を配って埋めはじめました。また、中里で乙茂方面から土建屋さんが来たのも見え、国道も何とか通れるようになりました。その後、消防の人に依頼されて引き続き中里で泥かきを行いました。

途中、宮本に住む職場の人に遭遇しました。

前日は二升石で立ち往生して近隣の工場に避難し、歩いてきた所でした。その後は中里から山を歩いて宮本に帰ったそうです。私も宮本へ向かおうと思ったところ、途中の道路がえぐれており、歩いていくと途中の水田の中もまだ川状態の所があり、作業は難しいと判断し、いったん国道で小本へ戻りました。



卒郡は泥の海、何とか道路が通れるように (8月31日 17:05)

## 【その後】

そのころ、小本では田野畑村から来たボランティアの方々が作業を始めました。そこで



私も同僚と一緒に小本支所周辺の泥出しをすることにしました。

その夜に一回、乙茂まで大牛内の消防で行くと泥がすぐくて驚きました。乙茂から岩泉側が寸断されているため、消防団の各部交代制により三田市のT字路で交通整理が行われていました。

## 翌々日以降の状況と対応

### 【翌々日、赤鹿橋や襲野<sup>ほろの</sup>で作業】

朝に職場の上司より、乙茂で大きな被害を受けた第三セクター会社の手伝いに行くように指示がありました。同僚と行く途中、赤鹿橋が流木で埋まっているのを見かけ、その上をなんとか人が渡っているような状態でした。「これやらなきゃ」と思い、いったん戻ってホイールローダーで出直し、対岸の宮本で先の職場の人とも話し、赤鹿橋の開通作業を行いました。

それから乙茂に行くと、行方不明者の捜索などの関係からまだ手を付けられないということでした。明るい時間を見ると、本当に言葉が出ない状況でした。沢々から水が流れており、手が付けられませんでした。周辺には乙茂の人たちしかおらず、重機も無く、何も

手がついておらず、その日は出来ることが無くて戻りました。

小本では土建屋さんも入り民家の泥出しが始まっています。一方、襲野はまだ手が付いていないということで、民家の泥出しを手伝い、赤鹿の家にホイールローダーを置かせてもらい帰宅しました。



乙茂における道路の土砂撤去の様子（9月5日10:47）

### 【三日目以降の作業】

三日目も襲野で泥出しをして、四日目には

再び乙茂に行きました。小本支所長に携帯電話で状況を報告し、本庁への連絡を依頼すると、地域整備課より電話があり、重機を依頼しました。

ただ、捜索がこれからのエリアは手をつけられない状況です。ちょうどそのころに捜索活動も行われていました。そのとき「野球場のサブグラウンドの奥の駐車場をがれき置き場にするので、道路をつけてくれ」と依頼を受け、作業しました。

乙茂では三〜四日ほど作業したと思います。流木や泥の片付けの手伝いや、道路の仮復旧を、役場とも連絡をとりながら行いました。

### 【作業における苦労】

しばらくは電話が通じにくく大変でした。乙茂に携帯電話の臨時基地局が設置されていたものの、お互いが乙茂にいる場合は着信履歴に残るだけで通話が出来ない状態でした。「あっ電話来たけど、どこにいたかな？」と相手を探しました。

作業においては、ホイールローダーは泥で滑り出すと止まらず、特に左右の滑りに弱いので、崖のそばで傾斜がある場所では細心の注意を払いました。また、濁流の流れる川の

橋を通るときは「間違ったら流されるよな」と思ったりもしましたが、気持ち的には怖い・危ないというより、「やらなければ」という気持ちで勝っていたように思います。夜は疲れて休むのですが、次の日にやるべきことを考えるとあまり寝られませんでした。

### 【徐々に通常業務へ】

今回は職場の重機が使えたこと、そしてたまたま当日は倒木の除去をしてからそのまま小本まで下りてきたことから、すみやかに復旧活動を行うことが出来ました。

結果的に二週間ほどこうした作業を行い、行方不明者の捜索にも一日加わりました。自宅に被害はなく、活動中は自宅で寝泊りできました。停電は中野地区とほぼ同じ三日程度で復旧となりました。

職場の本部は一カ月停電が続いたものの、国道の寸断が解消された後、九月十四日ごろに打合せが行われました。徐々に通常業務に戻らなければという気持ちもあり、三週間目あたりから普通の生活に戻ったように思います。本部に通じる道路はえぐれてしまいましたが、施設は無事で何とかトラックも通れることが分かり、仕事が再開できました。

その後は、台風で倒伏してしまったデント

コーン畑に収穫作業のために通いました。その間にも、職場は災害復旧や、林道の道路付けを請け負っていました。



乙茂：移動基地局車 (9月17日 10:16)

### 振り返って

#### 【活動において感じた課題】

活動中、行政機関からの指示系統が統一されていないと情報が錯そうし、判断に悩みました。次の災害に備える上では、組織内外の横のつながり・連携が重要であると感じます。緊急時には、例えば行政の被災施設を管轄する部署で様子を見に来た場合には、その地区の被災状況など、他の部署の管轄情報も持ち帰り共有して頂くことも有効と感じました。

#### 【アマチュア無線の有効性】

今回、一緒に活動した同僚との緊急連絡ではアマチュア無線を活用出来ました。練習して使えるようにしておけば、各消防団でも有効活用できます。ただし免許が必要ですし、電波法の規制もあります。消防無線は数年前にデジタル無線になり、災害で中継局間の通信線が被災してしまえば通信できなくなるデメリットがあります。消防団における台風後のアンケートでも、「無線や情報共有が課題」との意見が多かったように見受けられます。

#### 【過去の災害について】

過去の災害では、震災前の台風が記憶に残っています。宮本で堤防が決壊し、田んぼに水があふれ、吊り橋も流されました。また、中島の低地が冠水して通行止めになりました。我が家では災害に対して発電機や無線を備えています。備えをどう広め、共有できるかが、課題と感じます。

(平成三十年一月二十四日 聞き取り)

# クルミの木の丸木橋

坂本

上端峯太郎

(六十二歳)



普段は穏やかな川  
(後日撮影)

## 当日の状況

### 【十四時ごろ、異変を感じる】

当日、台風情報は確認していましたが、予報では平成十八年豪雨の時の雨量より少ないように感じ、大丈夫だと思っていました。平成十八年には、川沿いの小屋が浸水し、生活橋のたもとも一部崩れる被害を受けました。ところが、当日十四時ごろに雨の降り方や川の増水に危ないと感じました。車が出られなくなると大変なので橋を渡って道路側に移動させました。また、川沿いの小屋に入っていた農機具や臼など、大事なものを少し高い所に避難させました。さらに、川の近くに積んであった薪を少しでも高い道路の方に上げようと試みました。

作業中、道路に水が流れて来ました。上流

に小さな沢があり、沢水を通す道路下の土管が詰まったためでしたが、そうしたことは初めてです。車を置いた場所にも水が流れ始めたので少し心配でした。

さらに作業を続けているうち、夕方ついに川の流れが橋を越えてしまい、家に戻れなくなり車に泊まることにしました。

### 【十九時ごろ、生活橋が流された】

確か十九時ごろに「ガーン」と鉄の音が聞こえました。橋が流されたのはおそらくその時です。しっかりとした鉄製の橋が流されるといことは、木も流れているということですから。水だけであれば、橋が水の下になっても大丈夫なはずですが、また、薄暗い中、倉庫が流れる様子が屋根だけ見えました。

上流には砂防ダムがあり、以前から流木がたまっていました。平成十八年の時にも流木は乗り越えて来ましたが、当時おふくろは何か黒いものが川に立っている光景を見ていたようですが、今回もクルミの木などが立っただけで来ませんでした。

その後、割と早いうちに雨が止んだものの、夜は眠れませんでした。カーラジオはかろうじて聞こえる程度で、その時点ではあまり情

報はありませんでした。



薪ストーブで煮炊きは出来た (後日撮影)

## 翌日以降の状況

### 【帰宅・被害状況】

朝には水もだいぶ引きました。沢からの水の影響は多少、道路が壊れた程度で車は大丈夫でした。薪は上げた分は助かりましたが、流された分もありました。

まずは家に戻るため、下流に向かいました。

途中は三カ所ほど土石流を乗り越えて約一キロ下流の橋を渡り、対岸の山を歩いて戻ると、自宅は大丈夫でしたが、川沿いの小屋はすっかり駄目でした。小さい機械や道具などを入れていたので、簡単に流されてしまいました。

さらに、農地が沢水の流れて被害を受けました。植えていた安家地大根は若干残った程度で、表面の良い土がかなり流されてしまい、今も木クズや石ころが畑に残っています。平成十八年の時も、似たような状況でした。当時はおふくろが、農地に木の葉やゴミを巻き込みながら土石流が来るのを見ていました。

まずは断水なので水道を直そうと考えました。私は家から百メートルほど先の水源から水を引いており、元のパイプを活かして復活させる作業は割と順調に進み、二〜三日で使えるようになりました。それまでは沢水を利用して過ごしました。

## 【安家森からの人・仮の橋】

確か二日目に、安家森経由で初めて外から人が入って来ました。以前にイーハトーブトライアルに参加したという人で、車でこの近くまで来て、そこで道路が壊れていたの、積んでいたバイクに乗り換えて、坂本まで行ったようです。



葛巻・安家森・坂本を結ぶ道路（途中は未舗装）（9月20日14:00）

また、台風から二〜三日後に近所の人々が来てくれました。最初「ガシーン」という重機の音がして驚きました。近くにあった、親父が植えたクルミの木を伐り倒してもらって、橋をかけてもらいました。これで、人間だけは何とか通れるようになり、ありがたかったです。

## 【避難は考えず・食料は問題なし】

移動が困難になり、避難は考えませんでした

た。家は残り、食料はあり、薪ストーブやガスも使えたので下流の人たちに比べれば影響は少ない状況です。

場所柄、何かが起きると買いものに行けなくなるので、必ず食料などの予備は持っています。昔とは違って、今は冷凍保存です。台風後、しばらくは自然解凍して食べていましたが、徐々に溶けてゆく冷凍品をすぐには食べられません。

もったいないので、台風から数日後に兄弟が来てくれた時には、食べられそうなものを分けもしましたが、一カ月の停電で捨てざるをえないものもありました。

## 【徐々に支援の動き】

自衛隊のヘリコプターが二〜三日飛んできましたし、早い段階で安家森を経由して地上から安否確認にも来ました。

徐々に支援物資も届けるようになり、水や米などの食料を何回か届けて頂きました。町の職員さんや知人、親せきも来てくれました。下流からやっと来る人のほか、道を知っている人は安家森経由で来ました。

私自身も坂本を見てまわったり、折壁やよその人から話を聞いて、徐々によそも大変な状況だと気づきました。

当初は安家森方面に抜けられるということに気がきませんでしたが、途中で気づいて、携帯電話の電波を求めて葛巻町の境まで行ったりもしました。



現在使っている仮設の生活橋（後日撮影）

## その後・振り返り

### 【仮設橋・片付け】

しばらくの間、丸木橋で川を渡っていましたが、今では役場で手配してくれた仮設の木

の橋を使っています。しかし、これは車で渡れませんが、大きなものを持つには不自由な状況です。

水道はすぐに直しましたが、水源周辺に沢から出た土砂があり、次の大雨で流れて来ると大変なので、その後、土砂を片付けたりしました。

また、畑にたまった木クズは集めて燃やしたりして片付けてゆきました。石はまだあるので、拾わなければなりません。

### 【過去の大雨・振り返り】

現在、八十代になる人から、ずっと昔の大雨について「近所の人の畑が全部流れた」という話を聞いたことがあります。詳しいことは分かりませんが、私の祖父の世代がようやく覚えている、昔のことのようです。

ただ、かつては山の保水能力が今より高かったように思います。今は大木が少なくなると、木は生えていても保水能力はだいぶ違うように感じられます。そのため、雨が降れば一気に増水するのですが、かつてと感覚が違うので、ついつい油断してしまう危険があるようにも思います。

（平成二十九年八月十六日 聞き取り）

## コラム

### 台風10号・災害当時に役立つ身の回りの存在

災害を通じて「当たり前前の生活のありがたさ」を実感した人も多かったと思います。一方で岩泉町では、生活や仕事で活かされてきた身の回りの存在が、今回の台風10号災害において活かされた側面も見受けられました。改めて、どのようなものだったか、振り返ってみましょう。

- 水：湧水、沢水、井戸水
- 食料：自家菜園の野菜、備蓄食料
- 調理（暖房）：薪ストーブ、ガスコンロ、カセットコンロ
- 電気：発電機
- 照明：懐中電灯、ランプ、ロウソク
- 通信：黒電話（電話線が寸断されていない場合）、アマチュア無線
- トラクター、チェーンソー、重機  
（それを使える技術を持った人も多かった）



孤立地域において生活の一助となった自給畑（9月14日 大川寄部）

上記はあくまで今回役立つものの一例です。災害時には一刻も早い救助・支援が必要となりますが、今回のような大きな災害では救助や支援が届くまで時間を要することもあります。

そうした状況下で、各戸・各地域が持ちこたえる、あるいは周囲の人たちと協力しあう上で、大きな力を発揮したこうした存在は、今後の防災にも参考になると考えられます。

## 短角牛は山にいて無事



大平  
あいしゃ  
丈司

(六十四歳)

### 当日の状況と対応

#### 【下流で避難の呼びかけ】

当日のお昼ごろ、雨の降り方から平成十八年豪雨が頭によぎりました。当時、大平での家屋被害はなかったものの、下流部が心配で茂井地区まで行きました。当時、橋が流され孤立した、安家川の対岸にある二軒の家が気がかりでしたが、すでに橋と流れの間が三十センチも無く、危険な状況でした。

その後も元村で親せきなどに避難をすすめました。「前回は大丈夫だったから来ないんじゃないかな」とも言われましたが「この雨だと大変だよ」と伝えました。十五時半ごろに支所に行くと言われ、避難者を受入れる準備の最中で、周囲では消防や警察関係者も避難を呼び

かけていました。そろそろ家までの道路が危ないと感じ、帰路につくと、松ヶ沢の先で橋の上に水が約三十センチ冠水しており危険でした。



台風当時にあふれた沢（後日撮影）

#### 【大平に戻ってからの対応】

帰宅して今度は姉の家に様子を見に行きました。川沿いの倉庫が危ないので「早く片付けて」「車を安全そうな場所に寄せるように」

と伝えました。

再び戻ると、今度は近所の七十代後半の人から助けを求められました。周辺は沢があふれ、畜産農家から牧草ロールも流れ出す勢いでした。避難をすすめましたが、その人は木など流れて来るものを止めようと必死で、結局は避難せずに二階へ上ることにしたようです。

その後は県道の冠水がひどくなり、田んぼの方を歩きながら再び姉の家に行くと、すでに倉庫が浸水していました。姉に電話をする時、「高い所に来て、お世話になっています」と言われ安心しました。その後、高齢者のお宅などを回った後、十九時ごろ停電となり、携帯電話も不通となりました。

雨は二十一時か二十二時ごろにはすでに止んでいたようですが、夜はあまり寝ることができませんでした。

### 翌日以降の状況と対応

#### 【大平の状況把握】

翌日の朝五時ごろ、道路はまだ水が流れているものの、長靴で歩ける程度でした。沢水で県道に下りる道が壊れ、土砂や流木も散乱し、車では通れません。まずは安否確認だと考え、田んぼの方を通過して上流に行くと、亡

なくなった人はおらず、ホツとしました。

大平で泥が入った家は二軒あり、一軒は酒屋さんで、沢水で一階の天井付近まで浸水してしまい、ものが散乱していました。もう一軒は、前日に助けを求めてきた人の家で、午後から近所の人たちと一緒に泥を出しました。九月一日も午前中は泥出しを手伝ったほか、地区の人たちと水や食料の確保など今後について打合せしました。

## 【九月二日・元村を往復】

元村の状況を把握するため、九時ごろに家を出発しました。懐中電灯とおにぎり数個、水と杖を持ち、長靴で歩きました。道路が壊れたところは、岩の上や泥だらけのところを越えたり、木をくぐったりする状態なので二時間もかかり、足はパンパンになりました。元村では普代経由で入り途中から歩いてきたという新聞社の取材を受けてから、元村を一周しました。親せきの家に寄ると、人は呆然として何も手がつかない状態で、かける言葉が見つかりませんでした。

## 【九月三日以降・物資対応】

九月三日に自衛隊がヘリコプターで物資を

持って来てくれました。内容はレトルト・米や特にパン・水が多く、その後も何回か来てくれて、食料には困りませんでした。

私は大平の部落会長でもあり、公平な配給の必要があると考えました。取りに来られない高齢者宅はもちろんですが、物資は坂本・折壁の分を含むのか判別出来ず、それらの地区にも届けようと考えました。旧大平小学校で仕分けをし、分担して背負いカゴで歩いて行きました。

坂本や折壁まではそれぞれ約一時間の道の



元村～大平間の県道、崩落した擁壁（9月4日 13:18）

りでした。道路の被害は下流側よりは軽く、坂本の住民が大平までの道路を通そうと、山仕事の人たちに重機をお願いして作業している場面もありました。こちらは物資を届けることで、気持ち的にその後も道路を利用しやすかったです。

## 【その後の台風での対応】

二回目の台風では全戸避難が決まり、自衛隊が呼びかけました。しかし、牛の世話のためどうしても行けない人もいましたし、ほかにも行かない人が出て来たので、大平から岩泉に避難したのは七、八人です。私も地区に人がいるのであれば残る必要があると考えました。残る人は一カ所に固まるように、ということで学校への避難をすすめられました。二人ほど数時間避難した程度です。

## 【道路の開通】

家から県道までは、しばらくは畑をう回路として通ることになりました。また、台風から一週間後には、坂本・安家森経由で葛巻などへ車で行けるようにはなりました。遠いので、買いたなものなどに行くことはなかったものの、ボランティアの人たちが同時に入って来てく

れて、泥出しなどを手伝っていただきました。

## 【ライフライン】

断水のため、沢の水を引っ張り樽に水をため、バケツで分け合いました。

停電については、発電機が使えたものの、ガソリンが約二十リットルと少なく、夜に二〜三時間使って一週間程度の量でした。電話については、NTTが台風から数日後に衛星携帯電話を持って来て、とあるお宅に設置してくれたので、皆が使いに行きました。

停電の復旧には約半月、町水道・固定電話の復旧にも同程度かかりました。

## 【短角牛について】

飼育していた短角牛は山の共同牧野に放牧中で無事でしたが、当初は様子も分からず心配でした。後日、二人で葛巻側から入ろうとするとそこらも通れず、結局それぞれ十キロの牛用の塩をかついで約三キロメートル歩きしました。現在はう回路により車で行けるようになっていきます。

我が家の農地は稲や餌用デントコーン・牧草が全滅し、農地も大きくえぐれる被害がありました。翌年は多少の牧草は収穫できま



台風当時、牧野で無事だった合砂さん宅の短角牛は平成31年春、双子のお母さんに（後日撮影）

たが、収量は戻りません。

最初は牛の飼育も止めようかと思いましたが、飼料用の牧草を支援してもらったほか、補助により安く購入出来、何とか冬を乗り越えることが出来ました。

近所の畜産農家では、黒毛和牛が牛舎にいる中、土石流で自宅や倉庫・農地が被害を受け、大変な状況でした。

## 振り返って

### 【環境の変化】

かつては「魚は買うものではなく獲って来るもの」というほど、川と人の距離が今以上に近かっただけに一本橋、淵など危険な場所での子供の事故はありましたが、大雨の際に川で人が亡くなったようなことはあまり聞きません。

最近の水が一気に増えやすくなり、流木も増えたように感じます。この地域は国有林が多いので、国有林の経営が防災に影響します。近年の環境の変化をふまえた災害対応が必要になると思います。

### 【今後の課題】

今後、同じような大雨があっても避難する人は少ないと見込まれますし、範囲が広く声の掛け合いには限界があります。高齢化が進むと助ける側も高齢者となってしまうのが課題です。異常気象が増えているので、まず逃げて命を守る必要があると、皆さんに伝えたいです。

（平成二十九年七月五日 聞き取り）



## 薪ストーブは必需品



大平

合砂エキ子

(六十四歳)

## 当日深夜にかけて

## 【夜遅くなってから家が危険に】

当日は、義母と息子と三人で自宅の離れにいました。テレビは「百年に一回の大雨」と伝えていましたが、今までそんなことは無かったので、想像できませんでした。その後、雨はバケツをまけるような感じで降りましたが、どこにも逃げようがないので、家が高い所にあるのを頼りにそのまま自宅にいました。夜、安家川の水は暗くて見えませんでした。が、二十一時半ごろに家の両脇を山からの水が流れるようになり、危険を感じました。慌てて玄関に出て、入ってくる水を農具のシャクシで切り回しました。合羽がなかったのでヤッケを着て、帽子をかぶって頭を濡らさな

いようにして、まるで冬の格好でした。そうした作業を何時間も続け、三時ごろになると水がスーツと引いて止まり、何とか床上には水が入らずに済みました。



安家川の氾濫で壊れた県道

## 翌日以降の状況

## 【沢水で煮炊き】

朝になっても、安家川の水は勢いよく流れていました。夜の間は真っ暗で分かりませんでした。木が転がっているのが見えました。大平の下流では県道から二メートルも水が上

がったようで、道路が壊れ、元村方面には行けない状態になりました。

自宅の中は大丈夫でしたが、停電と断水状態になりました。畑の脇を流れる沢水で茶碗を洗い、ガスや薪ストーブで煮炊きをしてご飯を食べました。薪ストーブは必需品です。水はきれいで、お腹が痛くなるようなこともありませんでした。義母は高齢で持病の薬も飲んでいましたが、具合が悪くなるようなこともありませんでした。

その後、ヘリコプターで水やおにぎりが届きました。東京や花巻からだと言いました。地区の商店は、商品が届かないので何も無くなってしまいました。

## 【短角牛は無事・農地は被害】

我が家では短角牛を飼っていましたが、当時は山の共同牧野に放牧していたので無事でした。牧野への道路は決壊し通れなくなりましたが、牧野そのものは流されず良かったです。ただ、家の畑や牧草地を水が流れ、深いところでは約八十センチも掘られてしまい、後になってから夫がトラクターで何日もかけて埋め直す必要がありました。田んぼにも両手で抱えるほど大きな石が流れ込む被害を受けました。

【やむをえず避難】  
 九月五日ごろにまた台風が来るということで、龍泉洞温泉ホテルに避難することになりました。できれば行きたくありませんでしたが、停電や断水が続くのでは行かざるを得ませんでした。夫が「俺は行かないからお前たちは行け」というので、三人でヘリコプター



安家森牧野に放牧される短角牛 (9月20日 14:48)  
※文中の牧野とは違います

に乗りました。

ホテルでは人前での生活のため、なかなか寝つけませんでした。お風呂に自由に入れるのはありがたいとは言え、やはり家が良いものです。およそ半月後に道路が開通し、停電は続いていたものの、戻ることになりました。夫が一人では寂しいだろうとも思い、様子も気になりました。

## 振り返って

### 【けた違いの水害】

平成十八年にも水害がありました。今回はけた違いです。九十歳の人でもこれほどの水害は知らないと話していました。経験がなかったため、いくら「大水が来る」と言われても安家川がこんなになるとは思いませんでした。経験があればもっと早く逃げたかもしれません。

我が家に関しては、約十年前に家の前の道路が舗装されていたのが幸いでした。未舗装であれば、水で土が掘られて家の土台が崩れていたかもしれません。それは本当に助かったと思います。

(平成二十九年六月二十二日 聞き取り)

## コラム

### 安家・高須賀に伝わる大洪水の伝承

いまでも伝わる洪水に関わる伝承を、高須賀住民の方に教えて頂きました。  
 (平成31年3月15日聞き取り)

#### ～逆さ松のこと～

あるときに大洪水が起き、松の木が根っこごと、ひっくり返った状態で流されてしまったという。その松の木は川と沢の合流点で止まり、何とその場で再び根付き、息を吹き返したのだそう。その後、「逆さ松」と呼ばれるようになり、「この松には手を掛けてはならぬ。盆松（迎え火・送り火用の松）も取ってはならぬ。」と伝えられていたという。



現在、逆さ松の痕跡は残っていない

#### ～人流れ平のこと～

昔、牛舎を祈祷して歩く祈祷師の人がおり、各地の牛飼いさんをまわっていた。その人が、大洪水の時に、高須賀で歩いていて流されてしまったのだそう。その場所は、「人流れ平」とも呼ばれている。

#### ～江川から流されてきた家のこと～

高須賀の上流部にある江川地区から、当時「くずや」とも呼ばれる萱葺き屋根の家が流されてきた。昔の家は土台が岩で、現代の家のように固定されていないので、大洪水でまるごと流れたのだ。ちなみに、その家の人は、無事だったようである。

## 山仕事の技術が活きた



松ヶ沢

小呂館利雄

(七十歳)

## 当日の状況と対応

## 【朝から土砂降りの雨】

当日は、朝から土砂降りの雨で、午後からは車のワイパーを最強にしても前が見えないほどでした。十六時ごろから道路にも水が流れはじめ、移動が危険な状態となりました。

当時の私はまだ消防団員で、確か十八時ごろに一・五キロほど上流の家に水が入ったので行って欲しいと消防署から電話がありました。軽トラックで向かうと、近所に住む消防団の分団長さんが一生懸命溝を切っていました。手伝ったものの追いつかず「もう駄目だ。鉄砲水が来れば危ないから止めて団長さんの家さ避難した方が良い」と言っていて戻りました。帰宅する途中、道路が半分崩落して

るのに気づき、右側を通り抜けました。

この後、鉄砲水が来たそうですが、家の人は知人宅に避難し、家も床下浸水程度だったようです。昔から川に潜れるような人なので、多少の水が来ても強いと思います。泳げない人は足首程度の水でも転んでしまいますが、泳げる人はもっと上まで浸かっても動けるものです。



松ヶ沢公民館（後日撮影）

その後、消防署から屯所の状況について問い合わせる電話があり、安全のため妻と一緒に外に出ました。消防団の他の人にも、「災

害現場には絶対一人では行くな」と言っています。道路は沢からの水で、深い所では長靴に水が入るほどの水深がありました。とりあえずまだ導入したばかりの消防ポンプ積載車を高台の公民館に移動しました。

当日は近隣で何軒か床上・床下浸水が発生し、この公民館に避難した人や、知人宅に避難した人も数人いました。

## 【いつもと違う川の水の増え方】

普段の大雨だと、源流からの距離の関係で、雨が止んでおおよそ二時間後に安家川の水が増えて来ます。しかし今回、十九〜十九時半ごろに最も激しい雨となり、二十時ごろには自宅の庭の石垣まで川の水が迫りました。これは庭まで水が入ると危惧し、車を最大限寄せ流されないようにホイールと立ち木をワイヤーでつないでいました。するとその時、雨が止んで不思議なことに十〜十五分ほど水が引きました。安家川の橋が詰まってダム状になっていたので、それがその時壊れたのだろうかと考えました。

これ以上水は出ないと思いつつも、二階で寝ようと最初は考えました。しかし結局、岩が川を流れる音がうるさくて寝つけず、二重サッシで音が静かな一階の部屋で休みまし

た。その後、安家川は岩盤がむき出しになりました。

## 翌日以降の状況と対応

### 【お互い励まし合った】

翌朝、近隣の一人暮らしの人が心配で訪ねると、その家からは氾濫の様子が見えなかったようで、橋まで水に浸かったと話すと驚いていました。

朝食後、確か八時前ごろに男性二名がやってきました。前日の夕方にここから大平方面に約七百メートルのところで道路脇の金網が倒れてきて立ち往生し、そこで一夜をしのいだそうです。「家まで歩くかな」と言うので、食料を持っているか聞くと、道路に上がったマスをバーナーで焼いて食べたと言い出発していきました。急いでご飯をおにぎりにして、それを背負って追いかけて渡しました。

ご近所は普段から面識がある人ばかりなので、お互い「何ともねえべか」とか「あそこのおじいさん、おばあさんは大丈夫だべ？」とか「壊れたところは仕方ねえんだから、命あってのことだから」などと励まし合いました。



安家支所前 (8月31日 12:13)

### 【物資・安家支所まで歩く】

台風の翌々日ごろから、安家支所に物資が徐々に届いていると聞きました。また、大平方面の人が元村方面へ歩いて行くようになりました。子どもたちからもたくさん電話が入っていると思い、元村に行けば携帯電話が通じるとの話も聞いたので、妻と歩いて行くことにしました。

行けば行くほど大変な状況で驚きました。元村まで徒歩で、通常ならおよそ四十五分の

ところ、およそ一時間十五分の道のりです。岩肌がむき出しになっているので足が痛くなりました。安家支所で携帯電話を充電しているとテレビ局の取材を受け、それどころではないと思いつつも「二、三日はいいけど米がなくなったら大変だ」などと話しました。

物資をもらっても、背負って帰らなければなりません。さらに、パンなどは賞味期限が近く、すぐに食べなければなりません。水も届いていましたが、一人で背負える量は限られているので、地区で消防団員をはじめ歩ける人と手分けしてもらってきて、各戸に配達しました。

### 【食料・道行く人におむすびを】

テレビ取材を受けた内容はその後、全国放送されてしまいました。関東の甥っ子が見て、久慈の姪っ子に「米を買って届けろ」と電話したそうで、翌週には姪の夫が水渡から背負ってきてくれました。

そのころ自宅前を歩く人が多く、お昼時になれば妻が「ごはん食べたか」と聞いて「食べてない」と言われればおむすびを持たせており、思ったより米がなくなるのが早く、米の差し入れは助かりました。また、自家用の野菜を植えていた畑には被害はありませんで

した。  
子どもたちは心配して「来たい」と言ってくれましたが、来て何ともならないから来るなど伝えました。ただ、宮古に住む子どもは来てくれました。



損壊し流木に覆われた周辺の道路 (9月4日 13:49)

## 【片付け・山仕事の知恵が活きた】

自宅は無事でしたが、道路の寸断が続きました。重機が入り、道路が開通するまでは元村方面が約一週間、大平方面はさらに二〜三週間かかったと思います。

付近の橋や道路にたまった流木は、最初は近所の人と一緒に伐り、両端に寄せました。長年、林業に携わっており、チェーンソーは何台も持っていますから、そういった作業は得意です。

流れ着いたクルミの木には、表皮の内側に砂がビッシリ入っていました。そのままとチェーンソーの刃がすぐ駄目になってしまうので、ナタやワイヤーブラシで掃除をしてから伐るようにしました。こうした作業は、講習だけ受けた人が応援に来てすぐに出来るものではありません。裂けやすい木、折れやすい木など特徴もあるので、一回は痛い思いをしているような、現場の人が得意な作業です。また、サワグルミの木はまだ水分が多い時期でしたから、伐ると断面から樹液が染み出し、そこに様々なハチが集まって来るという危険もありました。地区には重機を使える人はいても重機がありませんでした。ただ、甥が来て二日がかりでスコップで道路の穴を埋め、軽トラで走れるようにしてくれた所もありました。重機が入ったのはその後です。

## 【再び来た台風】

再び台風が来た時には避難を求められまし

たが、その際に松ヶ沢公民館に避難する動きもあり、炊き出しのために妻と残りました。その際、自衛隊は米を提供してくれました。一方、温泉ホテルにヘリコプターで避難する動きもありました。

## 【電気・水道の対応】

停電の復旧には約二週間かかりました。再び来た台風で工事業者さんが引き上げざるを得ず、時間がかかりました。当時、自宅では照明がろうそくやヘッドランプしか使えませんでした。冷蔵庫の自身は十日も経つと腐り始めましたが、冷蔵庫の掃除ができたと皆で話しています。

水道は組合と個人で引いていましたが、ホースを吊るしていた木が流され、どちらも使えなくなりました。そこで、自宅から五十メートルほどの沢からホースで水を引いて洗濯のほか、布でろ過して米研ぎにも使いました。この辺りの人たちは、その程度のホースは備えています。近所に湧水もあり、衛生面は分かりませんが、冷たく水量も多いので活用出来ました。組合の水道は水道管の損傷で一カ月使えず、現在も仮復旧の状態です。

風呂にも入れないので、無料開放された水渡交流施設のシャワーを一回だけ使いに行き

ました。風呂が沸かせるようになったのは停電復旧後です。我が家の風呂釜は水道の圧力が不要なタイプなので、水道管の復旧前でも使用できました。



周辺のライフライン復旧に向けた動き (9月4日 13:51)

### 【ボランティア】

この辺の人は、最初は片付け作業を人にお願ひするのは抵抗があり、散らかっている家の中を見せたくない、土足で入ってほしくないという気持ちもあったかもしれません。消防団で手伝うと言っても断った家もありまし

たが、最後にはボランティアの人の世話になったようです。知らない人の方がかえって頼みやすいこともあるのかもしれない。

### 振り返って

#### 【安全な場所は無い】

記憶に残る平成十八年の水害を振り返ると、自宅の周りまでは水は来なかったものの、今回とは違い水渡洞から大量の水が出て、道路が通れなくなった記憶があります。ちなみにその年も、今回の台風の年も、マツタケが豊作でした。

近所に九十歳になる物知りの人がいますが、今までにここまで大きな災害は知らない、聞いたことがないと話しています。ただ、我が家の畑も、一〜二メートル掘ると砂や石ころなどが出て来ますから、昔は川だったのかもしれません。

今回の台風では、道路事情を考えると避難は困難でしたし、改めて避難場所を考えても、正直どこも安全とは言いません。今後への備えとして、私はまずは発電機を購入しました。

(平成二十九年七月七日 聞き取り)

## コラム

### 安家・高須賀の伝承から考える

安家・高須賀で、大洪水の伝承を語ってくださった方に、その背景をお聞きました。

Q. 大洪水の伝承から、なにを読み取ることが出来ると思いますか？

A. 「推測するに普段、この場所を流れる江川川は水が枯れていますが、一度洪水になると 枯れている江川川 多くの水が出るので、気を付けるという意味もあって強く語られてきたのではないかと思います。」

Q. 江川川は、石灰岩地帯のため水が地下に染み込み、普段は枯れていますね。昔からですか？

A. 「私が 20 歳前後 (昭和 30 年代前半) でも、江川川はやはり多くが枯れていたように思います。ところどころに水があるような感じです。安家石灰岩で出来た西側の沢からは水が来ません。一方で東側の沢からは水が来るので、水源を確保し、小本から買って来た竹を樋にして水を引き、人々はここで暮らせました。」

Q. もっと昔のことを知りたいです。

A. 「かつて生きものが今よりもたくさん棲んでいたように記憶しています。例えば大雨の時は、サンショウカジカ (サンショウウオ) が増えたり、カニ (サワガニ) がたくさん歩いているなど、生きものからも危険を察知できたように思います。」

「私が『逆さ松』の話聞いたころ、大人は面白さも交えて子供に様々な教訓を伝えるのが上手でした。伝承は、真面目すぎても伝わらないように思います。あなたも工夫しないといけませんよ。」

(平成 31 年 3 月 15 日聞き取り)

## 『山津波に注意』を実感



日向

大崎 公

(八十歳)

## 当日の状況

## 【十七時過ぎ、急激に氾濫】

この元村地区は安家川を挟んで対岸が少し低くなっています。当日は十七時過ぎに対岸で水が護岸を越えたので、平成十八年の豪雨の記憶から危険を感じました。その時は安家川上流での集中豪雨で、高齢者は百年に一度の雨と話していました。それでもまだ日向側では水かさに二十〜三十センチの余裕がありました。だが、今回はそれを越える急激な勢いで、このままだとあふれるのは時間の問題と感じました。近所に親せきも数人住んでおり、当初は声を掛けあって避難をすすめたものの「大丈夫」とのことでした。その十五分後には道路に水が上ががり、「危ないからこちらには来ないで

ください」と電話がありました。

水が道路に上がり始めたので、自宅より低い車庫に置いていた二台の車を、やや高台にある自宅まで避難させることにしました。先に軽い軽トラを上げ、約五分後に乗用車を上げに行くと、すでに水深は十センチ程度ありました。

続いて、近所で湧く清水川を巡回しました。我が家の屋号は清水(すず)というだけに水量豊富な湧水は元村の水源ともなるほどです。家から約五十メートルの距離で大量に湧いていますから、氾濫すると自宅も危ないと思いますし、平成二十年に掛け直した橋も心配でした。

支所から十八時ごろに避難の呼びかけがあったものの、すでにがれきも流れており、我が家に関してはもう移動できない状態でした。ただ、隣近所と相談して一緒に避難した人も多かったようです。

十八時ごろ、周囲はゴーツと山が鳴る雨の降り方となり、対岸の山も見えないような状況です。清水川を巡回したあと、隣の家の車庫の様子を見ると、すでに車庫に水がいつぱいで中の乗用車が浮いてゴツンゴツンという音が聞こえました。

二十時ごろに見ると、道路から私の家にかかる途中まで水が来ており、様々なゴミが打

ち上げられていました。



清水川の普段から豊富な湧水（後日撮影）

## 【その後も油断できず】

安家川の水は引くのも早く、二十二時ごろには道路の護岸のあたりまで下がりました。昔はこれほど一気に水が増減しなかったので相当に感覚が違います。

水が引いても、清水川の様子が気になりました。清水川は山の向こうに降った雨が地下に浸透し、湧出するまで時間がかかるので、安家川の水が引いたところに注意が必要です。

一睡もせずに見回り、最終的に橋は越えずギリギリで我が家は大丈夫だったものの、下流の家には多くの水が入ってしまった。後日、痕跡の計測で通常より一メートル五十センチほど水が上がったようです。

## 翌日以降の状況

### 【安否確認・ライフライン】

翌朝、川沿いの郵便局には泥が大量に入っていましたし、県道には流木やがれきが上っていました。停電で電話も不通でしたが、翌日には何とか歩いて親せきたちの安否確認ができました。また、息子が通れる道路を調べて来てくれました。

町水道は断水となりましたが、明治三十年代に自宅が火災に遭った際に、防火用水として水路と二カ所の水槽が作ってあり、自家水道を使うことが出来ました。同じ班の人たちも使いに来ていました。

電気の復旧までは過去にも大雪による停電の際などに使用していたホヤの大きい五寸灯油ランプを二つ下げ、二晩それで夜をしめました。かつて、私が勤めていた郵便局で使用していたものです。煮炊きはガスが使えませんでした。



活躍したランプ（後日撮影）

### 【ボランティアの皆さんの受入れ】

その後は約四十日、述べ六十八人のボランティアの方々に、自宅を宿泊所として利用してもらいました。皆さん、野宿の準備をしますが、寒い時もあるので家の方が良いのではと思ったためです。座敷や茶の間を開放し、寝袋持参の人もいれば、ごろ寝で良いという人もいました。

## 振り返って

### 【言い伝えの意味】

元村で住宅に被害が無かった家は数えるほどしかなく、屋号があるような古い農家の家は直接被害が無いところが多かったです。川

沿いの家は軒並み私の生後に建っています。もちろん高い場所でも沢水の氾濫での被害は発生していますが、住まいが流された人で、築百年以上の住宅は無かったように思います。かつて、増水という春の雪解け水という印象が強いです。我が家に伝わるかつての郵便配達の話では、例えば折壁には一本橋を十一〜十二カ所渡って上流まで配達したと聞いています。三〜四月の増水期には、人が一本橋を渡っていて流された事故の話は度々聞きました。

しかし、今回の災害でかつておばあさん、ひいおばあさんが言っていた「山津波には注意」の意味が分かりました。

今度、安家川の拡幅工事や橋の架け替えが予定されているのは良いのですが、人が地域に残って欲しいと願っています。

また、漁協の組合長を務めています。今回の台風による安家川の影響が気になっています。安家川には七十二の淵と四十八の滝があるとも言われるほどでしたが、今回、多くの淵が埋まりました。淵や滝などの変化に富んだ環境は魚に良いと言われます。ただ、意外と自然の生命力は強いのもまた事実です。

（平成二十九年七月七日 聞き取り）



## もはや津波の状態



日向

大崎 進

(六十八歳)

## 当日の状況と対応

## 【午後、急激に水位が上昇】

当日は午前から避難の呼びかけがありましたが、このような事態は想像もしていませんでした。十四時半ごろ、みるみるうちに安家川の水位が上がってきたので「こりやダメだな」と思い、車の避難を決めました。

高台のお寺に一台上げたとき、斜面から小石が転がりはじめていました。その直後に土砂崩れが発生して行けなくなっていました。危うく巻き込まれるところでした。結局残りの一台は自宅の敷地内ギリギリに寄せ、後ろに近所の車も二台止まりましたが、その後、氾濫した時には一番後ろの一台が水に浸かってしまいました。

そのころ、バケツをひっくり返したような雨なので、近所で川の近くに住む親せきを「危ないからこっちに来い」と自宅に呼びました。その時は、私の家までは絶対に水は来ないと思っていました。何人が集まり、早めに夕食をと考えうどんを準備しました。対岸より早いうちに停電になったので、発電機も用意しました。

そのうちに、急激に水位が上がりました。自宅に来ていた人の息子さんが、まだ川岸の家で耳栓をして寝ているとのことで、急いでその人は家まで行きました。

また、来ていた別の家族三人も、荷物を取りに戻ったそうですが、自宅の対応で手いっぱい、気付きませんでした。その後、親父さんと息子さんが戻って来て「母ちゃんが流された」と聞いて驚きました。思い出さなくてもないショックな出来事でした。

## 【安家寺への避難】

薄暗くなるころには自宅裏まで水が上がりました。最初にこの近辺で避難を始めたのはお子さんがいる家の人です。窓から「おらたちは避難するけどどうする？」と声を掛けてくれたので、私たちもお寺に行くことにしました。水が来ていた自宅裏の田んぼを越えて、

何とか崩れた場所も越えて行きました。

お寺には約十二人が避難しており、下には自宅が水に囲まれているのが見えました。橋に流木などが引っ掛かってダム状になり、その周囲を水が廻って流れており、津波状態で手の施しようがないものの、四〜五回ほど、ヘッドランプを点けて下の様子を見に行きました。



無事だった犬の「ダイキチ」  
(後日撮影)

避難の時は慌てており犬の存在を忘れていました。二十一時ごろ、県外に住む娘との電話で気付き、慌てて行って犬を助けました。まだ腰の高さまで水がある中、犬は頑張っ泳いでいました。鎖を離すと逃げ、その後は近所の親せき宅で保護され数日お世話になりました。

水が引いたあと、私たちは日付が変わる前には自宅に帰りましたが、朝まで避難してい

た人もいました。自宅は全体的に浸水被害を受けたものの発電機は無事で、ストーブで暖もとれる状態でした。

## 翌日以降の状況

### 【被害状況とその後の生活】

自宅はやや高い所から川側の低地にかけて増築した構造です。高い所も浸水しましたが比較的被害が少なかったです。しかし、増築した側は流木が入り、さらに近隣の建物がぶつかって崩れ、その建物の家財などが入りました。家電をはじめ家財の多くが被害を受けてしまいました。

片付けをしながら自宅で何とか暮らしました。当初は支援物資を受け取りたくても橋が流木で埋まって渡れず、安家支所へ行けませんでした。しかし、数日後には弟が盛岡から軽米経由で五時間もかけて来てくれました。個々人のつながりで頂く支援が早く、お茶や水・ラーメンなどを頂きました。

また、自家産米を貯蔵していた容器のセイロは一見無事で、上の方の米は使うことが出来ました。おにぎりを近所に配ったこともありました。しかし、徐々に下の方には水が入っていたのが分かって捨てました。

水は町水道のほか、自家水道も壊れてしまったので、近所の大清水という湧水でしばらく水を汲みました。また、豆腐店を営んでいる関係で、釜に貯めてあった水も利用できました。自家水道の復旧は数カ月後です。対岸は割と早期に停電が復旧したようですが、日向側は電柱の倒伏などにより復旧まで時間がかかりました。



発電機が役に立った（後日撮影）

なりました。特に東京の大学生たちが十人ほど来てくれた時は、たいへん助かりました。これが私たちだけで片付けるとなると、途方に暮れてしまいます。家の断熱材一本一本をロープで引っこ抜くのすら、水が染み込んでいたので大変です。

片付けを急ぎたい気持ちがあり、早期に壊れた建物をバックホーで解体してもらいましたが、写真では建物の被災証明が出来ず、その部分が補助の対象外となり失敗してしまいました。その後、壊れなかった側も床を張り替え、自宅は壊れなかった側だけを残すことになりました。

### 【稲作・仕事のいつ】

その年も稲の収穫は出来ましたが、台風で配水ポンプなどもすべて壊れてしまい、稲作はやめることにしました。

また、私は当時ダンプカーの運転手もしていましたが、仕事に二〜三カ月は行けませんでした。その後、年齢を考えて今年二月で退職しました。

本当に、考えられないような災害でした。

### 【片付け】

我が家でも、ボランティアの人のお世話に

（平成二十九年八月八日 聞き取り）

# なかなか夜が明けなかった

日向

嘉村 ツヤ

(八十一歳)



その時使用した懐中電灯 (後日撮影)

## 当日から翌朝にかけて

### 【迷いつつ自宅に戻り待機】

私は安家出身で、一人暮らしです。平成十八年の大雨の際には、玄関前まで水が上がりましたが、自宅は大丈夫でした。

当日は激しい雨が降る中、松原さんの家に行きました。さらに雨は強くなり、松原さんは二階にいらしたのですが、私は迷いつつも自宅に戻ることになりました。途中、すでに道路にはひざ下まで水が来ていました。避難準備をしようと思ひ、事前に準備していたジューズや飴を入れた袋を持ち、玄関に腰掛けて川を見ていました。川より少し高いので大丈夫なようにも思いつつ、知っている人が来たら乗せてもらって避難をしたいと思ひ

ていました。

### 【浸水、テーブルに身を委ねる】

そうしたところ十八時ごろ、川側の玄関ではなく裏の方から「たっぶんたっぶん」と水が来て、慌ててなぜか靴を脱いで家の中に入りました。あとから考えれば靴は履いていればよかったです。

続いて前の道路からも水が来ました。さらに裏の方から勢いよく入って来た水で、仏壇が転んでしまいました。テレビも転びそうになり、転ばないようにと思いつかまったところ私も一緒に転んでしまい、何ともならないと思ひました。

そのうちにテーブルが流れて来て、畳に一本だけ足が刺さった状態で一緒に浮いて来ました。私は以前、災害に備えて買っておいた懐中電灯を持ち、不安定ながらそこに上がり、徐々に浮いて行きました。身を委ねていると天井に近い欄間に手が届き、そこにつかまっていた。 「いま家が流れるか」と怖かったです。

欄間につかまっている間、窓から対岸に何か電灯を持った人が歩いているのが見えたので、持っていた電灯を振り、「ここにいましたよ」と知らせようとしました。気付いて

はくれたようですが、後日「なんぼ助けてくれと言われても行けない状態だったよ」と言われました。



翌日、安家川と安家郵便局周辺 (8月31日 15:49)

### 【なかなか夜が明けない】

水が引くと、一気にテーブルが落ちて「なんだべ?」と思ひました。水は引いても腰から下がすっかり濡れていて、動く気もしませんが、早く夜が明けたいので、立ったりもしながら、早く夜が明ければ良いと思ひましたが、なかなか夜が明けません。時計を電灯で

照らして見ながら、「まだこの時間か」と何  
度も思いながら、寝られない夜を明かしまし  
た。

朝方には寒くなりました。何か温かいもの  
は無いかと思っても、近くにあるものは全て  
濡れていて、何も使えるものはありません。  
押し入れの高い方まで布団なども全て水浸し  
で、泥もかぶりしました。

## 翌日以降の状況

### 【まだ暗いうちに】

まだ暗いうちに近所の家の人たちが来まし  
た。流されてしまった家の人たちです。「お  
ばちゃん、母ちゃんが家と一緒に流されてし  
まったよ」と聞いて、驚きました。そのまま  
腰が抜けたように立てなくなっていました。ま  
た。しばらくその人たちもいてくれましたが、  
私もなかなか立てないので、「いいが（いい  
から）、行ってくたんせ」と言って、明るくなっ  
てからようやく気を落ち着けて動き出すこと  
が出来ました。

何とか頑張って立っても、履物は何もあり  
ません。とりあえず裸足で動き出しました。  
多くのものが流され、下駄箱は転び、玄関の  
戸も転んで壁も壊れましたが、流木などは入

りませんでした。

玄関のガラスが壊れていたので気を付けて  
外に出て、松原さん宅へ行くと松原さんはま  
だ二階にいました。その日、近所の家で「な  
にか、つかけても何でもいいから貸して」  
とつかかけ（サンダル）を借りてきて履きま  
した。



安家生活改善センター避難所 ※写真提供：森子芳和

### 【当初、自宅を過ごす】

九月三日の午前までは家で過ごしました。

と言っても何もものがありません。近所の人  
たちが、ご飯を誘ってくれたほか、道路を行  
く近所の人がパンをくれたりしました。また、  
イーハトーブトライアルに参加したことがあ  
るといふ人が早い段階で来てくれて、「あの  
ときはお騒がせしました」と言って、寿司と  
のりまきを差し入れてくれました。

ただ、ゆっくり横になって休めるような状  
況ではありませんでした。近所の人から避難  
所の生活改善センターに行った方が良いとす  
すめられ、九月三日の午後、ようやくセンター  
に行くことになりました。

しかし、泥だらけです。ちょうど江川に住  
む弟が来てくれました。そちらも床下浸水で  
したが、避難は必要ない程度とのこと。いっ  
たん家に連れて行ってもらい、風呂を使わせ  
てもらってから、センターに避難しました。

### 【避難生活】

仮設住宅に入居するまでは、避難生活を続  
けました。ボランティアの要請をしていまし  
ましたが、最初来てくれたのは一人で、それでは  
どうにもならないような被害状況のため、  
いったんお断りしました。どうしようかと  
思って毎日、家の前に座っていると、近所の  
人が心配して産直に設けられたボランティア

の拠点に要請してくれたり、道行くボランティアの人が声をかけてくれたりして、手伝ってくださるようになりました。

## その後

### 【ボランティアの皆さんに感謝】

その後、片づけでは多くのボランティアの人にお世話になりました。家を直して住み始めたので、床板もはがして洗ってもらい、およそ一カ月間、多い日は十人以上の人が来てくれました。何も恩返しできませんが、本当にありがたいことです。この場で感謝の気持ちを伝えたいです。その後、仮設住宅の鍵を受け取ったのは十二月の二十一日です。

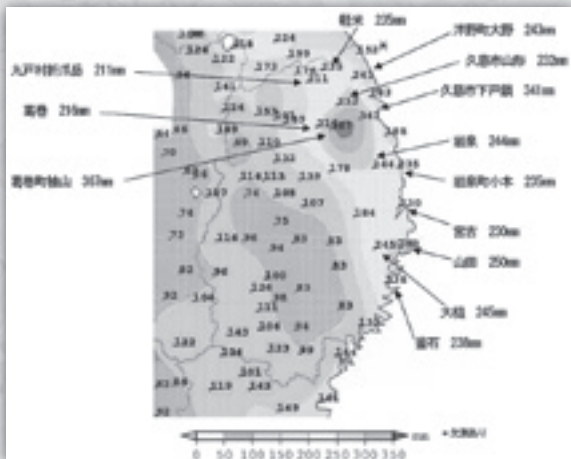
### 【江川の川】

私の出身の江川の方では、実家の裏がやはり機械で土を掘れば川の石が出てくるようで、かつて水が流れたことが分かるそうです。

(平成二十九年八月八日 聞き取り)

## コラム

### 災害を忘れない② 平成18年集中豪雨



平成18年10月6日～10月7日の降水量 (アメダス)

平成18年10月6日から9日にかけて、猛烈に発達した低気圧が関東の南海上から三陸沖に進みました。10月6日～8日にかけては岩手県内陸北部や沿岸北部で大雨となり、特に安家地区にて集中豪雨となりました。葛巻町山崎では観測史上最大の48時間雨量(373mm)を記録し、当町では家屋の浸水害、道路や河川・農林漁業へ大きな被害が発生しましたが、人的被害はありませんでした。

区分	岩泉町における主な被害状況
避難	10月7日10:05、安家元村地区と岩泉片畑・志田地区、乙茂三田市地区(合計184世帯443人)に避難勧告・指示が発令され、119人が避難
地区の孤立	安家(松ヶ沢・川口・半城子)
住宅の孤立	安家茂井・小川国境
住家被害	一部破損1件、床上浸水8件、床下浸水6件
停電	中里、外川目、釜津田(釜沢～櫃取)、岩泉(上ノ山・中家・惣畑・沢廻・横道)、安家 など
断水	安家、袋綿など
その他被害	町道25カ所、河川12カ所、農業(農産物・農地など)、林業(原木ほだ木など)、水産(養魚場・小本漁港施設・茂師漁港施設・その他漁業施設)など
被害額	13億5166万円



人家に迫る安家川の濁流



冠水した水田

降水量図の出典：盛岡地方気象台 Web サイト (<https://www.jma-net.go.jp/morioka/saigaidata/saigaisiryu06-03iwate.pdf>)、被害データ資料：岩手県 Web サイト (<http://www2.pref.iwate.jp/~hp010801/osirase/saigai/h18saigai/houkoku/18houkoku.pdf>)、広報いわいづみ平成18年11月号

# 生きた心地がしなかった

日向

## 下屋敷 榮

(八十一歳)

破壊された1階  
(9月1日11:25)

## 当日の状況 【避難が遅れ二階へ】

当日の夕方、そろそろ避難をした方が良いとは思っていました。もう暗くなったころ、私は車に大事なものを積んで、妻と一緒に水が来ないところへ避難しようと考えていました。まだ道路の水は三十センチほどで「大丈夫だ、今なら車で走れる」と思ったのです。しかし、下流の安家新橋に流木が掛かってダム状になったようで、あっという間に家はその中にすっぽり入るような形になりました。

二階で、あれもこれも持って行こうと言っているうち、逃げるに逃げられない状況となっていました。そこで二階にいることにしました。

## 【二階に水が迫る】

暗くなるころ、さらに水が上って来て、十段ある階段の十一段目、一階の天井の高さまで水が来てしまいました。危険なのでさらに上に行こうと思いましたが、押し入れの中に二階の天井裏に上られる穴があるので、そこから上がろうと思いい、歳をとっていても頑張っ

張って上がりました。寒いので、下から妻に布団を上げてもらいました。しかし、今度は私の妻がどう頑張っても自力で上がることが出来ません。精いっぱい手助けしても難しいので、仕方なく私も下に降りました。

このまま自宅も流されたら終わりです。二階の窓を開けて道路を流れる水の中に飛び降りようかと真剣に悩みました。木も流れており危険ですが、どのみち生きるか死ぬかです。合間を泳いで何とか高い所まで上がれないだろうかとも考えました。とはいえ、私は川遊びをしていましたが、川に慣れていない妻を一人置いてゆくわけにもいきません。もう、流される時は妻と二人で、と覚悟しました。

そんなことを考えているうち、妻が、「酒屋さんの家がねえぞ、父さん見て」と言うので上流側のお隣を見ると根こそぎなくなっていました。我が家にはぶつからなかったので

すが、反対側の家につかかってその家の角は壊れていました。

時折、大地震のような衝撃があり、今度家が壊れてしまうのではないかと、生きた心地がしませんでした。木が道路を流れているのは見えたので、それが刺さっているということとは分かりました。



流木が刺さった一階での搜索活動 (9月23日10:26)

車は結局、二台とも流されてしまいました。二階から電灯を点けて見ていると、流されるのが見えました。妻の車は防犯ブザーがピーピー鳴って流れ、その後近くの広場で見つかりましたが、私の車はどこまで流れたか分か

りません。

水が引く時は、一気にダムの水を抜くように、階段が一段、二段、三段という感じでみるみる引けて行きました。雨が止んで、水が引くころには星空になり「助かった」と思いました。

## 翌日以降の状況

### 【破壊された家、土台だけは動かず】

明るくなり、下に降りようにも、根こそぎ流れてきた太い流木が家の中に何本も刺さり、降りられない状況だったので壁を破るしかありませんでした。

外から家を見て「これはダメだな、直しても住めないな」と思いました。一階は大きく破壊されて柱も壊れ、二階も壁が破損しました。ただ、一昔前の大工さんたちと違い、私の父は基礎にアンカーボルトを設置していたので、これだけ木がぶつかったても、土台だけは全く動かずそのままでした。

家に入った流木については後日、行方不明者の捜索をするために、消防や警察関係者がチェーンソーで切断し、ロープで引き出してゆきました。



台風後、仮設住宅とその周辺 ※写真提供：森子芳和

その後、家の片付けはボランティアの人たちにも手伝ってもらいました。どこも忙しいのではと思い、周囲が落ち着いてから頼んだところ、早速来てくださいました。一週間以上、お世話になったと思います。人数も毎日十人以上、多い日では十五〜十六人も来てくれた日もあります。泥出しは私たちだけではとてもできません。

また、なにも無い中で野菜・衣類・タオルなど様々な物資を頂き、本当に助けられました。私も高齢ですが、何かのときには行ける所であればボランティアに行つて恩返しをしたい気持ちはあります。

### 【仮設住宅への入居】

二階は何とか住もうと思えば住めました。やはり水道もトイレも全くダメな状況なので、当初は親せきの家にお世話になりました。十日ほど、一から十までお世話になると、やはり気が引けるので、妻の親せきの空き家をしばらく使わせてもらい、その後は仮設住宅に入居しました。

仮設住宅は、二人住まいでも、ものを置けば歩くところが無いような状態です。

### 振り返って

#### 【昔の川の痕跡】

すでに亡くなった方によると、水渡地区のとある畑を深く掘ると、時期は分かりませんが、昔の川砂や石が出てきて水が流れた痕跡があると聞いたことがあります。今では考えられないような高さの場所を水が流れた可能性もあります。とはいえ、最近は多くの人が、簡単に家を建てやすいところに、家を建ててしまいました。

（平成二十九年八月八日 聞き取り）

# 息子を起こしに自宅へ

日向

林下 ユミ

(七十三歳)

安家寺前の土砂崩れ  
(9月1日9:52)

## 当日の状況

### 【とりあえず親せき宅に避難】

私は当時、息子夫婦と一緒に暮らしており、夫は病院に入院中でした。当日、雨がひどいので家がやや高いところにある、親せきの大崎さんから「俺のとこ避難せえ」と呼ばれていました。

息子は朝が早い仕事のため、早いうちから寝ており、避難する前に息子を起こそうとしましたが起きません。私もあれほど水が来るとは思わず、とりあえず大崎さん宅に行き、座っていました。

そのうち一気に水が増えてきたのが見えました。一緒に避難していた私の兄たちが家のものを何か持って来たいと思ったのか、外に

出て行きました。そのあと私は、息子を起こすために家に戻り、さらに残っていた兄の奥さんもそのあと出たそうです。まだ明るいうちで、十七時ごろだったでしょうか。

### 【一時帰宅・あっという間に水が】

家に戻って二階に叫びました。叫んでも返事が無いので両手をつけて何とか二階に上って行くと、息子は耳栓をして寝ていたので揺り起こしました。すると「朝早くから仕事なのに」と言っていて息子は怒りました。「それどころじゃない、車みんな流れるから早く上げろ」と言いました。

息子が車を四台、大崎さん宅に上げ終わるまでの十、二十分ほどで、道路に水がひびの高さまで上がり、私は家から出られなくなっていました。息子もそれに気付き、反対側から少し足を流れて踏み込んで手を伸ばしてくれました。こちらからも慎重に行ってつかまり、引っ張られたり押されたりしながら息子の嫁さんと一緒に大崎さん宅に行きました。

今回の水害において、元村では安家橋、大正橋、中の橋、新橋と四つの橋がダムになったので被害が大きくなりました。激しく流れている時には、中の橋に掛かった流木で水しぶきが高く上がり、対岸の家が見えないよう

な勢いでした。

私のあとに家に一時帰宅した兄の奥さんは、家ごと流されてしまいました。



台風後の付近の状況 (9月1日11:22)

### 【安家寺への避難】

大崎さん宅へ戻ると、近所の家族が来て窓を叩き、「俺の勝手な判断だけど、もうなんぼしてもだめだから、お寺さんに避難すんべ」と言われ、お寺に行くことになりました。時間は暗くなるころで、電灯を持って行きまし



た。途中の坂道で発生していた土砂崩れを越えて行く時、長靴がなかなか抜けずに大変でした。

二十一時ごろには水が引いたようで星も見え、寒くなったので、お寺から大崎さんの家に戻りました。

避難させた車のうち二台は助かりましたが、一台は水の中でグルグル浮いて、一晩中「ビービー」と防犯ブザーが鳴りっぱなしでした。

## 【息子は近所のおじいさんを助けに】

息子は寺に来なかったものの、どこかに逃げたのだろうと思っていました。どうなったかと思えば、近所の車椅子生活のおじいさんがおばあさんと二人で暮らす家に行き、近所の人たち二人と協力して、おじいさんを二階に避難させていたそうです。ベッド代わりに二階の畳を五、六段重ねて寝かせ、息子もそのまま一緒にいたようです。後日「年寄りも置いては行かれねえべ」と話していました。息子はその家の二階から自宅を見ていたところ、最初に台所の戸が壊れて冷蔵庫が流されるのが見えたそうです。

## 翌日以降の状況

### 【片付け・生活について】

翌朝に知人と二人で周囲をぐるっと周りまわした。松原さんの家もかなり壊れているのを見て「まさかいねえべ」と思いながら大きな声で「おはようござんす」と言うと「いたが〜」と出て来たので、驚きました。

私は、仮設住宅に入居するまでは、大崎進さんの家で四カ月お世話になりました。息子夫婦は一晩か二晩は親せき宅に泊まったものの、遠慮して自宅に戻り、ベニヤ板で応急処置をして、物資を頂いたりしながら二階で四カ月暮らしました。仮設住宅に入るまでは、寒くても頑張っていました。

店舗と一体化していた自宅では、多くのものが流されてしまいました。ある程度、自分たちで片付け、少しボランティアの方にも手伝っていただきました。

物資の支援は様々頂きましたが、特に茶碗やまな板など、台所用品のセットを早い段階で頂いて助かりました。

最も辛かったのは、夫が六月に入院したまま台風で帰宅できなくなり、病院に行くたびに悲しそうに「なんで俺、帰れない」と言われることでした。四人部屋に入っていたので

すが、あとから入院した人が、次から次へ出て行くのです。本来ならば三カ月で退院しなければならぬのですが、状況が状況なので先生にもお願いして、十二月まで入院してもらいました。十二月十日ごろに仮設の鍵を頂いて、安心しました。



物資イメージ（小本津波防災センター、9月6日11:51）

息子たちとは現在、仮設で二部屋に分かれて住んでいます。退去したあとはどうするか、まだ決まっていません。

## 振り返って

### 【皆さんへのお礼】

東日本大震災津波の被害とは規模が違いますが、同じような体験をしました。

私も夫も手紙などの文章を書けないので、気持ちがあっても発信することができませんが、この場でボランティアの方々や、全国から物資を送ってくれた方々にお礼の言葉を、伝えたいです。

### 【昔の洪水について】

私たちはこの七十年のうちにここまで大きな災害は知りません。この地域で川の近くに家を建てるようになったのは比較的新しい時代のことです。

昔の人たちは危険な場所はある程度把握していたようで、昔からある家は川から見て高い所にあります。ただ、昔の道路はもっと低いところにあつたので、昔は家にならり坂が上がって行くような感覚でした。最近の時代になって「そんなに水は出ないべ」と言っているうちに、だんだん水の得やすい川の近くになりました。また、この辺りは平地が少なく、山の上の方に行けば今度は水がありません

ん。水も得やすく、ほどよく高い土地に家を建てるのは難しいものです。



台風前の元村上空 ※写真提供：森子芳和

さらに、今回の台風から考えても、この場所なら絶対に安全、ということはいえないのではないかと思います。安家は岩ばかりで山が崩れることがない、と言われていたのにこんなことが来るとは考えもつきませんでした。

(平成二十九年八月八日 聞き取り)

## コラム

### 安家に伝わる大洪水の伝説

ここで、かつて立命館大学探検部が安家地区で調査した伝説を短くご紹介しましょう。

#### ～生き残ったおばあさんと犬～

大昔のあるとき、大津波が起き、このあたり一帯は海になってしまった。生き残ったのはというと、帯が大平の穴目岳に引っ掛かった七十歳のおばあさん一人と、雄の子犬が一匹だけ。ほかの人や動物は全滅してしまった。いつしか、おばあさんと犬は一緒にいるうちに夫婦となり、その子孫はかつて安家でも繁栄していたという。しかし、武士が北上してくるようになると、次第に八戸、北海道へと移り住んで行ったのだそう。



穴目ヶ岳 (1,168 m)

#### ～弘法大師と洪水～

昔、大平で洪水が起きたときのこと。弘法大師が歩いていると、たまたま死んだ犬が流されてきたのを見かけてかわいそうに思ったという。弘法大師はその犬を付近の穴に葬り、その後その犬は化石になったそう。

資料：「探査 No.2 1964 特集：あっか」(立命館大学探検部、1964)

# 二階で一夜を過ごした

日向

松原 咲子

(八十一歳)



尻高に集合した緊急車両  
(9月1日9:25)

## 当日の状況

### 【避難しようと思った時には…】

私は一人暮らしです。平成十八年の水害の時、我が家は床下浸水で済んだので、避難しようとは思いませんでした。親せきの大崎公さんが、「迎えに行くからおらほのところに来て避難しろ」と言ってくれましたが、その時は「いや大丈夫だべ」と言いました。それでもあまり雨が降るので行こうかなと思つた時には、すでに水も道路に流れており、出られる状況ではありませんでした。迎えを頼めば、迎えに来る人が流されてしまうような状況なので、「出はならないでけろ」と電話で言いました。実際、迎えに行ける状態ではなかったようです。そこで二階にいることに

して、大事なものは二階に上げようと思い、携帯電話・貴重品や診察券が入ったリュックなどを上げました。

### 【十八時ごろ、二階へ】

十八時ごろだったでしょうか。畳が浮き始めたタイミングで二階に避難しました。娘に「懐中電灯は手放すな」と言われていたのですが、気付いた時には台所のテレビのところにも三つも四つもある懐中電灯のところまではすでにいけない状態になっていました。眼鏡も一階に置いたままにしてしまいました。

途中、どの程度水が出たか気になり、階段を少し下りて携帯電話の画面で下を照らして様子を見たりもしました。最も水が上がった時には、階段の上から二段目まで水が上がったので二階ギリギリでした。屋根のひさしにも、ものが引っ掛かっていました。

また、二階から外を見ると自宅の風呂や物置、周囲の建物などが流されるのが見えて恐ろしかったです。暗い中でも、流れてゆく様子が見え、一面が海のように見えました。二十一時ごろにはある程度、水も引いたように思いますが。寝るに寝られず、夜が明けるのを待ちました。



周辺の状況 (9月1日11:24)

## 翌日以降の状況

### 【二階にいたことに驚かれる】

誰か知人が通ったら声を掛けようと思ひ外を見ていました。最初に知らない人が通りました。そのあと大崎進さんが通ったので「すごかったね」と言うのと「えっ！そこにいた

の！」と驚かれました。

自宅には、ガラスが割れた影響で上流から流れてきた薪や泥もかなり入ってしまいました。多くのものが倒れ、冷凍庫や洗面所の流し、下駄箱が流されてしまいました。ただ、上流に空き家のような小屋や電柱があり、その影響で太い流木は刺さりませんでした。その日は私、嘉村さん、下屋敷さんの三人で道路端に座ってそれぞれの体験を話しました。

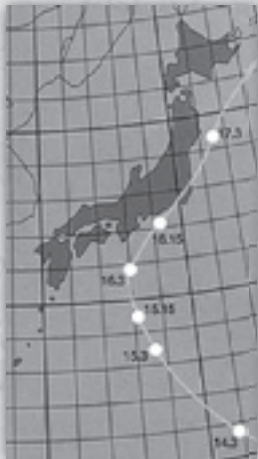
台風から二日目に、娘の夫が岩泉地区から迎えに来ました。「行かない」と言ったらところ「妻に怒られるから」と言われ、連れて行ってもらったことにしました。その時は尻高で道路が寸断されていたのですが、車二台で協力して迎えに来てくれたので、尻高で車を乗り換えて、連れて行ってもらいました。神奈川県や宮古にいる息子も岩泉に来てくれました。その日から、仮設住宅が出来るまでの三月二十五日はそちらで過ごさせてもらいました。眼鏡や入れ歯を失ったので三日ほど不自由しましたが、三日目ごろに眼鏡屋さんと歯医者さんに連れて行ってもらいました。

その後、片付けに際してはボランティアの方に十人以上、三日間も来てくださって、ありがたかったです。

(平成二十九年八月八日 聞き取り)

コラム

災害を忘れない③ 昭和23年アイオン台風



昭和23年(1948年)9月16日に千葉県へ上陸後、翌17日にかけて三陸沖を北上した台風です。東北地方太平洋側で大雨となり岩手県内各地で甚大な被害をもたらしました。

9月17日の新岩手日報によると、岩泉の降雨量は262ミリに達しました。18日の記事では、岩泉(どの範囲を指すかは不明)における人的被害は死者1名・負傷者5名・行方不明者2名。家屋被害は住家・非住家あわせて全壊3・半壊15・流失14・床上浸水114・床下浸水176。道路被害は埋没31・破損24・橋梁流失15という被害が明らかになっていますが、直後の発表であることから、実際の被害はさらに大きかった可能性もあります。

10月17日の記事では「大川村は耕地の被害はさほどではないが松草に通ずる約六里の縣道はすっかり流失した」「乙茂部落では全耕地の八割が河原と化し卅六(36)戸中十二戸の農家の生存の途を完全にうばわれている」とされます。

10月5日の記事では「山田線の不通により岩手窯業鉦山の耐火粘土輸送が途絶え、自動車輸送も困難になつて全国の製鉄事業に赤信号があがつている、同鉦山の耐火粘土は質がよく溶鉦炉補修になくてならない」と、小川炭鉦に関する記述も見られます。

なお、当時は現在の岩泉町はまだ誕生していません。



アイオン台風で落橋した小本橋のそばで行われる町村合併大水防演習  
岩手県漁港史より

## 偶然、助け出された

日蔭

しもた  
下タミヨシ

(八十五歳)



翌日の日蔭地区  
(8月31日 15:26)

## 当日の状況

### 【避難所には行かず二階へ】

当時、道路よりやや低い川沿いに住んでいました。当日は息子が消防団で避難を呼びかけており、私も三回ほど促されました。しかし、平成十八年の大雨で避難した時は、土台の周囲に水や薪が流れてきた程度という記憶がありました。また、私は足を痛めており、夜中にトイレに行きたい時などに転ぶと迷惑がかかると思い、「おらは二階にいるすけ」と言つて避難所には行きませんでした。

ところがまだ明るい時間に「ガツンガツン」という音に気付いて見ると、安家川からあふれた水とものがガラスにぶつかる音でした。まず食卓や洗濯機の上に濡れて困るようなも

のを上げましたが、ガラスが壊れて水が入り「これではダメだ」と思いました。

仏様を階段の途中に上げ、再び一階で片付けていると水が上がってきたので二階に逃げ、仏様は奥の部屋に置きました。

### 【二階も浸水、家も流される中】

休んでいると、今度は体の下から「プクン、プクン」と水が上がってきました。階段の上に水が来ており、外を見ると、ほぼ二階の高さにある道路も腰の高さまで水があるようです。泳げない私は二階に置いてあった車のタイヤ四本に、二本持っていた懐中電灯を立てて座りました。「いやー困ったなー」と思っていました。

その後、家が流されたのには気付きませんでした。柱が折れた音がしましたが、暗い中、なぜ柱が折れたのか分かりませんでした。そこに次から次へと丸太が来て家に掛かったので、途中で家は止まったようです。水は「ガツ」と引けたり、また「ダバツ」とたまったりしていました。

### 【近所の人に救出される】

「誰かいねえんだかなー」と思っていると、

外に電灯がいくつか見えて人が近付いてきました。ちょうど足元に流れてきた丸太に懐中電灯を持って上がろうとしましたが、グルグル回って乗れません。結局、再びタイヤに上がりました。



直後の周辺の様子 (8月31日 15:55)

そのうちに声が聞こえて「良かった(良かった)なー」と思っていると、森子さんと近所の大工さんの二人でした。まずゆっくり来て屋根に、続いてハシゴに、引っ張り上げてもらいました。「これさとっついて絶対離してはダメだ」と言われました。「いやいや落ち

れば流れんのかな」と思いました。道路から長いハシゴ二つを重ねて引っ張ってくれて道路に上がることが出来、両肩を押さえてもらいながら歩きました。道路にまだ水はありましたが、ひざの高さまでではなく、雨も止んでいました。とある家に上げてもらい、「これは〇〇さんの家だよ」と言われ、場所の感覚からおかしいとは思いました。

当日は森子さんにお世話になりました。全身びしょ濡れなので、お婆さんの洋服を借りて二三日泊めてもらいました。

## 翌日以降の状況

### 【被害状況】

翌朝、外に出ると自宅が元の場所に見えず、屋根だけ産直のところに見えます。「おらほの家はあの屋根だか？」と疑問に思い、初めて家ごと流されたと知りました。靴を借りて見に行きました。前夜は、タイヤから揺れて落ちることもなく流され、産直にぶつかって止まったようです。そのため、救出された時も元の位置から抜けてきたつもりでしたが、とても恐ろしい状況でした。

自宅はおよそ築六十年で、台風の二カ月前に直した屋根は残っていましたが、その下は

丸太がぶつかった影響で壊れ、流れてしまいました。屋根の下に冷蔵庫や洗濯機などが見えていましたが、使える状態ではありません。少し高い寝室のものが若干残り、ほかに使いそうなものは鍋一つで、仏様も流されてしまいました。

そのような状態なので、ボランティアの人たちに頼めることもありませんでした。ただ、産直の場所が活動拠点になったのか、大型バスが四台も来ることもあり、驚くほどの人が地域で一生懸命、活動してくれました。そして、支援物資やおかずを持って来てくれる人もいて、ありがたいものだと思います。

### 【仮設住宅入居まで】

息子はセンターに避難していましたが、私は当初、近所の一人暮らしの人の家に一カ月泊めてもらいました。その後は、出身地の小川にいる妹の家に三カ月泊めてもらいました。ずっと同じ場所にいるなら良いのですが、そういう訳にもいかず、ものはあまり買えませんでした。

その後、仏様を流したままなのが気になり、十二月末に安家へ戻り、仮設住宅へ入居しました。和尚さんをお願いして、仏様を作り直してもらいました。



ボランティア支援の拠点となった産直施設  
※写真提供：森子芳和

## その後

### 【皆さんにお世話になった】

台風後、駐在さんから「これからは若い人の言うことは聞かねえばダメですよ」と言われました。また台風が来る時には避難しようと思います。今回はひどい状況で、皆さんに難儀させてしまい、お世話になりました。一回死にそうなところを偶然助けられたので、いま、こうして話すことができます。

(平成二十九年七月五日 聞き取り)

## 被災した商店を再開



日蔭

玉澤

明德めいとく

(六十一歳)

## 当日の状況と対応

## 【消防団として巡回】

当日は朝早くから雨が降る中、六時前に高地区の住民から電話がありました。「すごい雨で橋に流木が引っ掛かっている」とのこと、行くと普段水の少ない沢の小さな橋に大きな木が引っ掛かっていました。ただ、取れる状況ではなく、流れも急になってきていたので避難の準備をすすめました。私は消防団員なので、周辺も巡回して帰りました。

その時点では、雨は激しくはありませんでした。そのあと、経営している商店を開店して店は妻に任せ、消防団として巡回に出ました。安家は八分団ですが、当時の私は分団長経験者で構成される本団の分団長を務めてい

ました。事前に八分団の各部長さんとは「水が出た時には自分たちの判断で出て回って下さい」と話をしていました。

危険を感じたのは午後からです。雨が止まないで、インターネット上の水位情報も参考に、これ以上降ると危険であると判断しました。役場からも状況を問い合わせる電話があり「普段より上がっているから避難指示を出した方が良いのではないか」という話をしました。



店舗裏の様子・屯所も被災 (8月31日 15:41)

## 【避難の呼び掛け】

一回屯所に戻ると、安家支所長がおり「避

難した方がいいよね」と話が一致しました。

その時点から消防団として各戸に、生活改善センターへの避難の呼びかけを徒歩や消防車で開始しました。また、消防署長も巡回に来ました。当時は活動できる消防団員が少なく、高齢者宅を優先的に巡回しました。すでに危険を感じて避難する人もいたようです。

平成十八年の水害の時にも私は避難を呼びかけましたが、あまり避難してもらえなかった記憶があります。今回も支所長やお巡りさんとも協力して、半強制的に呼びかけましたが、やはり避難になかなか応じてくれない人はいました。

水が道路に上がったのは確か十七時過ぎでした。せき止められていた水があふれたような感じで、一気に水が増えたので活動は困難になりました。

薄暗くなるころ、避難したのといった家に戻った人がいるとのことで、役場から巡回要請がありました。現場までは行けない状況でした。また、水があふれた沢の下流の家から土のうの依頼もありましたが、避難するように伝えました。

その後、屯所に水が入った時点で消防団も避難を決め、団員は屯所の二階や改善センターに避難しました。

## 【帰宅、事務所から出られなくなる】

私は十九時ごろに帰宅し、車を避難させようと考えて商店事務室で鍵を探していると、「バーン」とドアが閉まりました。水が来たようで、開けようとしても開きません。当初、窓ならまだ開きましたが、外に流木も車も流れているのが見えたので、中の方が安全と判断しました。一気に胸の高さまで水が上がリ、車庫の車が浮いて屋根におつかるのも分かりました。

妻は近くの改善センターの二階から「お父さん出ない方がいいー!!」と叫んでいたようですが、何を言っているのかは聞き取れませんでした。

完全に暗くなるころ、事務室にも水が入って来たので机に上がり、最終的には横転した家具の上に乗りました。事務室は屋根が低いので万が一、水没するようなら屋根の高い売場まで泳ごうかと思いました。

結局、水がある程度引いた二十二時過ぎごろに消防団が窓からロープを渡してくれて、私は体にロープを巻いて助けてもらい、倉庫の二階に避難しました。

## 翌日以降の状況と対応

### 【被害状況】

翌朝、自宅や商店は一メートル三十センチほど浸水していたことが分かりました。

妻は当日、川に面した玄関の扉をガムテープで目張りしたのですが、流れは玄関ではない方から来ました。大きな流木が商店や倉庫の壁を突き破り、電柱も高い所の窓に刺さりました。商店の冷蔵庫などの電気製品も全てダメになりました。当日は何が何だか分からず、何か突き破るすごい音は聞こえていましたが、翌朝の光景を見て驚きました。

自宅も商店同様に浸水し、一階の戸や家具も流されましたが、二階のものは残ったので何とか二階で寝泊りすることにしました。車も全てダメになりましたが、必要な時にはご近所から借りました。

消防団は休ませてもらうことにして、二日目に消防団長さんが来た時に伝えました。ただ、緊急消防援助隊が来た時には私も案内をしました。活動できる団員が活動していましたが、被害が甚大で、消防団で出来ることは限られていました。



被災後の店内の状況 ※写真提供：玉澤明德

### 【使える商品探し】

商店は営業できなくなりましたが、道路の寸断により地域に支援物資がすぐには来ない状況にありました。支所長さんの依頼で、出せるものがあれば出してほしいとのこと、当初は商品で使えるものをかき集めて、改善センターに持って行く作業ばかりをしていました。

飲みものは自販機も壊して出したほか、食べられる食品を全て提供しました。カップラーメンのほか、なまものも一部大丈夫でしたが、二〜三日が限界でした。また、パッキー



ジに泥がついた洗顔料や歯磨き、洗面器、ゴミ手袋なども提供しました。

## 【生活について・避難所の状況】

自宅も避難所も断水で困りました。山のふもとの湧水や沢水のほか、近所の手押しポンプ井戸も使わせてもらいました。

食事については、妻は避難所で炊き出しなどのお手伝いをしていたので、その食事を頂いて食べたりしていました。

食材は当初、避難所では、大平の方が台風当日に届けてくれた米数十キロでのぎました。また、その後は多くの米の支援を頂き助かりました。さらに、自宅の畑には水は流れたもののピーマン、トマトが無事で分け合ったほか、我が家はジャガイモを植えるのが遅いのでまだ掘っておらず、それも食べました。公式の支援物資が届いた時には、車を借りておにぎりやパンの配布を行ったこともありました。

## 【支援について】

寸断されていた道路は、数日後に県道七号線の久慈市山根の寸断箇所が開通しました。その前は安家に親せきがいる人で歩いて入

て来た人もいたようです。

その後、三日以上経ってからボランティアさんが地域に来てくれて助かりました。当方に最初に来てくれたのは、商店の関係で薬の卸屋さんなどが宮古から来てくれて、消毒薬を頂いたほか、泥出しを手伝ってくれました。



ボランティア活動（平成28年9月4日14:10）

また、住宅の泥出しで一般のボランティアさんのお世話になりました。当初は住居優先でしたが、あとから商店の片付けも手伝ってくれました。盛岡市や滝沢市の高校生が店の棚を外に出して洗ってくれて、本当に助かりました。

皆さんに比べたら我が家はまだ良い方だと思っていますが、仕事量が多く大変でした。一回倒れて病院で点滴を受けたものの、幸い入院には至りませんでした。ある程度落ち着いたのは十二月末です。

## 【商店の再開について】

私はこの商店の三代目です。店の再開については、住民の減少もあり悩みました。それでもお客さんは来てくださるので、再開するしかないと思えました。補助も受けましたが、何かとお金がかかります。薬の販売は法令で決められた照度や棚の広さを確保しないといけません。その他の陳列棚は洗ってもらったものを使えましたが、冷蔵庫は購入しました。

食料品の卸屋さんなども手伝ってくれて、その年の十二月二十日に営業再開しました。徐々に始めるつもりで周知はしなかったものの、お客さんは自然と口コミで来てくれました。ただ、現在の店は河川改修工事の立ち退き区域に入っているので、人口減少も考慮して、現在は移転先の規模などを検討中です。今後の展開としては、移動販売を再開します。台風の約三年前に車両を購入する補助を頂いて開始したのですが、被災した車は直りませんでした。保険も全額は戻らず、規模

を縮小して軽の移動販売車にしました。再開にあたっては保健所への申請や様々な手続きが必要です。



ある程度きれいになった店内 ※写真提供：玉澤明德

## 振り返り・その後

### 【過去の災害について】

以前はやや下手に店がありました。私が小学生の時に洪水で店に水が入った記憶があります。そのころは川のそばに風呂場を建てて、川の水を沸かすのが一般的だったので、風呂場は大雨ですぐに流されました。

私が中学生のころまで安家川に護岸は無

く、川沿いに家ありませんでした。確か高校生のころに護岸工事をして以降に建つようになりました。平成十八年豪雨の際も、護岸まで水が来たものの店は大丈夫でした。護岸工事によって皆、安心してたかもしれませんが、いま考えれば徐々に川底が上がって来ているので、氾濫しやすくなっていたかもしれません。

また、自宅の裏には旧道や石垣があるので、その辺りまではかつて水が来たことはあったのかもしれない。祖父・祖母によると、詳しくは定かではないもののかつて安家で洪水により人が死んだり橋が流されたりしたことがあったようで、そのために供養塔を建てることを呼びかけたとも聞いています。

### 【その後】

今も寝ていると不安で「ハッ」と目が覚めることがあります。資金も無い中、商店の移転などのめどが立てばもう少し落ち着けると思います。大変でも、商店を開ければ誰かしら来てくれます。皆さんが喜んでくれることで心が休まります。そうでないとやっていけません。

(平成二十九年七月十一日 聞き取り)

## コラム

### 岩泉町の橋供養塔

#### ～橋供養塔とは～

橋供養塔は石碑の一種です。多くの沢や川がある岩泉町において、洪水になると一本橋や土橋と呼ばれる昔の橋は流されることもあり。橋供養塔には「この自然の力に霊を感じ洪水にも流れぬようにと供養した村民の祈願がこめられている」と言われています。

町内では安家日蔭(下記)のほか、下有芸高清水に嘉永5年(1852年)8月吉日のものとする橋供養塔が現在もみられます。どちらも1年違いで建立されています。

資料：岩泉地方史上巻(1980)

#### ～安家日蔭・中の橋たもとの橋供養塔～

建立されたのは江戸時代の嘉永4年(1851年)9月16日、建立者は安家村中とされます。土台が台風10号で被災しましたが本体に大きな損傷はなく、現在は仮置き状態です。現在は中の橋たもとにあります。古くは安家洞付近にあったという情報もあります。

資料：岩泉町教育委員会資料、聞き取り



中の橋たもとの橋供養塔

## 伝承から見えること



日蔭

中居仁太郎

(八十四歳)

### 当日の状況と対応

#### 「元村の様子を見に行く」

当時は、妹と二人暮らしでした。十八時ごろに元村の様子を車で見に行くと、所々に消防の人たちの姿がありました。その時、安家の北側から対岸の支所の方向を見ると、道路と川の水の高さがほぼ同じように見え、これは大変だと思い慌てて帰って来ました。雨は激しく降り続け、自宅の周辺も沢から水が流れて来るようになりました。ただ、川からは高い所ですし、沢水が直撃する場所ではないので、避難は考えませんでした。

十九時前には近所の尻高バス停周辺でバス停がすっかり埋もれるほどの土石流により、県道が通れなくなりました。

#### 「足止めされた知人が家に避難」

そのころ、安家から岩泉に通勤している知人が二人、別々に「家さ帰れないからここで休ませてけろ」と家にやってきました。それぞれ携帯電話で家に電話すると、家が商店を営んでいる一人は「冷蔵庫が流れそうだ」という状況でした。もう一人は「前の家が流れて行く、私も避難したらいいか」と奥さんに聞かれたそうです。



翌々日の尻高バス停付近 (9月1日9時23分)

私たちはすでに夕食後でしたが、一人は家族のアドバイスで常にパンを持ち歩いており、もう一人にはちょうど家にあった食パンを食べてもらいました。

十九時には停電となり携帯電話も通じなくなり、夜は仏壇から持って来たロウソクで明かりをとり、その二人もここで一夜を過ごすことになりました。おおむね一時間おきに電灯を持って、二、三人で道路の様子を見に行くようにしました。

二十一時ごろには多少は水の勢いが弱まりましたが、長靴以下の水位でもかなりの勢いで水が流れているのでとても歩ける状態ではなく、朝までは移動できませんでした。

### 翌日以降の状況と対応

#### 「夜が明けて元村へ」

翌朝には何とか水がだいぶ引いたので、三人で歩いて元村まで様子を見に行きました。途中、川沿いの家の被害に驚きました。六時ごろに安家洞に着くと、安家新橋に流木が引っ掛かり、道路にも流木があり、「安家が壊れてしまった」と啞然としました。元村は知人ばかりですが、見れば見るほど知っている風景とは全く違いました。

家に泊まった人のうち一人は、対岸に住んでいる人で、安家新橋が通れないので、県道七号線の橋を渡り、北側からぐるっと迂回して行けると思いましたが、歩いていくのは大変です。ちょうど元村で近くにいた六十代の知人に軽トラで送って行ってもらいました。

家に泊まった二人は無事に自宅に帰ることができました。二人とも自宅は無事でしたが、一人は商店が被災し冷蔵庫などが流れてしまったそうです。また、道路が寸断された上に、家の周辺が車を置けない状況になったために車を移動できず、約一週間はここに車を置いた状態でした。私は台風翌日のその後、家に戻ったり、元村の様子を見に行ったりを何回か繰り返しました。

### 【被害状況】

自宅には被害はなく、停電も数日で回復しましたが、自家水道・町水道ともに断水し、しばらくは給水車を利用しました。また、裏の野菜畑は泥で埋まる被害を受けましたが、家が無くなった人たちからすれば被害のうちに入らないと思いました。



安家新橋を塞ぐ流木 (9月1日11時28分)

### 振り返って

#### 【平成十八年の大雨】

私は平成十八年の大雨が記憶に残っています。当時、私は民生委員だったので、生活改善センターに皆さんが避難するお手伝いもしました。その時にも自家水道が壊れてしまい、三日後によくやく対応が落ち着いて自宅の水

道を直そうとしていた時に、倒れて心筋梗塞で入院してしまったので印象に残っています。

#### 【昔の大洪水について】

正確な場所は分かりませんが、高須賀地区には昔の大洪水にまつわる伝承があるようです。例えば大洪水で人が流されたという場所や、「逆さ松」という伝承です。また、江川では家が建ったまま流されたそうです。そういった伝承があるということは、大昔にも大きな水害はあったと思います。

また、時代は明治か大正か分かりませんが、元村のとあるお宅では昔の台風の時、水が引いたら便所の中に魚が泳いでいたという話もありました。その便所の場所は、子供時代の記憶がうつすらありますが、そこまで水が来たということであれば、今回の台風と同程度だったと推測されます。

今回がこうした大きな台風の第一回目ではないと思うべきです。もっと各部落で、高齢者に一昔前の話を聞いた方が良いと思います。安家でも各家々などで、水が来た場所を伝える印を残してゆく必要があるのではないかと思います。

(平成二十九年六月二十六日 聞き取り)

## 避難所へ行けず高台へ



日蔭

日向 敏江

(五十七歳)

## 当日の状況

## 【避難に至るまで】

私は当時、保育士として地区の保育園に勤務していました。当日は台風接近により子供たちは登園せず、昼には帰宅しました。その時点での雨や増水は危険を感じるほどではありません。

異変を感じたのは夕方です。川沿いに住んでいるので常に川を見ていると、いつも増水の目印にしている場所まで水が到達しました。雨も激しく、「もっと増えてくるな、これは危険だ」と思い、車に荷物を積んで避難の準備をはじめました。

夫はインターネットの気象情報から、雨はそう長くは続かないことを確認しており、避

難には乗り気ではなかったものの、川を見て納得しました。

出発前に風呂に入り、軽く夕食も食べました。避難所の生活改善センターへ行こうとすると、隣の家の人はまだ家におり、ピーちゃんねつとで「もう行くよ」と電話しました。時間は十七時ごろです。

避難所へ行くと思うとあまり貴重品は持てませんでした。また、そこまで大きな被害は考えていませんでした。



高台へ上がる道（後日撮影）

の高さまで水が上がリ、家の前が川のようになってしまう。裏の安家川の方ばかりを気にしていたのは失敗でした。

家はまだギリギリ大丈夫でしたが、すでに、大雨の時によく床下浸水になる隣の家が床上浸水の状態でした。

事前に夫と、それぞれ一台ずつ車で行くことにしていましたが、私はもう運転できないと思い、夫の運転で一緒に出発しました。しかし道路が途中、水と流木により通れず、引き返すうちにも水が増え、動けなくなりそうでした。そこで近くの高台に上がり、車を停めて待機することにしました。周囲の皆が、その時に危ないと思ったようで、他の車もありましたし、隣の家の人でも高台に上がったようです。夫はすぐに歩いて戻り、もう一台の車も高台に持って来ました。

十八時ごろに眼下では貯木場の丸太が一斉に流れはじめ、近隣の家を壊し、流される家も見えました。電線がショートして光り、「ギギギ」とすごい音が聞こえ、私は見ていられませんでした。

雨は十九時ごろには小降りになり、その後晴れました。夫が二十〇時二十一時ごろに藪をかき分けて自宅の様子を見に行くと、まだ水の流れは強い状態でした。夜はとても眠れませんでした。

## 【ドアの前が川に】

ところが、気付けば出発時には道路はひざ

## 翌日以降の状況と対応

### 【食事をどうするか】

翌朝、下りて行くと家の周囲の道路は舗装が壊れ、かろうじて側溝が残っている程度です。まだ道路を勢いよく水が流れ、気を付けて渡りました。自宅の水は引いていたものの、前に大量の土砂が積もっていたので、板を敷いて乗り越えて、戸が流された自宅に入りました。中にも土砂が入り、冷蔵庫はひっくり返っていました。後ろの小屋が自宅に引っ掛かり、車庫も柱が折れて滅茶苦茶です。

まず、改善センターには何かあるだろうと考え、隣の家の人と高台を回って行ってみました。ちょうど朝食の準備中でしたが、小さな鍋で少量ずつご飯を炊いており、分けてもらうような状況ではありませんでした。ペットボトルの水があり、一本ずつ頂いて戻りました。

お腹も空いてきたところに、近所の無事だった人がおにぎりを作って来てくれました。その後は自力で何とかしようと思っていると、隣の小屋に置いていた古いカセットコンロが無事で、お湯を沸かせるようになりました。隣の家からカップラーメンを頂いたりして、少しずつ何とかしていきました。

しばらくは二階で生活することにして、炊事は外の屋根がある所で行いました。ひっくり返った冷蔵庫も、中に泥は入らず、味噌や冷凍していた食品など、ある程度は食べることができました。



道路とは思えないような周囲の状況（9月1日10時27分）

### 【二階での生活と片付け】

すぐに片付けも始め、まずは台所からものと泥を出してゆきました。一階にあるものはほとんど駄目になり、使えるものはテーブル

など一部です。夫は必死で、倒れてしまいそうで心配でした。台風の日々ごろに携帯電話が通じるようになったので、複数の知人に「こんな状態です。長靴など、こういうものが欲しいので買って来てもらえないかな」とお願いしました。

久慈から安家支所までの道路が開通して以降、知人の皆さんが手伝いに来てくれたほか、物資を背負って来てくれるようになりました。また、三日目には青森県に住む息子が食料を持って来てくれました。

また、約一週間後に一回、袋に詰めた支援物資を、私たちが在宅者も頂きました。センターに物資を受け取りに行ったのは、何度か湿布などを探しに行った程度です。ただ、二回目の台風が来た九月五日にはセンターに避難しました。

片付け作業は、近所の人や親せき、さらには約二週間後からボランティアの方々にも手伝っていただきました。最初は暑くて砂埃もひどい中、顔も洗えず、日焼けもしてしまう状況でした。

### 【ライフライン】

当初、水は近所の自家水道がある家で頂きました。近所の人が発電機を貸してくれて動

かせたようで、避難所や周辺の人たちがそこから水を頂きました。また、洗濯には近くの湧水も活用しました。

電気は十日程度で復旧し、自宅の井戸からも水を汲みあげられるようになったので、近所の人が水を汲みに来たりもしました。ただ、電柱が倒れた影響で隣の家の停電の復旧が遅れたので、コードを隣の家に伸ばして分け合いました。

トイレが使えないのには大変困りました。当初はセンターや近所に借りに行ったものの、数日後に夫に「もう無理、限界」と伝え、自分たちで穴を掘り、夫に板張りの簡易トイレを作ってもらいました。男性はどこでも良いかもしれませんが、女性は目隠しが必要です。

また、お風呂は東京の人が携帯電話で「温泉ホテルで風呂を無料開放しているってよ」と教えてくれたので、入りに行きました。その後には新山根温泉にも通いました。道路は悪いながら、高台を回ると車で出ることが出来ました。十一月ごろには寒くなりましたが、大工を仕事にしている夫が仮の扉を作るなどして風を防げるようになりました。家は年末までにはある程度きれいに片付け、風呂も入れるようになりました。



自然の猛威を感じさせられた貯木場周辺（9月1日10:32）

### 【保育園の状況・仕事の再開】

勤務先の保育園の状況は、九月一日に見に行きました。周辺はひどい状況でしたが、保育園の建物は無事でした。大工の夫は仕事を九月中旬から再開し、私は九月二十日ごろに再開しました。

保育園を早く開けて欲しいという声もありましたが、開けられる状況ではありませんでした。当時、園児は四人おり、うち二人の家族は温泉ホテルに避難していたので、小学校の再開と同時にスクールバスで通園すること

になりました。

園庭は泥が入ったので当初は使えませんでした。直せる遊具は直し、鉄棒など使えないものは撤去する運びとなりました。園庭の土砂は年度明けに撤去し、地区民運動会に間に合わせて復旧されました。（※平成三十年三月に閉園）

### 振り返って

#### 【想像できないほどの水害】

いま住んでいる場所は夫と同じ世代の人たちから住みはじめた場所でもっと昔からの家は一段高いところにあります。

平成十八年豪雨の時も、警察の人から「逃げる、逃げる」と言われて避難をしました。大したことはなかった記憶があります。道路を水が流れたものの、車で避難所まで行ける程度でしたし、家の近くに水がひたひたとまったり、場所によって道路がえぐられた程度の被害でした。今回は呼びかけではなく、ぴーちゃんねつとで避難の情報は知りましたが、十年前の経験もあり、ここまで大きな被害を想像できませんでした。

（平成二十九年八月十七日 聞き取り）

## 川のそばでの生活は夢に



日蔭

森子 芳和

(六十七歳)

### 当日の状況と対応

#### 【異常な雨音で危険を察知】

当日は日中から、自宅の一階にいても雨音が非常に大きく聞こえました。十四時ごろ、安家川を見ると、急速に水位が上がりがつありました。「これは普通じゃない」と感じはじめ、夕方には一階の荷物を二階に上げ、川の近くに止めていた車を上の方に移動させました。暗くなるころには床上に水が上がり、室内で長靴を履いたまま大事なものを避難させました。水深は長靴ギリギリの深さです。避難よりも、少しでも荷物を守ろうという気持ちでした。凄まじい雨と増水の勢いで、近所の人たちと相談も出来ず、時計を見る余裕もありませんでした。



台風直後、土台の下を水が流れ、大木が家に ※写真提供：森子芳和

#### 【近くの実家へ避難】

徐々に二階も危険を感じるようになり、近くの実家への避難を決めました。その時には自宅のすぐ上流側にある橋に流木が掛かってダム状になり、道路を車が流れている状況でした。妻と二人で外に出るとすっかり暗くなっていました。自宅前の道路は川のようになり、長靴が見えなくなる深さでした。道路は平らなので何とか歩けたものの、懐中電灯をつけても丸太や様々な障害物が足に当たりました。

#### 【下タさんを救助】

雨が小降りになったころ、近くの下タさんの家が流されたのに気付き、様子が気になりました。雨が止み、星が出て来た時点で水量は信じられないほど減りました。さらに雨が降り続けるなら、母も連れて山側に逃げる話もしていましたが、結果的には実家は床下浸水で済みました。

とは言えとても寝ていられず、外の様子を見に行くと、傾いた家の二階から電灯の光が見えました。こちらが電灯を振ると、相手も振り返ってくるので、誰かいるのが分かりました。家ごと流されて、止まったところで合図しているようです。

実家からハシゴを持ってこようと思ったところ、車庫が長靴以上の深さに浸水しており、ハシゴが出せません。そこで、近くの大工さんの家から五メートルのハシゴを借り、一緒にこちらから窓に渡して助け出しました。中にいたのは下タミヨシさんという女性で、一人で家にいたそうです。消防団に出動していた息子さんは道路が川になってしまい家に戻れなかったようです。そのまま実家に連れて行き、一晩泊まってもらいました。



## 翌日以降の状況

### 【被害状況・変わり果てた我が家】

少しばかり仮眠をし、夜が明けて自宅の様子を見ようと外に出た時に「すごい、こんなことが世の中にあるべか」とぼう然としました。信じられない光景でした。昨日まであった近所の家が何軒も流されてなくなっているのです。

自宅の二階は無事でしたが、一階は上流から流れてきた丸太に壁を突き破られて柱も折れ、やや傾いたひどい状況でした。中は一メートル五十センチまで水が上がったようです。一階の冷蔵庫やタンスは流され、見たことも無い他人の家財道具が流れ込んでいました。長靴の半分程度の深さまで強い臭いの泥がたまり、川の水も油や泥の臭いが感じられました。周囲の家も似たような状況でした。

### 【生活・ライフライン】

その後は自宅の二階や、近くの倉庫で煮炊きして暮らしました。生活改善センターの避難所に泊まったのは、直後に台風で避難指示が出た時だけで、早く自立したいという気持ちが強かったです。



台所の状況 ※写真提供：森子芳和

一番苦労したのは水の確保です。電気は発電機で確保できたものの、水道が止まり、井戸のある家にもらいに行きました。この家では発電機により井戸から水を汲みあげてくれました。一方で、川の汚い水で頭を洗ったこともありません。

数日後には、支援物資でペットボトルの水も頂けるようになりました。また、食べものは生活改善センターで支援物資のパンやカップラーメンを頂いて一時をしのぎ、その後は久慈方面へ買い出しに行きました。また、無

料開放された新山根温泉の風呂も利用しました。安家からそちらに避難した方もいたようです。安家は久慈とつながりが強いので、県道七号線の被害が少なかったのは幸いでした。自宅の固定電話は完全に不通になりましたが、実家のダイヤル式電話は停電でも使えたので使いに来る人もおり、災害時に役に立つと感じました。

約一週間後からボランティアの人が来てくんだり、家に流れ込んだ流木や大きなゴミの片付け、泥出しなどを手伝っていただきました。床下まできれいにするのは相当な時間がかかり大変でした。ボランティア団体の方々が近所の被災した産直の建物に事務所を置き、精力的に取り組んでくれました。三千人もの人が来てくれたようです。その後、年末には仮設住宅に入居することができました。

## その後・振り返り

### 【川のそばでの生活は夢に】

当日は二階なら大丈夫と考えた人が多かったようです。ただ、思い返せば対岸は過去にも何回か水浸しになりましたし、平成十八年にも自宅前まで水が来しました。

以前は川のそばでの生活が良いと思ってい

ましたが、今はそう思えなくなりました。暑い日の夕涼みなど、良いことも色々ありましたが、諦めるほかありません。



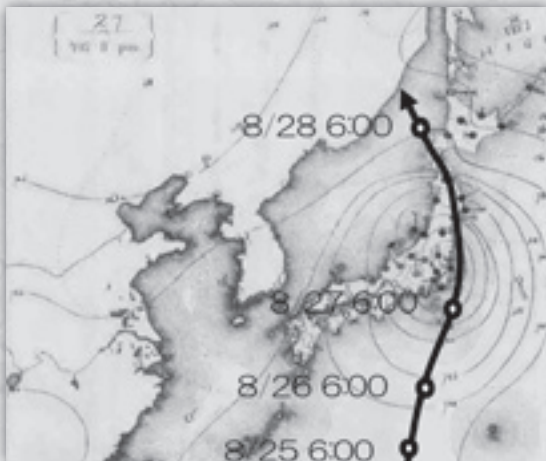
台風前の元村 ※写真提供：森子芳和

河川改修工事で立ち退きが決まりました。借金をして家を建てるなら、便利な場所に移ることも頭によぎりますが、この地から離れることは出来ません。今が安家の転機です。どの程度人が残り、これからどうなるのか、まだ先が見えていない気がしています。

(平成二十九年六月三十日 聞き取り)

コラム

災害を忘れない④ 大正2年に東北地方を直撃していた台風



大正2年8月27日14時の天気図

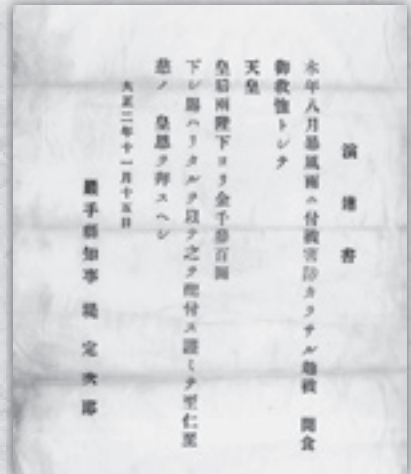
資料：天気図（原典：気象庁、加工：国立情報学研究所「デジタル台風」）に、「続・台風物語」（饒村曜，1993，日本気象協会）を参考とした台風位置情報を重ね合わせた。

現在の気象観測体制となる以前、大正2年(1913年)8月27日から28日にかけて日本列島へ接近し、東北地方太平洋側へ上陸していた台風がありました(饒村曜氏,1993)。関東から宮城・福島、岩手県内、下閉伊郡内でも大きな被害があったことが同年8月28日以降の「岩手日報」でも報じられています。9月11日の紙面では下閉伊郡の堤防17カ所が決壊・破損し、道路被害は県内でも特に多い467カ所が流失及び埋没・破損したとされます。

岩泉町中島地区においては、今回の台風10号で被災したお宅より当時の貴重な書類が見つかっています。「演達書」といわれるもので、天皇より見舞金を支給する旨が記載されたものです。限られた資料ですが、当時の岩泉町でも大きな被害があったことが伺われます。



大正2年8月29日 岩手日報紙面



演達書

## 自給の大切さを実感



川口

川口

肇はじめ

(八十一歳)

### 当日の状況

#### 【甥たち二人が自宅に避難】

当日は自宅で過ごしていました。確か十八時ごろに近所に住む甥っ子二人から「泊めてください」と電話が来たので、私の長男が急いで軽トラで迎えに行きました。一人ずつしか乗せられないため、まず兄を乗せてきましたが、弟は危険を感じたようで原付バイクに乗って来ました。間もなく水があふれて通れなくなっていました。

その後、弟は家の様子を気にして「行くな」と言っても出て行きました。県道沿いの傾斜地に広がる大豆畑では、道路沿いで水深一メートル五十センチほどの水があり、水を避けて畑を越えてゆくのが見えましたが「やめ



家の入口の坂の途中まで水が上がった (8月31日) ※写真提供：川口肇

ろ」と叫び、呼び戻しました。家のその付近から二キロメートルほど奥に山林を持っていますが、土砂や岩が県道まで流され行く手を塞いでいたので、とても行ける状態ではありませんでした。

薄暗くなってきた十八時半〜十九時ごろ、安家川を木が流れていました。根元の石などを抱いたまま流れているのか、高さ二十五〜三十メートルのサワグルミなどが立ったまま流されていました。近くの太いカラマツも、流れて来た瓦礫に押し倒されて流されま

した。後日、下流の年々橋に行くと、木が立ったまま引つかかっていました。

最も水量が増えたのは夜になってからです。家はやや高いので恐怖はなかったものの、裏山からの万が一の土砂崩れを警戒し、山から遠い部屋で休みました。ガードレールに木がガンガンぶつかるような音で、眠れませんでした。電灯を外を照らすと、かなりの水深があるようでした。

### 翌日以降の状況

#### 【被害状況】

翌朝、見ると自宅の裏も多少の水が流れたようですが、自宅の被害はありませんでした。しかし、前の県道は多くの流木が流れ込み、太い木が三本、自宅の入口の坂にも流れ込んでいました。付近のゴミ集積所は、番線ですらないので流されずに残っていました。

また、すぐ近所にも建物を所有しており、以前事務所として貸していましたが、そちらは床上浸水してしまいました。

さらに、付近の川沿いにも山林を持っていますが、植林して二十年以上になる杉やカラマツの木を、面積で約十アール以上、根っこ

ごと流されてしまいました。

## 【水は豊富でも食料が買えず】

私は水道組合に加入せず、石灰岩の間から湧く湧水を利用していました。しかし台風でパイプが壊れ、数日後に応急処置をするまで汲んで使いました。水量は大幅に増加しましたが濁りませんでした。

台所のガスも何とかあり、薪も流されず沢山残りしましたが、道路が寸断されて買いものに行けず、肝心の米が足りずに大変でした。昔であればヒエ・アワ・ムギなどを自給して穀物収納庫の「せいろ」にしまっており、「水バツタ」や「カラウス」などの道具で精白すれば食べることが出来ました。これなら雪などで一〜二週間、閉じ込められても、あまり食べものには困りません。しかし今は作るのを止めたので、米を買って来ないといけません。冬なら米を買って置きしていますが、夏は孤立を想定していませんでした。

さらに、電柱が軒並み倒れ、電気や固定・携帯電話も十日間使えず、安家地区内に住む親せきとの連絡手段、情報を得る手段がありませんでした。ただ、台風から三〜四日後に報道機関の方が新聞を持って来てくれて、見たことはありました。



床上浸水した建物の被災状況（8月31日） ※写真提供：川口肇

## 【久慈市への林道が開通】

十日ほど経ってから久慈市山根町へ通じる半城子線という林道が通れるようになりました。すでに廃道状態の道へ、森林管理署で砂利を敷いてくれて、何とか軽トラックや車高のある車であれば出られるようになりました。しかし、久慈市も台風で被害を受け、物資が不足していたようです。息子が買いたいものに行きましたが、米がなかなか見つからず、十キロの米一袋だけ購入出来ました。

徐々に支援物資を頂くようになり、水などを沢山頂きました。その後、岩泉の消防団の方が半城子線経由で米も持って来てくれました。一方で県道の開通には、その後さらに時間がかかりました。

床上浸水してしまった建物については、息子たちが畳を起こしました。二人で持っても大変な重さですが、三十二枚を廃棄することになりました。

また、停電が復旧した後も、応急復旧のため、電圧の関係でしばらくは節電を求められました。設備が整い、節電を終了したのは最近のことです。

## 【近隣の状況】

当初は移動もままならず、周囲の状況もあまり分かりませんでした。近隣でも水や土砂が入った家がありました。ただ、変な話ですが近隣は若い世代が町外に出て空き家が多かったのです、逆に人的被害の心配は少なかつたかもしれません。

私は行政連絡員を三十二年務めました、当初は十七戸あった家も、現在では六戸です。一人や二人暮らしの家が多く、私より少し若い人もいますが、以前と比べて協力し合うのが大変になりました。

## 振り返って

## 【平成十八年豪雨のあと】

かつての災害では、平成十八年の豪雨が記憶にあります。ちょうど私と妻は結婚五十周年で、町内のホテルで合同金婚式がありお祝いしてもらっていました。その時、すでに停電となっていました。



対岸の畑（植林地）のなぎ倒された木（9月1日） ※写真提供：川口肇

終了後、元村まで戻ると安家小学校の前に

警察と消防の人たちがおり、県道は通行止めと言われたので久慈市の親せき宅に行くことにしました。途中、久慈市山根町の県道沿いの「こうもり穴」から水が勢いよく出ており、勢いをつけて通過しました。久慈市中心部も鉄道のガード下が冠水して通行止めになっていました。

結局、帰宅したのは翌日の夕方で、その時点でも自宅より下流側の県道は通行止めが続いていました。自宅の近隣では道路に水が上がったようで、電柱も倒れました。また、かつては対岸の川岸で畑を耕していましたが、安家川に大型トラックのフレームをつないで橋を渡しており、それが流されてしまいました。

## 【曾祖父からの言い伝え】

曾祖父からの言い伝えでは、およそ百五十年前にも山津波（土石流）があったそうです。「山にいても油断されねえんだ」「海岸でなくとも、山にいたからって安心してられねえんだ」と話していました。

今回、山津波が発生した私の山には今、くぼ地が出来ています。その場所は土や木の葉がたまって森になっていましたが、今回、それが流れました。高さ二メートル以上、幅十

メートル以上にわたって崩れ、大きな岩の間から流れ出たのです。今はザラザラの固い山肌が露出しており、木も何も生えていません。こうした山津波は経験がなくて驚きましたが、言い伝えは聞いていたので「このことを言ったんだなあ」と思いました。

こうした話を若い人に話したこともありましたが、テレビや携帯で様々な情報を入手している人たちにとっては、「まあたこりや始まった」となってしまっているので、私も遠慮して話しません。

## 【自給の大切さ】

農家にとって味噌は一番大切だという言い伝えもあります。味噌さえあれば、山菜のウライなど、自然のものを食べることも出来ますから。ヒエなどを作るのを止めてからは十年以上経つと思いますが、今でも多少の大豆や野菜、そして味噌は作っています。災害に備えての蓄えがあった方が良くと思います。私は戦時中から終戦後を見てきたので、いまの世界情勢を心配しています。今は各国と貿易していますが、災害で改めて自給自足や農業の大切さも実感しています。

（平成二十九年八月二十日 聞き取り）

## 協力して水道・道路復旧



かみうげい  
上有芸

佐々木精一

(六十六歳)

### 当日の状況

#### 【夕方から一気に水が出て来た】

私は郵便局の集配請負の仕事をしており、当日は十三時半ごろに帰宅しました。日中の雨は驚くほどではなく、通常どおり配達も出来ましたが、川の水量はかなり増えていました。夕方になると一気に水が出てきました。隣の家の人は「などすっぺ」（どうしようか）と言っていました。「なに、はあこういう状況だから、どこさも行かれねえから、動かないでそのまま家にいろ」と伝えました。避難所は有芸生活改善センターですが、すでに川がダムを放水したような状態で橋の上も流れており、下手に避難して事故に遭っては元も子もありません。家も若干、高台なので大丈夫

夫と考えました。

災害になる前に避難の話題が出なかったわけではありません。寝たきりのお婆さんがいる家では、車椅子を借りて二晩ほど改善センターに避難した例もありました。一方で、水が出てきてから危険を感じ、避難しようとした人もいましたが、橋を越えられずに戻ってきたそうです。自宅がもし安全となれば、そこにいるのが一番良かったように思います。

### 翌日以降の状況と対応

#### 【道路が各所で寸断】

夜が明けて、自宅には被害はありませんでした。一方で、近所の川沿いの家では、川から道路にあふれた水も流れ込み、床上浸水の被害を受けました。床もブヨブヨですし、車も二台壊れてしまい、その後、その家の人は引越しました。

道路が各所で寸断されていました。岩泉方面は乙茂橋で決壊しましたし、そこまでの間も、当初は車で行けない状態だったので、郵便配達も一週間ほど出来なくなりました。

まずは近くの橋の上に残った流木をトラクターや、チェーンソーで避けないと通れない状態でした。



除雪用ローダによる土砂除けが行われた（9月1日）

※写真提供：佐々木精一

#### 【民生委員として巡回】

民生委員を務めているので、その後は地域を巡回して状況を把握しようと思いました。軽トラックで行くと途中で一回パンクして「ありゃーヤバイ」と出直しました。有芸支所から県道を下って下有芸バス停の手前でも、沢が「ダッー」と出てきて、車が通れません。たまたま道路を舗装する業者の人たちがおり、バックホーもあったので、その人た

ちが土砂の除去を始めました。あとは除雪用のローダーがあり運転手もいたので、片付けてもらいました。

見て歩いて、唾然としてしまいました。普段は水が本当にチョロチョロとしか出ていない所から、水が激しく流れていました。まさか小さな沢から、これだけの土石流が流れ出し、道路や橋などを壊すとは思いませんでした。橋が高いところはまだ良いのですが、低いところは水が橋を越えたほか、流木も引っ掛かるので余計にひどいです。途中、地域の方々は「死ぬかと思った」「こりゃ、大変なことになった」と話していました。

その後、九月一日ごろには下流の猿沢にも私が郵便配達をしている家があり、様子を見に行きました。その家の町外の親せきも様子を見に行こうとしたようですが、土石流で来られず帰ったそうです。その後に、私がその家に行くと、「連絡したくても電話も通じないし、どうしようか」ということで、その場で携帯電話を貸して話してもらいました。「配達さんがいに来て、電話貸してくれた」「元気だからねー」って。

こういう様子を見れば、行って良かったと思います。町中心部からの安否確認などは、もう自分たちも大変な状況でしょうから、来られないと思っていました。特に一人暮らし

や高齢者の家は気になり、巡回しました。暑中でしたが、皆さんの元気な顔を見れば、それが一番の薬のようなものでした。



道路のヒューム管がむき出しに、農家に車が入りできず  
(9月2日) ※写真提供：佐々木精一

るようになりました。地下水を電気ですみ上げていましたが、停電になっても、自家発電で汲み上げることができました。

さらに一日の午後からは、道路が寸断されていた水堀方面を中心に土方作業に行きました。畜産農家のために餌を届けるトラックなどを至急通れるようにする必要がありましたが、また、電気も通す必要がありましたが、道路が出来ないと作業車が行けないということでした。

復旧作業の応援はその時点では来られないとのことで、水堀までの道路はほぼ地域住民で応急措置をしました。これは一番重要かつ大変な作業でもありました。

メンバーは、林業に携わっておりバックホーを使い慣れている人や、運送会社で働いている人、さらに大型ダンプの運転手など、様々な技術を持った人たちがいるので、協力し合いました。

たまたま水堀にバックホーがあり、それを借りたほか、各農家の二トンドンプ車を借りてきました。まず土を持って来て、壊れた道路に上の方から敷いて、二日半ほどかけて、かろうじて水堀へ車が通れるようになりました。次に、雨が降った時のために、ダンプ四台で猿沢から砂利を持って来て、土の上に敷きました。さらに、有芸の真砂土も使いまし

## 【協力しての水道工事・道路工事】

あわせて三十一日からは近所の人たちに声をかけて水道・土木工事を行いました。まずは水が無いと大変なので、九月一日の午前中までは主に断水となった町水道の掃除です。人数は四人で、中学生も一人参加して水が出

た。

有芸支所周辺で電気が復旧しても、水堀は全然点きません。電力関係の人たちが「三日のうち何とか電気を通すために、いま工事車両が行きたい」とのことでした。なので、メンバーには十九時近くまで頑張ってもらいました。人数は八人、多い時は十数人で協力しました。結局、それをやらなければ自分たちが困るような状態でもありません。

応急措置が終わるまでも、たくさんの家畜がいるので、餌を紙袋に詰めたものを車が行ける所まで積んで来て、その先道路が壊れた区間の約二〇〇メートルは人力で担ぎ、また軽トラックに積んで農家に届けるという作業もありました。

## 【知っている人同士だからこそ】

一連の作業に私も参加したり、時には指揮をしたりしました。皆知っている人たちなので声をかけました。もちろん、それぞれが大変な状況なのですが、技術を持った人たちがまとまることで、様々なことが出来ます。普段から声を掛けあっている地域なので、困っている人を見て見ぬふりは出来ません。やはり、人ごとではなく自分のことと思って、みんな取り組んだからこそ、簡単にまとまるこ

とが出来たのではないかと思います。

「おらあ(驚き)また今日もか」「こえーなー」(疲れたな)と言う声も出ましたが、途中で止める訳にもいきません。

作業中、けが人が出ると大変です。稼ぐ時に「けがしないように頑張ってくれ」と、土方仕事の親方が言うようなことを言っているから始めていました。何とか、うまく出来上がって良かったです。



道路復旧工事中 (9月4日) ※写真提供: 佐々木精一

様々な現場を見るにつれて一層、被害の大

きさが分かってきました。水堀ではあふれた沢水が大量に簡易牛舎へ入ったところもありました。水堀や松屋敷では家の近くや庭に大量の土砂が流れ込んだ家もあり、私も行ってトラクターで、除去したりしました。また、道路の下に沢水を流すヒューム管が入っていたような場所では、上を水が流れて道路が破壊された場所もあり、バックホーで仮設の道路を作る作業もありました。

## 【生活の状況】

断水により水が無い家は大変でしたが、沢水を使える家や、手押しポンプ井戸を持っている人はまだ良かったと思います。きれいな水の確保は重要です。台風後、私も一回、水をもらいに行きました。ちなみにその時に焼酎の空きボトルは役立ちます。震災の時もそうでした。

救援物資は来たものの、なかなか回りませんでした。水堀にもヘリコプターで物資が届きました。

電話に関しては、九月一日ごろには電源車が来て、携帯電話の中継塔がある毛無森に送電されたので、震災の時とは違い、携帯電話は使うことができました。

あとは、透析を受けている人が透析に行け



## 【仕事の再開】

私が郵便配達の仕事を開き直せたのは、台



乙茂橋通行可能に（9月5日）※写真提供：佐々木精一

ずに体調が悪化し、ドクターヘリで有芸小学校から病院に搬送されたこともありました。それと、保健師の人が偶然にも有芸にいたのは助かりました。非常時には待っていてもらうしようにありません。今後は自分たちで自分たちを守ることをより一層考えなくてはなりません。

風から約一週間後でした。乙茂橋は開通したものの、乙茂から岩泉方面の国道がまだ通行止めのため、田野畑村・室場・龍泉洞を經由して大回りで普段の倍の時間をかけて岩泉郵便局に行きました。郵便物を受け取り、またグルーッと戻って来て、というそのルートを一日二回通る必要がありました。

郵便配達でも、声をかけながら廻っています。その中にはけがをした人もいなかったのですが、それが一番良かったです。

## 振り返って

## 【過去の災害と今後の課題】

過去にもアイオン台風や様々な災害がありました。今回の台風は比べものになりません。教訓として、やはり指定避難所のほかにも安全に避難できる場所やヘリの着陸できる場所をあらためて考えて行く必要があると感じました。有芸の場合、肘葛だと生涯学習センターが避難所ですが、人によってはそこへ行く橋が洪水時に最も危険な場所です。そして、山津波の脅威を知ると、家を建てる場所もどこでも良いとは言えないように思います。

（平成三十年八月八日 聞き取り）

## コラム

## インターネットで川の水位を確認する

インターネット上では岩泉町内の河川の水位情報や上流部の雨量計のデータが提供されており、大雨などの際に活用出来ます。

（※いわゆるガラケーには非対応のサービスあり）

1. **岩手県 河川情報システム** **検索** <http://kasen.pref.iwate.jp/>

水位計：小本川（穴沢・赤鹿）と安家川（日蔭）

雨量計：岩泉地区【岩泉（中家）・小本（中島長内）・山岸（門）・種倉（釜津田）・鈴峠（安家大坂本）】  
宮古地区【サクダガ森（岩泉町上外山 宮古市境）・峠ノ神山（宮古市和井内 岩泉町境付近）】  
久慈地区【野辺山（田野畑村長根 岩泉町境）】

2. **川の水位情報** **検索** <https://k.river.go.jp/>

通常の水位計：小本川（赤鹿）

危機管理型水位計：小本川【乙茂（ふれあい橋）】、大川【釜津田（唐地橋・館1号橋）】、清水川【岩泉（神成橋）】、長内川【小本（新長内橋）】

※危機管理型水位計は水位上昇時に2～10分間隔で観測するものです。

※このコラムの内容は令和元年6月24日現在の情報です。

サービス内容は変更となる可能性があります。



川の水位情報  
画像イメージ

## 言い伝えは本当だった



栃の木

工藤 幸雄

(六十六歳)

### 当日の状況

#### 【川から石が流れる音】

当日は家族と自宅で過ごしていました。母はデイサービスへ、息子は消防で一日中巡回をしていました。消防の人たちは巡回しながら声掛けをしており、三人ほど、松屋敷などの大雨で危なそうな家の人を説得して栃の木皆の川ふれあいセンターに連れてきたりしていました。

朝から結構な雨が降ったので、いつもと違うように感じました。午後はさらに雨が強まり、カップを着て自宅の周りの水切りをはじめました。その後、松屋敷川から石が流れる音が「グルグルグルグル」と聞こえてくるようになりました。

夕方ごろ、沢水が流れるヒューム管が詰まり、家の周辺が水だらけになってしまいました。水を流すU字溝からも水があふれていて、蓋を取って水の道をいくらかでも作ろうと思いました。すでに暗くなっており、妻に電灯を持ってもらい、私はカナヅチを持って蓋を取っていました。家は浸水しなかったものの、どんだん水が来るので心配でした。



普段は穏やかな川が暴れた（後日撮影）

#### 【川があふれた】

そのうちに、川が少し上流のカーブからあ

ふれたようで、水が農地から牛舎に流れ込みました。「あーロール流れるぞー」と妻に言われて、気が付きました。あっという間に周りが海のように驚きました。百個ほど積んでいた牛の餌の牧草ロールが浮いて、かなりの数が川に流されてしまいました。牛舎は長さ四十メートル以上あるかと思いますが、一面が水に覆われてしまいました。

当時、牛舎におよそ三十頭の黒毛和牛がいました。牛も驚いたと思いますが、暴れはしませんでした。水深は二十センチほどだったので、牛はかえって涼しくて気持ち良かったかもしれません。

とは言え、牛舎に泥水を入れたくなかったので、土のう代わりに牧草ロールをトラックターで牛舎に押し付けました。しかし、妻に「やめろーやめろ」と言われました。宮古に住む娘からも電話で「危ないので止めさせろ」と話があったようです。暗い中、どこに穴があるのかわからない状態でしたから、考えれば危険でしたが、その時は「これでもっと水が増えたらどうすっぺ」と真剣でした。ただ、結局牧草ロールは軽くて流れてしまうので、あまり上手くは行きませんでした。

そのうちに雨も止み、二十時ごろには星空となり、すぐに水も引いたので安心しました。夜のうちに牛舎の泥と水をかくと、牛は寝て

しまいました。自宅は停電でしたが、発電機を持ってるので大丈夫でした。我が家には孫が六人おり、停電になると騒ぐので普段から備えています。

ここまで水が来るとは朝の時点では頭になく、避難は全く考えませんでした。自宅は私の祖父が二歳の時に建てたという築百年以上の古いものですが、水が多少来ても大丈夫だろうと思っていました。一方で牛舎は少し低い所にあるため危険を感じました。対応している最中に他の家からも応援要請がありましたが、手伝いたくても動けないような状況でした。

ちなみに、センターに避難していた人たちは、夜は泊まらずに自宅に帰りました。

## 翌日以降の状況

### 【被害状況とその後】

翌朝、周囲を見て「こんなところからも水が来たんだな」と驚きました。まずは庭に開いていた穴を埋める作業のほか、流されずに残った牧草ロールを元の位置に積み直したものの、半分程度は傷ついていました。約二十〜三十個のロールが流されてしまいました。その後、農協や役場から、支援物資として牧

草も頂いたりしたので間に合いました。



上有芸長者 県道路肩崩壊 (9月15日10:24)

畑や田んぼには草も生えないほど大量の砂が残ってしまいました。そこはそのままにすることにしました。困ったのは、ある程度予想はしていたものの牧草地に行く作業道が壊れてしまったことです。水が流れ、えぐれてしまいました。農作業道は補助対象にならないとのこと、自己負担でウンボを借りて、知人に復旧作業を依頼しました。秋には牧草の刈り取りが出来るようになりました。

また、台風前に牛の尿を液体肥料として牧

草地に散布して、タンクが空になったところに水が大量に入ってしまった。そこに日々、尿が入るとあふれてしまいます。牧草地に散布するにも道路が当初は壊れていましたし最も困りました。

そのほか小屋が浸水し、いくつかの機械が泥を少しづつかぶってしまった。掃除して乾燥させ、コンプレッサーで泥を払うと、いくつかは使えるようになったものの、駄目になったものもあります。

その後、落ち着いてから少し周囲を廻ってみると、周辺は大きな被害はなかったので、安心しました。いまテレビを見ると、信じられないような災害が他の地域で起きており、家族も牛も無事だった私たちはまだ良い方だと思います。

### 【ライフラインと生活】

集落の水道は電気が無くても、自然に動く仕組みになっていた。断水にはなりません。また、牛に飲ませる水も山水なので電気は要りません。年中、向かいの沢から流しっぱなしです。ほかには、電気が切れればダメですが地下水もあります。水源が三つ、四つあれば安心だと思います。

停電の復旧は確か九月二日ごろでした。我

が家ではボイラーを使っていますが、仔牛に脱脂粉乳を溶かして与える時にお湯が必要な程度で、飼育においては停電による大きな影響はありませんでした。乳牛を飼っている家では搾乳で電気が無いといけなかったので大変だったと思います。

ちなみに、デイサービスに行っていた母は帰宅出来なくなりました。ヘリコプターで盛岡赤十字病院など内陸の病院に搬送されてしばらく過ごしました。



皆の川 災害復旧工事（後日撮影）

## 振り返って

### 【祖父の言い伝え】

このような大雨は、私が経験したなかでは初めてです。以前に祖父から昔の大雨の言い伝えを聞いたことがあります。嘘ではなかったと実感しました。いま、牛舎を建ててから二十年以上は経ったと思います。もともとその場所は家より低い水田でしたが、建てる前に祖父が「昔は大川（松屋敷川）がこっちや流れて来たことがあるって言うぞ」と聞いたので少し盛り土した上に建てました。

その時には、自宅周辺でも山や土手がかなり崩れ、皆の川で人が橋から落ちて亡くなり、中倉で家が流されたのだそうです。祖父は明治生まれですが、本人の経験というより聞いた話とのことでした。歳をとった人の話すことは聞いておくべきだと思います。

また、アイオン台風の時にやはり川が氾濫し、土手も削ったとのことでした。なので「川の真ん中に木を生やしておくな」と聞いていたのを覚えています。

（平成三十年八月八日 聞き取り）

## コラム

### インターネットで川の洪水危険度などを確認する

インターネット上では岩泉町内の河川の各河川や沢の洪水危険度情報が提供されており、大雨などの際に活用出来ます。（※以下のサービスはいわゆるガラケーには非対応）

1. **気象庁 洪水危険度分布** **検索** <https://www.jma.go.jp/>

確認できる情報：各河川や沢の「洪水危険度分布」、土砂災害の危険度分布、雨雲の動きなど

2. **NHK ニュース・防災アプリ** **検索** （スマートフォン専用）

スマートフォンのアプリストアより無料でダウンロードできるアプリです。

「マップ」機能から上記の情報と小本川赤鹿の水位情報を確認できるほか、土砂災害警戒情報や記録的短時間大雨情報、避難情報を通知してくれる機能もあります。

同様の機能を持つアプリはほかにも提供されています。

※このコラムの内容は令和元年6月24日現在の情報です。サービス内容は変更となる可能性があります。



NHK ニュース・防災アプリ  
使用イメージ

## 影形も無くなった風呂場

肘葛 ひじくす

佐々木 宏

(七十六歳)

## 当日の状況

## 【大事なものを物置から避難】

当日は家の中から、外を見たりしていません。九時か十時ごろ、消防団が避難の呼びかけの見回りで通ったように思います。その時点では、「大したことは無いんじゃないかな」と思いつつも、川沿いにある物置からチェーンソーや刈り払い機など、大事なもののや持ちやすいものを避難させたりしていました。

しかし、昼ごろの雨の降り方から「何だかこれは大変だ」と思い、普段は庭に置いている車を山の方に乗り上げるような形で移動させました。最も雨が激しかったのは十三時ごろではないかと思えます。最初は川も大したことがなかったのですが、夕方には水位もか

なり上がり、両手で抱えるほどの川の石が転がるような「ガツンガツン」というすごい音がはじめ、異様に感じました。



この橋を水が越えていた（後日撮影）

## 【水は一気に押し寄せてきた】

ただ、二階に上がってあれば大丈夫だと思っていました。見ているうちに、川の水があふれ、あれよあれよと外にある物置や風呂場、さらに自販機が流れてしまいました。そ

れを見ていた川の向かいに住む人たちは「いやいやいや、ひでえな」と声を出していました。物置から普段使うものを避難させていて助かりました。

十七時半過ぎには、自宅にも水が押し寄せて来ました。中には妻と二人いて、妻は二階に上がり、私は一階で様子を見ていました。そのうちサッシに上流から流れて来たものが当たるようになり、内側から見ていると、ガスボンベも浮かんで、「ガツンガツン」と家に当たりました。

玄関のすき間から、土間にも水が入ってきて靴が浮かんた時には、ガラスが壊れて床上まで水が入るのではないかと覚悟しました。ただ二階や、家がダメなら畑の方に高いところもあるので、怖いということはありませんでした。

もっと早く、ここまでひどくなると分かっていたら避難していたかというと、それは分かりません。川向いの生涯学習センターが地区の避難場所ですが、そのころには、途中の橋を水が「ザブーンザブーン」と越えていたので、とても危険で行けない状況でした。

女房には「どこだりさいくなく」（あまり動くな）と言いました。そのうちに水が引いて、結局は床下浸水で済みました。一気にスーッと水位が上がリ、十、十五分の内に

ダートと下がる状態でした。これがあと三十分、一時間も続いていたらどうなったか分かりません。

## 【被害状況】

水は明るいうちにはだいぶ下がりました。まだ、雨は降っていましたが、小降りになりました。水が引くと、家の前の道路が壊されておろり、車は無事でも出せない状態になっていました。土や砂利が流れ、大きい石だけ残った状態です。周囲には、根付きの木やシタケのほだ木、薪など様々なものが流れ着き、残っていました。

一方で、道路は壊れてしまいました。もし家の前に護岸工事をして、川が頑丈だった場合はもっと水があふれて床上浸水になったように思われます。また、根ごと流れて来た木が、近くに植えてある木に引っかかっており、それらはある程度、被害を食い止めたかもしれません。

近隣の町道の橋は、流されることはなく、詰まってダムのようなこともありませんでした。一方で、家の目の前に台風直前に架けたばかりの橋が、流されてしまいました。長さは約四メートルで、対岸の家々とお互いに行き来していました。せつかくお金をかけ

たのに、もったいなかったです。

近隣の家は高いところにあるので、避難の動きも無かったようです。水が引くと、暗くなったので多少、不安な気持ちもありつつ二階で寝ることにしました。



この木々に流木が掛かっていた  
(後日撮影)

## 翌日以降の状況

### 【片付け・復旧】

風呂と物置、橋、自動販売機などが流されてしまったのはショックでした。風呂も自動販売機も、影形もなくなり、どこまで行ったか分かりません。物置に残したまま流された道具たちも、「いやーあれも流された。これも流された」と思うと悔しくなります。あらかじめ全部、物置から動かせばよかったと後

悔しかったです。買い直せば高いですが、もう働けないので買いません。

一方、自宅にはあまり泥は入りませんでした。床下の泥出しは、三十一日に近所の人が手伝ってくれて、水を汲んで中を洗ってもらう程度で済みました。

壊れた道路については当時、有芸支所の宿直の仕事をしており、困るだろうということとで九月一日あたりにバックホーを持っている近所の人に来てくれました。そして、道路を軽トラックで出られる程度に直してくれたので、外に出て行けるようになりました。

ただ、停電ですし、水道も断水になっていました。水道は町水道ではなく地下水を使っていたのですが、井戸が埋まり壊れてしまいました。バックホーを借りて掘ることにして、さらに水道は無料で直して頂きました。直るまでは、とりあえず沢水を使用していました。

停電している時は固定電話、携帯電話ともに使えず、宮古市田老の境まで行けば何とか携帯が通じるような状態でした。

三〜四日後には役場から安否確認や、被災証明を出すための被害の検査ということで人が来ました。

数日で車さえあれば、何とか小さい車は田老経由で宮古に出て行ける道路状況となったため、買いものや食べものには、それほど困

りませんでした。多少は自宅で食べられる程度の野菜は作っていましたし、畑には土砂も入らず、大丈夫でした。



宮古市田老へ風呂に通った（後日撮影）

最も困ったのは、風呂が流されてしまったことです。近所の方から「入って」と声をかけてもらいましたが、二三日ではなさそうだったので、グリーンピア三陸みやこに行きました。最初のころはお金を払いましたが、そのうち岩泉の人たちが、災害支援により無

料で入れると教えてくれました。正月ごろまでは無料で、さらにその後もお世話になりました。広範囲の被害により大工さんも忙しく、風呂が復旧したのは一年後のことでした。ちなみに家の前の木にたまった流木は、秋になって妻と一緒に片づけました。私も台風後は各地を見てまわりましたが、他の地域を見ると「おらの方は大したことない」という気持ちにもなりました。

## 振り返って

### 【過去の災害】

私の生まれは有芸のこの場所です。以前にも大雨はありましたが、このような被害は初めてです。私が覚えている水害は三回ほどあり、物置が被害を受けたほか、庭に大きなブナの木が流されてきたような記憶があります。これではダメだと言って、盛り土して高く自宅を建てたために、今回はこの程度の被害で済みました。今回は水の高さは一番でしたが、確か昭和二十三年のアイオン台風の時もひどかったはずで、水が引いたあとに魚がたくさん流れ着いていた記憶があります。

（平成三十年八月八日 聞き取り）

## コラム

### 台風10号・道路全面通行止めの解除時期

8月30日夜の時点では、ほぼ全町において移動困難な状況にありました。翌朝、8月31日8:30の時点で、岩泉町中心部から外部へ安全に通行できる唯一の道路は「グリーンロード」経由で田野畑村に至るルートでした。

その後は徐々に道路の復旧が進みましたが、特に小本川沿い（国道455号線二升石・乙茂）や安家川沿いの県道で道路の損傷が激しく、懸命の復旧活動が行われました。一方で、先述のグリーンロードのように、峠筋の道路は場所にもよりますが早期に通れるようになった場所も複数あり、各地区への早期の支援活動に活かされることとなりました。

解除日	時刻	路線名	区間	解除日	時刻	路線名	区間
8月31日	11:00	県道7号	江川～根玉	9月2日	12:00	国道340号	大渡～落合
8月31日	13:00	県道7号	大月峠（久慈市境）～尻高	9月4日	6:00	県道171号	長田～大渡
9月1日	9:00	国道340号	国境峠（葛巻町境）～落合	9月5日	12:00	県道40号	猿沢トンネル～乙茂
9月1日	16:00	県道7号	久慈市大川目～久慈市下戸鎖	9月8日	17:00	国道455号	乙茂
9月1日	17:30	国道455号	権現～門	9月12日	17:00	国道455号	落合～二升石
9月1日	19:30	県道171号	松草峠（宮古市境）～宮古市松草	9月12日	17:00	国道340号	押角～大渡
9月2日	6:00	県道177号	栃の木～肘葛、末前峠（宮古市境）～宮古市末前	9月23日	15:00	県道202号	坂本～元村
9月2日	6:00	県道40号	下有芸	9月30日	12:00	県道173号	横道～沢中
				10月5日ごろ	-	県道202号	元村～茂井

町関係の県道・国道の全面通行止め解除時期と区間（抜粋）

※解除後も大型車規制や片側交互通行が続きました。資料：いわて防災情報ポータル (<https://iwate.secure.force.com/>)

# 台風10号

## 資料集



当初、岩泉地区に入れる道路はグリーンロードのみだった（8月31日13:00）



## 資料 1. 時系列でみる関係機関の対応状況（抜粋）

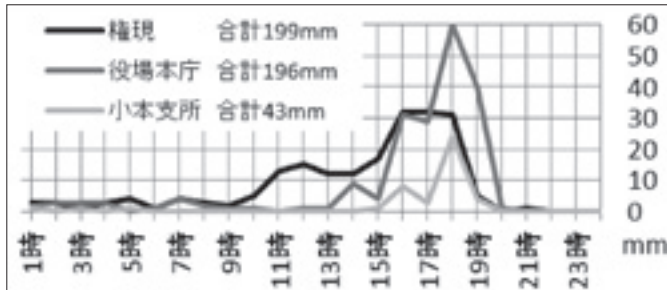
日付	時刻	区分	詳細
8/29	13:00	町	災害警戒本部を設置
8/30	5:19	気象台	大雨（土砂災害）・暴風警報発令
〃	9:00	町	全域（4,587世帯・9,947人）へ避難準備情報発令、消防団に警戒通知、避難所6カ所設置
〃	10:16	気象台	大雨（浸水害）・洪水・高潮警報発令
〃	11:34	町消防団	各消防団が警戒・啓発活動を開始（本団及び8個分団288人出動）
〃	12:37	気象台	土砂災害警報情報発令
〃	14:00	町	災害対策本部の設置、安家（日向、日蔭）133世帯・271人に避難勧告発令
〃	14:32	災害	岩泉字大館 暴風で民家屋根剥離（14:47岩泉で最大瞬間風速25.7m/s（北北東））
〃	16:47	気象台	「50年に一度に相当する記録的な大雨、引き続き 심각한 警戒を願う」と町へ電話
〃	17:20	県	「小本川赤鹿にて氾濫注意水位を超過、今後も上昇見込みのため注意を」と町へ電話
〃	17:30	災害	乙茂地区で浸水始まる（内閣府調査）、18:08乙茂地区国道も浸水
〃	19:57	支援要請	町が県へ自衛隊災害派遣を要請（21時 県が自衛隊へ要請）
〃	20:00	消防署	岩泉橋不通により岩泉消防署出動不能（翌5時ごろまで）
〃	20:25	災害	役場庁舎停電、町全域が停電・孤立状態
8/31	—	関係機関	救助・救出・安否確認などの開始（自衛隊、警察隊、消防隊、国土交通省、D-MAT指定機関、岩手県、9/1～海上保安庁など）
〃	—	支援要請	岩泉町が県に物資を要請
9/1	18:00	電気	停電継続 計9,050戸
〃	—	電気	停電復旧（岩泉中心部、小川支所）、国土交通省による電源供給（安家支所、有芸支所、中里など）
9/2	6:00	水道	断水継続 7,026人が断水状態
〃	—	物資	各指定避難所などへ物資の輸送開始（町が陸送、自衛隊が空輸）
〃	—	入浴	入浴施設の無料開放（町内、田野畑村、普代村などのホテル（後日宮古市、久慈市、葛巻町の施設でも））
〃	—	電気	停電復旧（小川・小本・有芸のそれぞれ一部）、国土交通省による電源供給（サンパワーおおかわ）
9/3	—	支援要請	町が県・自衛隊に孤立地区への物資の輸送要請（自衛隊が空輸・陸送）
〃	16:00	入浴	自衛隊が中里公民館にて入浴支援を開始（9月7日まで）
〃	—	電気	停電復旧（安家（9/2深夜～）・大川のそれぞれ一部）
9/4	7:00	炊き出し	自衛隊が門小学校（12日まで）・小本津波防災センター（16日まで）で給食支援を開始
〃	9:00	台風12号	町全域避難指示、自衛隊などのヘリで住民避難（4日153名、5日3名）
〃	16:00	入浴	自衛隊が門小学校で入浴支援を開始
9/5	15:00	台風12号	台風12号に伴う避難指示解除
9/8	15:00	低気圧	台風13号から変わった温帯低気圧に伴う町全域避難勧告
〃	17:45	低気圧	上記に伴う避難指示（安家、岩泉、小本などの440世帯・940人）
9/9	7:00	低気圧	避難勧告解除（4:30に一部避難指示解除）
9/15	9:40	撤収要請	自衛隊撤収要請（16日21時撤収）
10/1	—	町	罹災証明書発行開始
10/11	9:00	町	岩泉町災害対策本部廃止、平成28年台風第10号豪雨災害復旧・復興推進本部設置

◆資料：岩泉町資料、いわて防災情報ポータル Web サイト（<https://iwate.secure.force.com/>）

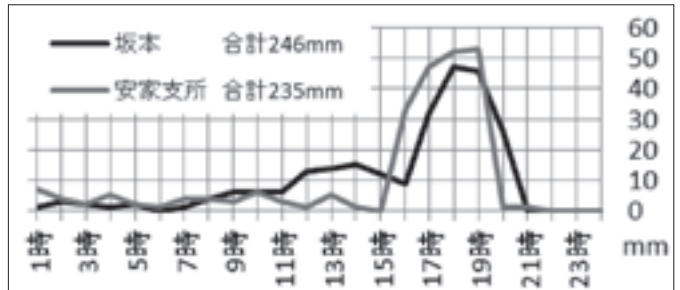
# 資料 2. 気象・水位データからみる当日（8月30日）の状況

## 1. 雨量計（町設置）データ

上流部の権現、坂本などでは午前中から雨量が増加しましたが、役場本庁、安家支所などでは降ったり止んだりしながら午後から急激に雨量が増加しました。一方で下流部の小本支所では午後から雨がやや強まったものの、上中流域と比べて少ない総雨量に留まりました。



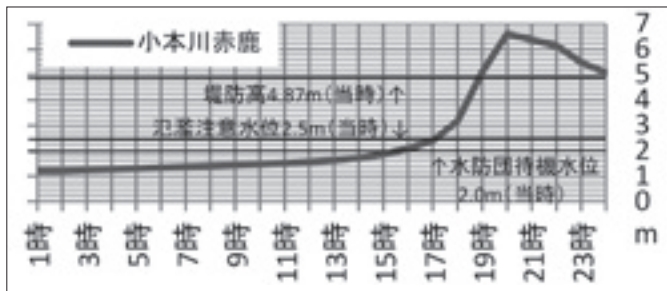
小本川水系沿いの雨量計データ



安家川水系沿いの雨量計データ

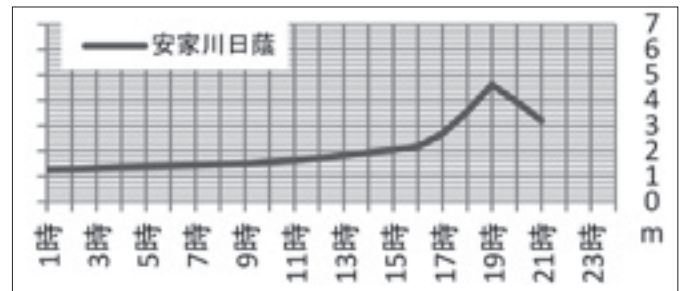
## 2. 河川水位計データ

小本川・安家川ともに当日午前中から徐々に水位が上昇しました。小本川赤鹿では15時50分に2.00 mと水防団待機水位を越え、17時20分に2.50 mと氾濫注意水位を越えました。その後1時間あたりの水位が最も増えたのは18~19時の間で1.93 m上昇し、さらに20時には最大水位6.61 mを観測しました。一方で安家川日蔭では13時に1.82 mと危険な水位となり、その後1時間あたりの水位が最も増えたのは18~19時の間で1.06 m上昇し、19時に最大水位4.61 mを観測しました。



小本川赤鹿の水位計データ

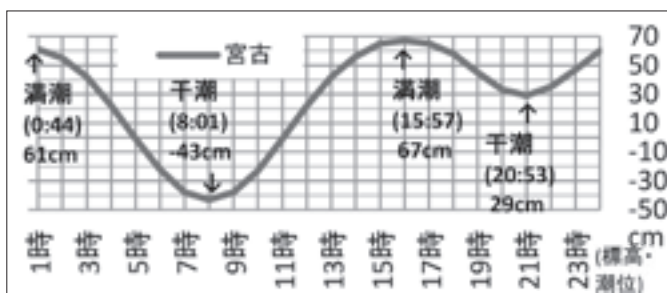
※氾濫注意水位・水防団待機水位等の基準は現在に変更となっています。



安家川日蔭の水位計データ（22時以降欠測）

## 3. 潮位観測データ（宮古）

当日、宮古の潮位は8:01の干潮時潮位は標高-43 cmまで下がったものの、20:53の干潮時潮位は29 cmとあまり下がりがありませんでした。これは台風接近による高潮によるものです。ちょうど小本川の水位も非常に高かった時間帯であり、河川の逆流にも影響したと考えられます。



宮古の毎時潮位データ（標高表示）



荒れる太平洋に流れ込む小本川（8月31日13:28）

（資料：気象庁 Web サイト（<https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/db/tide/genbo/genbo.php>）

# 資料 3. 被害状況

## 1. 岩泉町における人的被害（平成 31 年 3 月 31 日現在）

岩泉町では今回の台風で 25 人の方が亡くなり（関連死 4 人を含む）、1 人が重傷、4 人が軽傷の被害を受けました。  
 【参考】東日本大震災における死亡者 13 人（うち被害場所小本：4 人、関連死：3 人）

## 2. 岩泉町における住宅被害（平成 30 年 3 月 27 日現在）

区分	全壊	大規模半壊	半壊	半壊に至らない	合計
住家	453	236	255	41	985
非住家	536	298	73	24	931

【参考】東日本大震災における住家被害 208 棟

## 3. 指定避難所等への避難者数

岩泉町内には 6 カ所の指定避難所のほか、9 月 4 日より龍泉洞温泉ホテルに臨時指定避難所が設けられました。また、各地区の集会施設や学校、そのほか田野畑村の協力によりアズビィホールへの避難の動きもありました。

日付	時刻	町内合計	岩泉町民会館	小川生活改善センター	サンパワーおおかわ	小本津波防災センター	安家生活改善センター	有芸生活改善センター	龍泉洞温泉ホテル	時刻	田野畑村アズビィホール
8/30	18:00	677									
9/2	16:00	356									
9/4	9:00	300	194	17	0	61	28	0		6:00	27
9/5	18:00	443	201	17	7	53	25	2	138	17:00	32
9/8	18:00	645	270	60	45	101	26	3	140		
9/9	18:00	432	188	18	0	63	27		136	17:00	30
9/12	18:00	381	152			54	23		152	17:00	28
9/15	18:00	352	131			50	24		147	17:00	32
9/19	18:00	346	123			50	18		155	17:00	32
9/26	18:00	329	106			52	18		153	17:00	29
9/29	18:00	311	100			52	18		141	17:00	29
10/13	18:00	213	62			45	18		88	17:00	29
11/1	9:00	166	60			39	14		53		
11/4										17:00	23
11/30	18:00	74	25				12		35		
12/15	18:00	52	10				12		30		
閉鎖日			12/23			11/20	12/23	9/9	12/26		11月中旬ごろ

◆空欄は人数不明。10/13 までの町内分人数については、このほか夜間に戻る人がいる可能性あり。

【参考】東日本大震災における避難所：12 カ所、避難者数：487 人（平成 23 年 3 月 12 日）

◆資料：岩泉町資料、いわて防災情報ポータル Web サイト（<https://iwate.secure.force.com/>）

## 4. 孤立状況

道路の寸断により特に山間部で孤立（道路の不通）が長期化しました。集落への道路の開通や、孤立集落の全戸避難などにより徐々に孤立は解消し、9 月 19 日までに孤立は解消されました。しかしながら、数字には表れないものの家畜の世話などにより道路が不通の集落で生活を続けざるをえない世帯もありました。

日付	時刻	岩泉町合計		岩泉		小川		大川		小本		安家		有芸	
		世帯	人数	世帯	人数	世帯	人数	世帯	人数	世帯	人数	世帯	人数	世帯	人数
9/2	6:00	428	873												
9/3	7:00	303	622	121	245	51	107	6	19	—	—	113	231	12	20
9/4	7:00	252	547	93	209	37	85	11	32	—	—	101	203	10	18
9/7	7:00	89	211	34	89	26	61	9	27	—	—	10	16	10	18
9/8	7:00	35	68	3	4	18	40	4	8	0	0	10	16	0	0
9/11	8:00	17	30	3	4	4	10	0	0	0	0	10	16	0	0
9/13	8:00	5	9	3	4	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0
9/15	18:00	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5	0	0
9/19	0:00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

## 5. 施設等の被害額（平成30年3月31日現在）

東日本大震災における被害額を大幅に上回る甚大な被害が発生しました。



岩泉乳業



岩泉球場



安家診療所



龍泉洞第二駐車場

区分	被害額	
建物	19億7396万円	住家（8億8828万円）、非住家（10億8568万円）
土木施設等	110億4872万円	河川133カ所（28億5658万円）、道路368カ所（78億3121万円）、橋梁10カ所（3億745万円）、公共下水道6カ所（5348万円）
農業施設	83億5400万円	農業施設（37億2100万円）、農地・農業用施設（43億7500万円）、農作物ほか（2億5800万円）
林業施設	11億701万円	林業施設（1億4445万円）、林地荒廃（8億7510万円）、林産物（8576万円）、森林（170万円）
水産施設	7億3070万円	さけます孵化場・内水面漁業施設等（5億7070万円）、防波堤（1億6000万円）
医療・社会福祉施設など	6億9055万円	老人保健施設等（6億6588万円）、町立診療所（1431万円）、こども園等（1036万円）
商工関係・観光施設	52億9716万円	商工業142事業所（44億1163万円）、第3セクター関連施設（4億6900万円）、観光施設（4億1653万円）
教育施設	3億9534万円	町立小中学校施設（2734万円）、岩泉球場（3億6800万円）
水道施設	11億円	簡易水道施設（11億円）
その他施設	22億7739万円	通信施設（13億3200万円）、消防施設（1億5083万円）ほか
計	328億7581万円	

◆岩泉町内における県管理施設（河川・道路・橋梁）の被害額90億4316万円◆【参考】東日本大震災の被害額 約44億1000万円

## 資料4. 岩泉町消防団について

町消防団は町全域を管轄する本団と8分団で構成されます。さらに分団は各部、その下の各班（全町で28部18班）で構成し、各地区を管轄しています。

平成30年4月1日現在の団員数は524人（男性518人、女性6人）で、うち機能別団員数は59人となっています。

台風10号の際には避難の呼び掛けや人命救助、家屋の片付け、道路を切り開く活動などを行い、8月29日から1ヵ月にわたり、述べ2,459人の消防団員が町を守る活動を続けました。当時は危険な状況下での活動、消防・防災無線が使用できなかったこと、第1分団第1部の屯所など10カ所の屯所のほか車両が浸水被害を受けるなど、多くの活動障害がありました。



岩泉町マップ

地図：岩手県立総合教育センター提供「いわて社会科デジタルコンテンツ集」より  
<http://www1.iwate-ed.jp/tantou/joho/contents/shousya/map01/map.html>

# 資料 5. 支援の動き・仮設住宅について

## 1. ボランティアについて

岩泉町社会福祉協議会では9月1日にボランティアセンターを開設し、その後9月5日～10月31日まで小川サテライト・小本サテライトを開設しました。県内外の社会福祉協議会（以下社協）や、数多くの団体・NPOの協力のもと、ボランティアの皆さんには主には被災した建物の家財、泥の片付けなどを支援頂きました。当時、B&G海洋センター・セレモニーホールうれいら・あつけら館に無料宿泊施設、龍泉洞観光会館駐車場にボランティアキャンプ場が設置されました。また、ボランティア参加者を対象にした各地からのボランティアバスの運行のほか、JRバスや三陸鉄道の運賃無料支援も行われました。

11月28日から平成29年4月1日までは一般ボランティアの受入は休止し、NPOや町内企業による団体ボランティア活動が展開されました。ボランティア必要件数が0件となったのは平成30年7月2日です。

参加人数		H28/9/1～ 11/27	H28/11/28～ H29/3/31	H29/4/1～ H30/7/31	合計	合計対応件数
人数		16,221人	701人	686人	17,608人	947件
岩泉町災害ボランティアセンターへの協力を頂いた主な団体	社会福祉協議会	県社協、県内市町村社協（花巻市・北上市・西和賀町・田野畑村・釜石市・大槌町・遠野市・一関市・平泉町・大船渡市・陸前高田市・住田町・奥州市・金ケ崎町・岩手町・葛巻町・盛岡市・八幡平市・滝沢市）、青森・秋田・宮城・山形県社協など				
	NPO、団体、企業	遠野まごころネット、SAVE IWATE、社会福祉法人経営者協議会青年会、ピースボート災害ボランティアセンター、岩手県北バス、若竹会、災害支援重機ボランティアオープンジャパン、一般社団法人jump、天理教災害救援ひのきしん隊、サーブ岩手、ボランティアチーム援人、いわて生協、大館ボラバスプロジェクト、災害ボランティア活動支援プロジェクト（支援p）など多数				

資料：岩手県社会福祉協議会 Web サイト ([http://www.iwate-shakyo.or.jp/\\_files/00005838/1611\\_03.pdf](http://www.iwate-shakyo.or.jp/_files/00005838/1611_03.pdf))、遠野まごころネット Web サイト (<http://tonomagokoro.net/archives/59073>)、岩泉町社会福祉協議会への聞き取り、岩泉町資料

## 2. 台風災害に係る義援金・寄付金の受入額

皆様から励ましの言葉とともに、多大なるご支援を頂き、心より感謝申し上げます。被災者の生活支援のために配分される「義援金」（保健福祉課管轄）と、復興事業の財源として活用される「寄付金」（総務課管轄）について、金額をご報告します。

義援金 (平成31年6月 20日現在)	区分	岩泉町募集分			県・日赤募集分(町への配分額)	
		受け入れ額(千円)	配分済み額(千円)	残額(千円)	金額(千円)	※すべて被災者へ配分済み
	合計	222,346	215,242	7,104	153,019	

寄付金 (平成30年12月 31日現在)	区分	県内		県外		生活橋ネット募金		合計	
		件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
	合計	267	122,309	246	62,325	7,662	2,595	8,175	187,229

岩泉町は川・沢沿いに住む世帯が多く、生活橋（道路と家をつなぐ橋）が73カ所で流失しました。個人所有のため原則的には個人による復旧となりますが、費用面から復旧が困難な生活橋が多数存在します。本町では単管パイプで仮設の生活橋を建設しましたが、車両は通行できず不便な生活が続いているため「生活橋ネット募金」を現在でも募集しています。引き続きご支援をよろしくお願い致します。

## 3. 仮設住宅の設置状況（平成29年8月7日現在）

地区	団地名称 (○は集会所あり)	建設(供給)戸数				入居 世帯	入居 人数
		1DK	2DK	3K	計		
岩泉	岩泉中野仮設団地○	21	12	9	42	32	52
	志田仮設団地	5	18		23	18	35
	中家仮設団地	3	13		16	12	19
小川	滝の上仮設団地○	11	13	2	26	23	40
	稲荷仮設団地○	8	7	5	20	20	44
安家	日蔭仮設団地		9		9	7	15
	日蔭第2仮設団地○	9	13	3	25	25	46
小本	下中里仮設団地	4	5	1	10	10	17
小計(新設分)		61	90	20	171	147	268
小本	小本仮設団地	9	17	6	32	22	54
	小成仮設団地	5	10	5	20	6	15
合計		75	117	31	223	175	337



# 町歴史民俗資料館(町教育委員会)による被災関連資料の取り扱い

台風10号で被災された皆様にあらためてお見舞い申し上げます。今回の台風では多くの世帯において家財の流失、浸水などの大きな被害を受けました。その中には各家庭でご先祖様から大切に受け継がれてきた古文書や、むかし使われていた道具などの貴重な歴史民俗資料も含まれていました。また、それらの資料そのものが水を被っていないくても、保管場所である建物の被災や、河川改修工事に伴う解体により、捨てざるをえないというケースもありました。

当館は直接の被害は無く、一時休館後に活動を再開しました。これまで震災後に多くの博物館資料を修復してきた岩手歴史民俗ネットワークからは、「たとえ泥をかぶっていたとしても修復が可能なので、資料の保存に努めてほしい」とお声を掛けて頂きました。そこで、当館からも町民の皆さんに被災した古文書や道具の保全と提供をお願いしました。

その後、連絡を頂いたお宅を訪問して多くの資料を寄贈頂いたほか、関係部署への確認のうえ、がれき置き場から資料を収集いたしました。それらの資料の整理は途中段階にありますが、一部は当館で公開しています。また、古文書はボランティアや専門家の皆様にもご協力頂きながらレスキュー（清掃・保全）を行ったうえで、当館にて保管しており、一部は所有者のご希望でレスキュー後にお返ししました。ご協力頂いた皆様に、あらためて感謝申し上げます。

## がれき置き場にて

## 大量の家財に被害の大きさを感じながら



12月 うず高く積もっていた家財



収集された資料



その後 平成30年春…徐々に片付くがれき置き場

(※関係部署への確認のうえで実施いたしております。)

## 多くの資料を寄贈頂く

## 人々の歴史と生き方が詰まった道具たち



床上浸水の被害を受け解体予定のお宅にて



資料館玄関に集まった道具たち



保管場所の課題から取扱いを断念した道具も

## 古文書のレスキュー

## 専門家やボランティアの皆さんの協力のもと



被災した倉庫内部の様子



乾燥中の古文書(大福帳)類



ボランティアの皆さんによる洗浄



処置が済んだ古文書の保管の様子

# 台風 10 号 被災関連資料の一例

今回、当館に集まった道具に関しては、暮らしに最も身近な衣・食・住、特に食に関する資料が多いのが特徴です。お椀やお膳などはまとまった数量があり、かつて冠婚葬祭で家に多くの人が集まった様子を感じられます。次いで多かったのは仕事（生産・生業）に関する道具で農耕、山樵（山仕事）、製糸・織物などに関する道具が見られます。古文書については、昔の経済活動が伺える大福帳が主体で、そのほかは下の一覧表に示したとおりです。



【衣】下駄（嫁入り道具）

南部桐下駄の一大産地であった岩泉を想像できる、美しい下駄たちです。



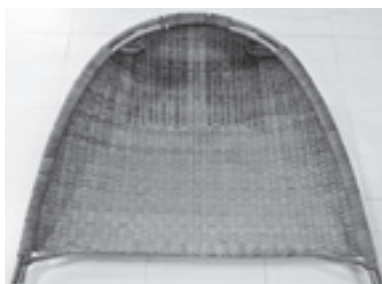
【食】ヤリギダイ

岩泉と言えば豆腐。豆を挽くための石臼を乗せるための台です。



【住】車長持

衣類や大切なものを収納する頑丈な入れもので、車輪付きです。



【農耕】箕（ミ）

穀物の細かいごみを飛ばして選別。竹や樹皮などで作られました。



【染・織】紡毛機（ボウモウキ）

羊毛などをつむいで毛糸にする機械です。



【漁労】腰籠（クビレ）

川で獲った魚を入れたほか、山の幸の採集など多目的に使われました。

## 現在資料館で保管している被災関連資料の一覧（令和元年6月21日現在）

大分類	分類	内容	数量
衣・食・住	衣	着物、履物類（下駄・草履・カンジキ等）等	39点
	食	椀、膳、鉄瓶、各種ザル、各種カメ、樽、桶、豆腐作り道具等	326点
	住	筆筒、車長持、建築道具等	54点
生産・生業	農耕	箕（ミ）、農具類（シャクシ、スキ）、かます等	31点
	山樵	マサカリ、ノコ、ナタ等	28点
	染・織	製糸用具（糸車、糸枠、紡毛機など）等	28点
	畜産	搾乳関係（漏斗など）、牛馬用の草履等	23点
	自然物採集・手細工・狩猟・漁労など	腰袋（ハケゴ）、腰籠（コダシ）、ツマゴ型、ヤリ、ヤス等	21点
	養蚕	板蚕箱（トウカ）、桑切り機械、桑切り包丁	8点
交易	計算・計量具	枱等	8点
	商売用具	大福帳等	95点
交通・運輸・通信	運搬具、通信施設・用具など	背負いかゴ、背中当て、マダ皮、電話機等	11点
その他	信仰（服装・用具）	錫杖（シャクジョウ）	1点
	計算・計量具、薬品、医療・保険具、暦・計時用具	定規、薬箱、時計	6点
	育児用具	育児籠（イチコ含む）	2点
	手紙・文章類	—	174点
	写真・絵葉書	—	189点
	その他・不明	—	36点
合計			1,080点

地区別（寄贈者世帯）：安家 668 点（4 軒）、岩泉 306 点（3 軒）、小川 34 点（3 軒）、小本 17 点（3 軒）、がれき置き場 16 点、不明 39 点



### 町歴史民俗資料館

〒 028-5641 岩手県下閉伊郡岩泉町門字町向 9-1  
電話 0194-25-5125（町社会教育室：0194-22-2111（内線 504））

開館日 毎週土曜日  
9：00～16：00  
平日 要予約

## 体験談に寄せて

岩泉町危機管理監 佐々木 重光

「こちら消防署長、活動中の各隊に告ぐ、只今の時間をもって活動中止、各隊は直ちに安全な場所に退避せよ」…忘れもしない八月三十日夜九時のこと。当時、岩泉消防署長であった私は、少し強めの口調で消防無線のマイクを握りました。

「こちら第〇分団、救助に向かったが現在危険な状況。至急助けを願う。」救助に向かったはずの消防隊からの信じられない救助要請。

次々と消防無線から聞こえてくる災害情報は、喧噪の中での苦渋の決断を私に迫りました。その後、一瞬静まりかえった通信指令室の中で、私は被害の甚大さと活動隊員の身の危険を感じざるを得ませんでした。

事実この時、参集途上の消防職員も濁流に流され、連絡が取れない状況となっていました。そして消防庁舎は後ろから土石流、前からは岩泉橋を越水した濁流が急激に迫って来ていました。

あれから三年を迎えます。台風十号災害は、まさに想像を絶する大災害であったのは事実です。しかし、私たちはこの大災害を経験し、そして学ぶことによって、本当の復旧・復興を成し遂げ、次なる災害に備えることが出来ると信じて諸施策に取り組んでいます。いま、防災行政を担当する私にとって、この経験を多くの方々へ伝え、地域防災力を高めることが町の目指す本当の「防災・減災」につながると確信しています。

二度と「各隊、活動中止」を発することのない「安全な岩泉町」を築くために。

## 編集者より

岩泉町歴史民俗資料館 岸岡 健太

今回、多くの皆様のご協力のもと、体験談集の発行に至りました。

皆さんからお話を伺う中で印象深かったのが、大きな被害を受けられた方でも、「私はまだ被害は軽い方です、もっとひどい被害を受けた方がいます」とおっしゃっていたことです。他者への思いやりを忘れないこと、それが岩泉の暮らしては当たり前であることを感じました。

道路の寸断により、公的な支援や復旧が行き渡るには時間を要しました。そうした中、無事だった人や被害が軽かった人は協力して被災した人を助け、あるいはその余裕がなくても自力である程度乗り切る、地域力の強さも垣間見られたように思います。豊富な湧水は生活を助け、農山村だからこそその備えをはじめとした生活力、そして仕事を通じた技術が助け合いを支えたという事例が各地で見られました。一方で、高齢化や人口減少が一層進んだ地区においては、協力そのものが難しくなってくるという課題もみえてきました。

非常時の記憶は混乱により、曖昧になりがちです。しかしながら、各地区の、様々な立場の方々の話を紡ぎ合わせることで、あらためて思い出し、教訓として伝えて行くことが出来るはずです。

災害時には自身の過去の経験に基づいて行動しがちであることを、自身の今回の経験、そして皆さんの体験からも痛感しました。岩泉町では過去にも水害が発生しています。今回の体験を語り継ぐこと、そしてあらためて歴史に注目してゆくことの重要性を感じています。



# あとがき

岩泉町教育委員会教育長 三上 潤

当町の歴史の中でも過去に類をみない甚大な被害を及ぼした、平成二十八年八月発生の「台風十号豪雨災害」から三年が経とうとしております。

この度の台風豪雨は、まさに未曾有の大災害で甚大な被害を及ぼす事態になり、災害の備えについて、『まさか』ではなく、常に『もしかすると』の意識が必要であることをあらためて考えさせられた大災害でありました。

町では、この台風豪雨災害を受けて、「自主防災の対策」や「地域防災計画の修正」などの防災対策を進めておりますが、学校でも、いつ襲ってくるかわからない災害に備えるために、防災意識の啓蒙が大事であることから、子供たちの命を守るために、「学校における危機管理マニュアル」を策定し、復興教育・防災教育の推進に取り組んでいるところであります。

今回の教訓を踏まえ、この甚大な被害を受けた台風豪雨災害の実態を風化させるはならず、後世にしっかりと伝えていく必要があるとの考えから、歴史民俗資料館事業として、それぞれの立場での体験の聞き取り調査などをおこない、「台風豪雨災害記録誌」の作成に取り組んで参りました。

多くの皆さまのご支援・ご協力をいただき、発行の運びとなりましたことに感謝いたしますとともに、一日も早く被災者の皆さまが安心して暮らせる日が戻ることをご祈念申し上げます。

---

平成28年8月30日 台風10号豪雨体験談の記録集  
— この体験を未来へ —

発行日 令和元年八月二十三日

発行 岩泉町教育委員会

(岩泉町歴史民俗資料館)

印刷所 山口北州印刷株式会社

---

— この体験を未来へ —



復活した水田

岩手県 岩泉町